女子文壇

第二卷第貳號

明治三十九年二月一日發行（每月一回）
明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可



皇太子妃殿下御尊影



（最近御寫眞）

第一皇孫迪宮殿下御尊影



（最近御寫眞）

第二皇孫淳宮殿下御尊影

第三皇孫光宮殿下御尊影

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

弦齋式料理服 無料進呈

增補註釋 食道樂

春の巻 夏の巻 秋の巻 冬の巻 合本

正價金貳圓 郵税金十五錢 臺灣清韓金卅五錢

來る二月十五日迄に此の**非常廉價なる食道樂合本**を買ふ人は各壹册毎に外國製繪葉書の景品を得べく又十人に一人の割合を以て弦齋式料理服**引替券**の封入しあるものに中り給ふの福あるべし、其券を報知社出版部又は新橋堂書店へ御持參あれば**弦齋居士夫人の考案と實驗とに成り三越呉服店にて新調したる最便最利の料理服**一組を進呈すべし

醫學博士瀬川昌耆著

報知新聞家庭記者 天野誠齋篇

增補訂正 實驗上の育兒 上巻

定價六十錢 郵税十錢

下巻近刊

子を持つ親の必讀書 なくてはならぬ嫁入道具

發行所 東京市麹町區有樂町二丁目 報知社出版部

發賣元 東京市京橋區出雲町 新橋堂書店

女子文壇

第二巻第二號目次

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

製本發賣廣告

婦女子達への進物に好適品

日本女子大學教授鹽井文學士。
女子高等師範教授尾上文學士。
東京帝國大學講師佐々木信綱。

巖谷小波
廣津柳浪
山中古洞

先生選評

女子文壇社編輯局校訂

女子文壇 懸賞文集

全一冊　洋裝印刷美　中判上等紙 四百廿頁

▲選評諸家寫眞肖像及懸賞當撰書色刷十數葉入

正價無類低廉 金廿五錢 郵稅六錢 中受けず（郵券代用必壹割增）

此書は女子文壇第一卷の懸賞傑作のみを網羅したるものゝ女子が文章を練り詩歌を學ぶに模範的作文書としては唯一の寶典たるべく殊に附錄として諸大家の作文上の心得と名文數篇を藏せ修養の便に供したるなるべき無比の良書なり（發行忽ち賣盡し增刷成る）

附言＝本書御購求の諸君は上等紙四百廿頁と印刷鮮明を御熟覽の上如何に其價の廉なる乎を他書と御比較好評あらんことを乞ふ

出版元 東京京橋大鋸町 電話本局六〇七 女子文壇社

特約發賣所○東京堂、北隆館、東海堂、上田屋、良明堂

●御最寄賣捌書店になき時は「出版元」へ直接御注文の程希上候

第一回定期增刊豫告

二月十五日發兌（二卷第三號分）

第壹回 女子文壇定期增刊 **きさらぎ**

▲定期發行と同樣 一冊金拾錢 送料無料

此號には淸方畫伯の筆になる石版極彩色の大判口繪（郊外の寫生圖）を添ふ其他寫眞口繪數葉

例に依て鮮麗なり、內容は例號に同じく材料豐富

一月一日發行 女子文壇 **新年號** 增刷出來

大附錄＝古洞畫伯石版極彩色の額繪（東海道の富士）淸方畫伯繪（晴小袖畫）三宅克己先生水彩畫（石版九色密刷）

はがき（水仙少女）其他寫眞版口繪數葉は鮮麗に愷價あり

▲無比低廉 一冊金拾錢 郵送無料

發行所 東京京橋大鋸町 女子文壇社

最寄書店になくば直接「發行所」へ至急御注文を乞ふ

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

渡邊霞亭著

吉丁字

上巻……鰭崎英朋畫
下巻……鏑木清方畫
全二冊菊判洋裝美本
實價各六拾錢郵税各八錢

世態人心の波瀾時に萬丈の山となり、時に千尋の谿となる、變幻百態眞に端倪すべからずと雖も、因緣作報の連續法術として爭ふ可らず、著者霞亭子彩筆を揮ひ其妙諦を說く、筆端神わり光芒陸離い

東京日本橋 春陽堂





▲春陽堂發行圖書目錄進呈

小賣部宛往復葉書にて御申越次第呈送

英詩 夏雲

野口米次郎著

齋藤松洲畫 四六版和裝

題して『夏雲』といふ、ヨネノグチ氏の英詩集なり、是れ眞に夏雲奇峯の奇なるに類せずや、其迸出する詩趣横溢する所、將に造化の巧を奪ふ、加之添ふるに松洲畫伯が丹靑の妙あり、優婉にして而も壯絶、一讀直ちに神遊の境に入る

實價七十五錢
郵税四錢

東京日本橋通四丁目角 春陽堂

野口米次郎著

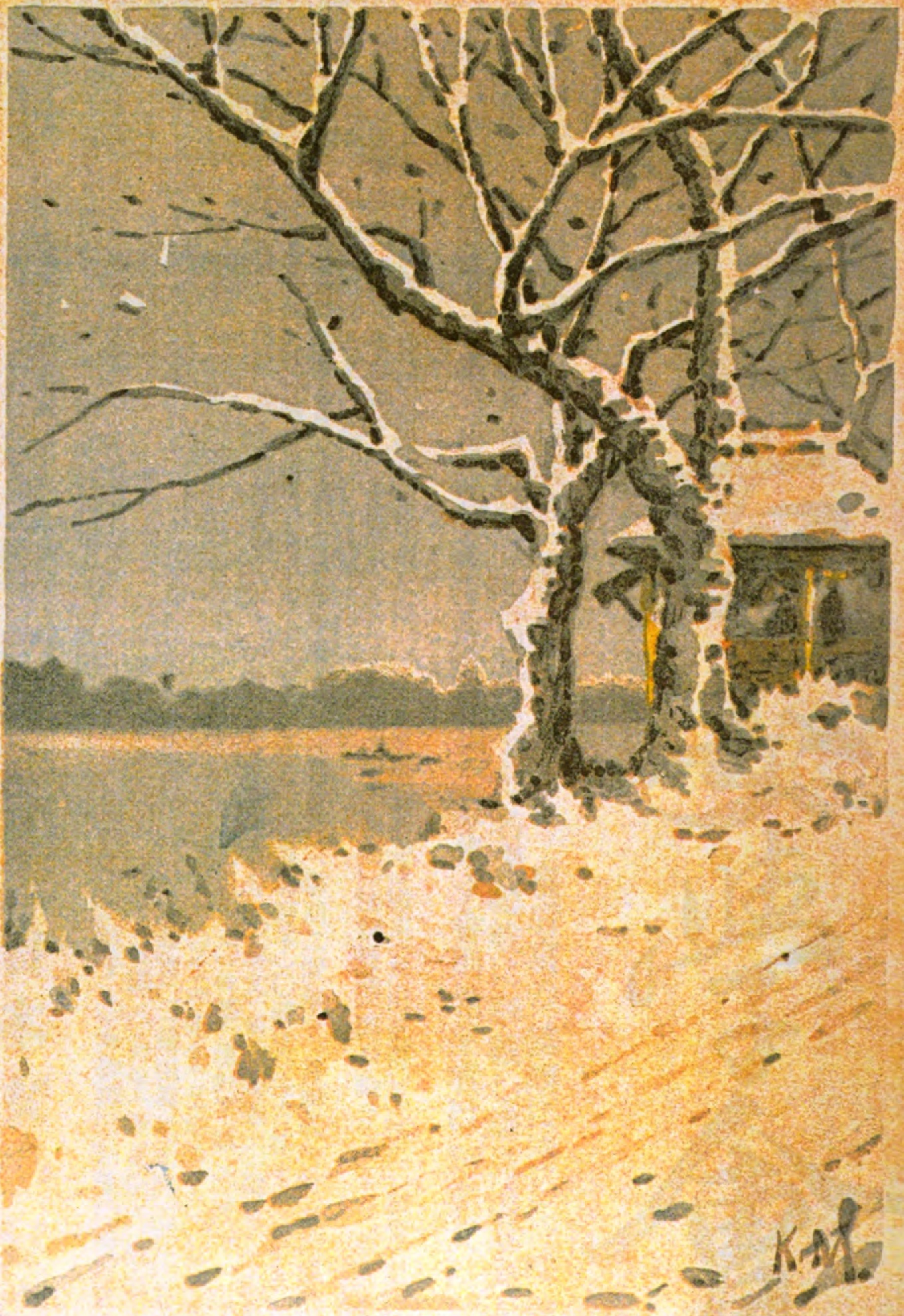
歸朝の記

實價四十錢
郵税四錢

英米の十二年

實價八十錢
郵税八錢

向島の雪



三宅克己先生筆

小島工藝石印

數年難治の慢性胃病を根治し
消化機能を強壯健全になす靈藥

胃病根治劑

從來世に胃病藥頗る多しと雖ども皆一時の苦痛を凌ぐ制酸劑(即ち重曹、マグチシヤ、苦味劑の如き一時おさゑムチスカシ的舊式賣藥)のみにして未だ嘗て根治的に其病の基因を斷つ良藥あるを見ず、本劑は獨逸國高名大醫ノーデル氏處方に基き本邦胃病患者に適切なる嶄新有効藥を配合し百方實驗其奏効顯著なるを確認發賣せし最も進歩せる完全なる新藥にして數年難治の頑固なる慢性胃病にても根本より誓って根治し胃腸を健全にし消化機能を强壯ならしめ食慾を催進し便通を快くし氣力を壯にし精神を爽快活潑にする空前の完全最新藥なれば從來種々雜多の胃病藥を用ひて効なく多年病苦に呻吟せる患者は一日も早く本劑を服し病根を斷絶し無病强健の大幸を得られよ輕症は壹劑重症は貳劑慢性症は參劑にて根治確證す

(藥價)壹劑四拾貳錢 貳劑八拾錢 參劑壹圓拾錢 郵券代用貳割增し

新輸入美容料

肉體色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴婦淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黒き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體純白色に變化し豐美の容貌となるを確證す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は並製金壹圓貳拾錢特別製分壹圓七拾錢

以上貳藥 專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 日新館藥房

月やくおろし

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず忽ち快通流下する特効あり本劑參劑分を用ゆれば二三ヶ月間滯りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を用ゆれば半年以上の月經閉止及び血塊にても必ず立處ろに流經す且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及惡血毒血を一掃するを確證す但し本劑は其奏効極めて峻烈顯著なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢

(注意)本劑の大盛を羨み近時續々怪しき無効なる類似僞藥顯はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



わきが 腋臭

根治確證新發見藥

醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても誓て根治し決して再發或は他病に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に試み苦惱を脱せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢着金即刻送藥す郵券代用必ず二割增の事

以上貳藥 專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 日新館藥房 (電話下谷五五四六番)

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

日本婦人の實用的雜誌出でたり

婦人世界

一月三日發行　月一回　一卷　第壹號　一冊　拾五錢（郵稅壹錢五厘）　半年分郵稅共九拾錢　一年分壹圓七拾五錢

女學生主婦諸姉に對する本誌の大同情を見られよ

▶口繪◀

◎皇太子妃殿下　最近の御尊影

◎皇孫光宮殿下の御尊影

◎『春の人』（彩色水彩畫）中澤弘光

◎『春の家』（石版彩色）木元平太郎

◎女流教育家の肖像（三輪田、跡見、下田、棚橋、矢島諸姉）

◎三名媛の祝歌筆蹟

◎新春祥瑞松上の鶴（天下の珍品）

◎日本女子大學校の新遊戲

◎大附錄

石版彩色畫　勅題に『新年の川』を畫ける紀念珍品（跡見花蹊女史筆）

見よ 趣味實益兼備の内容を

▲日本婦人座右銘　▲三輪田眞佐子　▲棚橋絢子　▲嘉悅孝子　▲下田歌子　▲鳩山春子　▲有島幸子

▲日本婦人の美點（日本婦人の美點に付大隈伯。島田三郎。成瀬仁藏。澤柳政太郎。幸田露伴。林吾一。浮田和民諸大家の意見）……

▲家庭（教育實驗）苦心談……鳩山春子

▲牛乳育兒法……ドクトル加藤照麿

▲日曜日の暮し方……後閑菊野

▲お節句の改良……村井弦齋

▲樂しき家庭……高信峽水

（▲歌かるた必勝法▼）

▲女子の品性と戀愛……加藤文學博士

▲山脇家（家庭）

▲春の料理

（小說）▲新年の家……河井醉茗　▲春宵……兒玉花外　▲新天地……佐々木信綱　▲片袖……與謝野晶子

▲女學生遊學の注意……山川前大學總長

▲男子不可見記　▲名家の姻戚　▲お伽噺

▲男ごゝろの記　▲弦齋式料理服

▲婦人の面影（安井哲子女史）……

小說

亂れ雲……田口掬汀

新式 女夫盃……堀内新泉

▼紙質は最良　本文中に珍奇なる寫眞（弦齋氏夫婦肖像を始め）挿畫滿載

發兌元　東京市京橋區南紺屋町十二番地　實業之日本社（電話新八七四）　賣捌各地書店


ネッスレス
ミルクフウド
各國帝室及王家御用
歐洲諸國及ビ本邦名醫ノ讃辭ヲ辱フセル者ナリ
小兒病者又タ平素不消化ニ苦ム者ニ適當ノ最良食物ナリ
◉最モ盛カンニ藥舗洋酒食料品店ニ販賣ス
NESTLE'S
FOOD
DIPLOME D'HONNEUR-PARIS
NESTLE'S
MILK
FOOD
PERFECT NUTRIMENT FOR
INFANTS CHILDREN AND
營業品目錄御申越次第送呈
東京市京橋區南傳馬町三丁目
奧田屋商店
電話本局四百五十二番

皇后宮職權掌侍山川操子女史



英米新流行頭髪の結び方（一）



(1)頭髪を二ッに分け、縮毛を双方に結びて垂らす



(2)最も美術的なる結び方にして、全躰に甚だ低く結ばる



(3)両鬢を膨らし、眞中を長く結び、縮毛を双方に巻く



(4)飾冠式（コロネット）結びかた、最初に中部に高く巻く



(5)一躰に廣く結び、後方に縮毛を三ッに巻く



(6)珍奇なる結びかた、全躰に少しく括らす



(7)略(4)に全じき結び方にして、高櫛にて結ぶ、一時廢れしが近時再び流行の兆あり

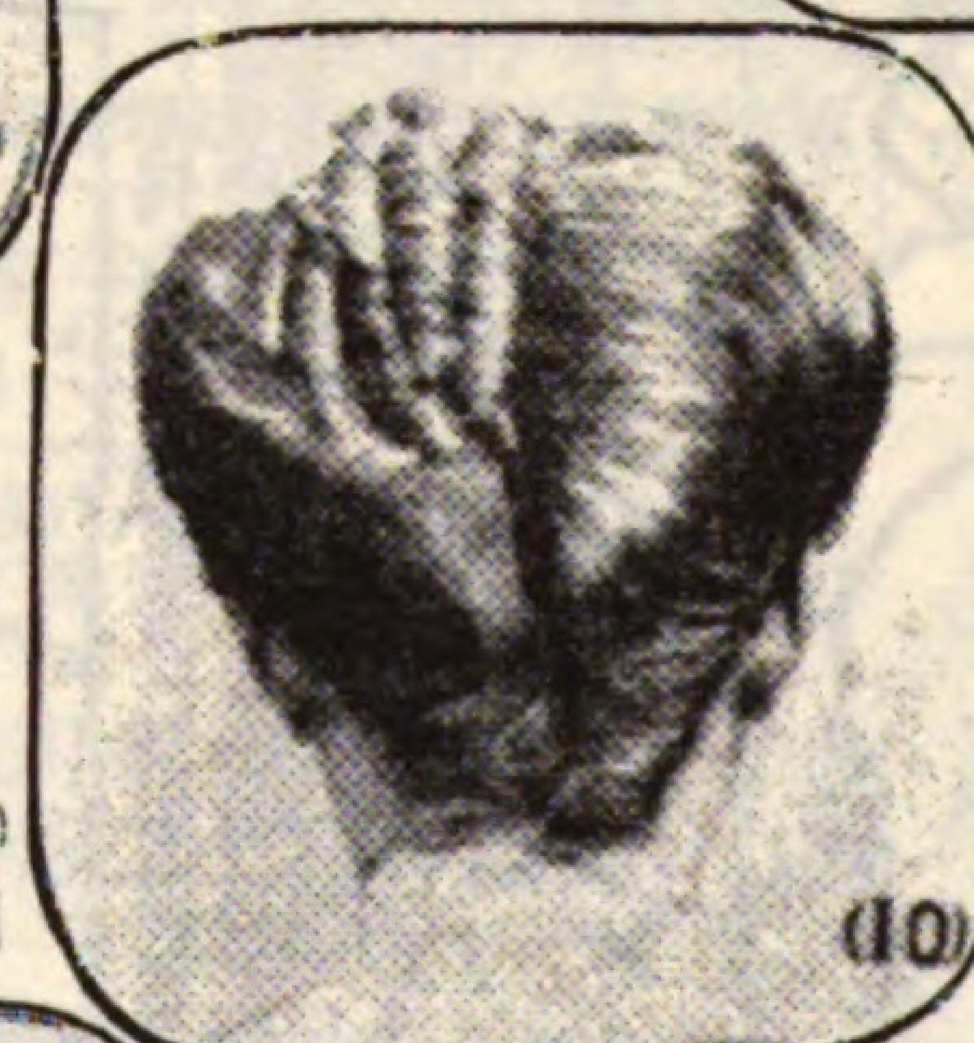
英米新流行頭髮の結び方（二）



(8)頭髮を二ッに分け、下の縮毛を最初に結ぶ



(9)これは三ッに結び、二ッの端にて結ぶ



(10)眞中より左右に分け後部をフランス巻にし縮毛を下に結ぶ



(11)最も簡單なる結び方にて、頭髮は後部にて低く結ばる



(12)一躰に縮らして膨らす、帽子を戴くによろし



(13)新流行の夜會結び、捻れたる髮と縮毛を一躰にゆるく結ぶ



(14)華麗なる處女の結び方リボンにて二ッに結ぶ



後姿　(特別第三賞)　陸中一の關　佐藤伊與子
動物園(天賞)奈良市押上町藤田藤子方藤田そめ子○景色(地賞)
京都市西陣紋屋町濱部郭公女○おとり次(人賞)小石川弘子

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

高等化粧水 フイテルミン



定價一本金二十五錢　三個入七十五錢

本品は高等化粧品中の化粧品なれば貴婦人令孃方の御常用に適し皮膚を艶美滑澤ならしむる効あり

(改良すき油 柳糸香)メラセリン……一個五十錢
(改良びん附 玉椿)コラキン……一本二十錢
(改良水油 花かつら)ナイトリシキン……一本四十錢
(ふけ取香水 花たちばな)ラッリン……一本六十錢
(あか取香油 谷風)ア子モシン……一本四十錢
(ひげ油 住の江)プロ子ミン……一個三十錢
(うがひ水 しのゝめ)エオチン……一個三十錢
(福原ねりおしろい)……一個廿五錢

新製發賣 旅行携帶用衛生齒磨 本品は高尚なるゴム器入一個三十錢

(總て美麗なる三個箱入に有之御進物用に適す取次は至る處に有之候)

衛生齒磨石鹼　大廿五錢　小十五錢

洗浴化粧(花の露)エリノイン

は高尚なる芳香藥及び緩和劑の配伍しあれば朝夕の盥嗽及洗浴に際し此の液をたらし用ゆれば如何なる水と雖ども皮膚肌色を損ずる患なく、色を白くし殺菌消毒の効力有る衛生上必要の逸品なり　定價一瓶入八十錢



衛生藥品 材料器械 處方調劑

調製本舖　東京新橋出雲町角 電話新橋三二四番　福原資生堂

國文學講筵

一月八日より第三學期開始○科目及講師如左

祝詞、宣命、萬葉……菊池文學士
文章論、朗詠……杉文學士
源氏(宇治十帖)……長谷川文學士
文學文(江戸時代)……鈴木文學士
風俗史、源氏(若紫)……垣內文學士
和歌史……山內文學士
國語學史……龜田文學士
俳諧史……志田文學士
大和、文學史(平安朝)……森文學士
大鏡……渡邊文學士
近世名家文……莊田文學士
落窪、鶉衣……長文學士

科外每週一時間　芳賀文學博士　藤岡文學士

月曜より金曜、每日午後三時より三時間。土曜、午後一時より三時間。日曜午前八時より十二時まで四時間

聽講者は此際申込むを便とす

東京本鄉壹岐坂　國文學會

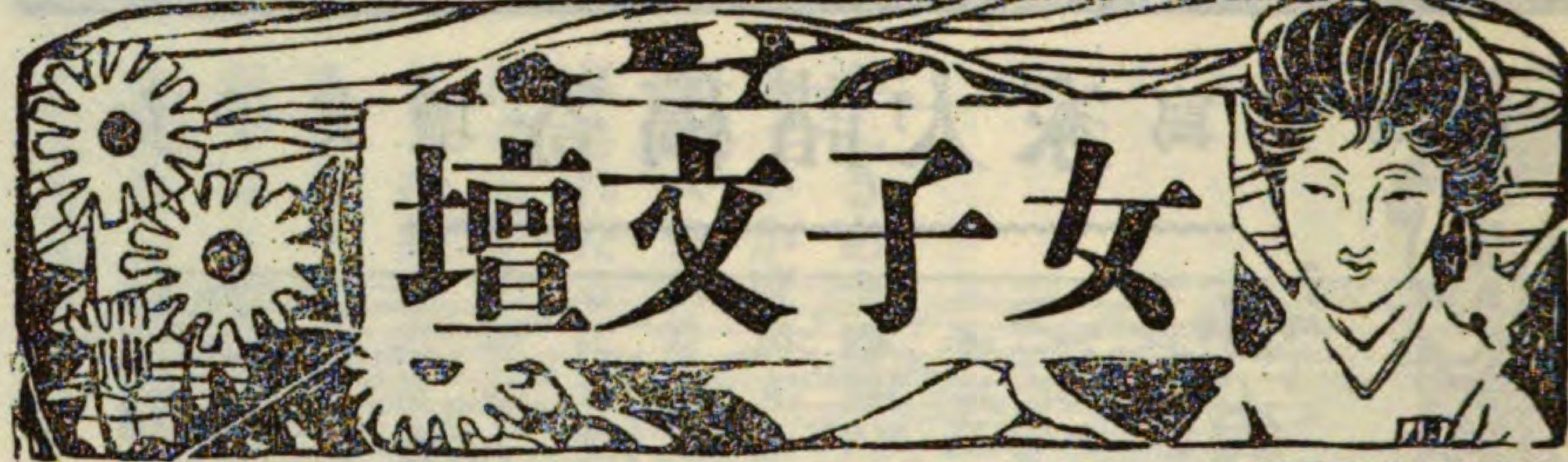
規則書は郵券二錢封入申込あれば直に呈送す

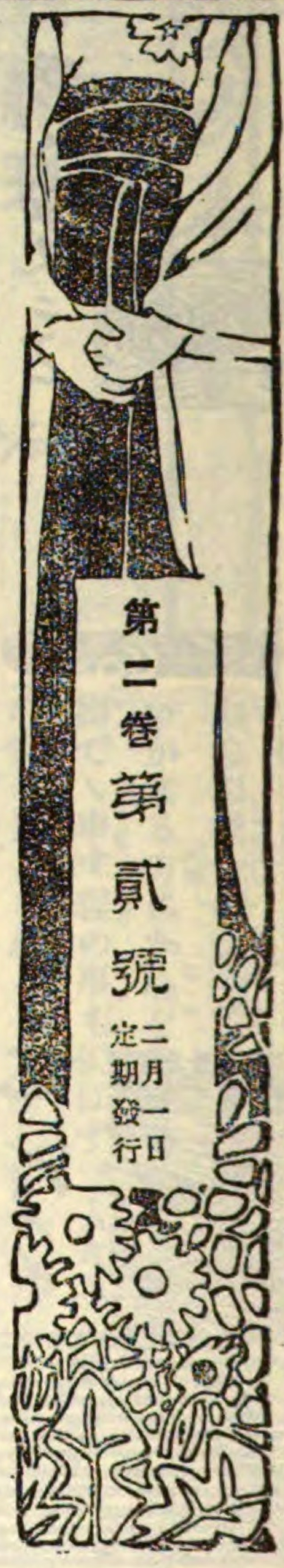
((歌集)) おもひ草

歌集思ひ草は帝國大學文科大學講師佐々木信綱氏が十數年來苦心の作をあつめし歌集にして清新の想と雅馴の調と氏が特色を發揮せるものなりあるは悩みある人の胸に慰藉を與へあるはさびしき旅窓のよき友なるべく裝禎うるはしき集なり

正價郵稅共金五拾貳錢

東京神田小川町　竹柏會

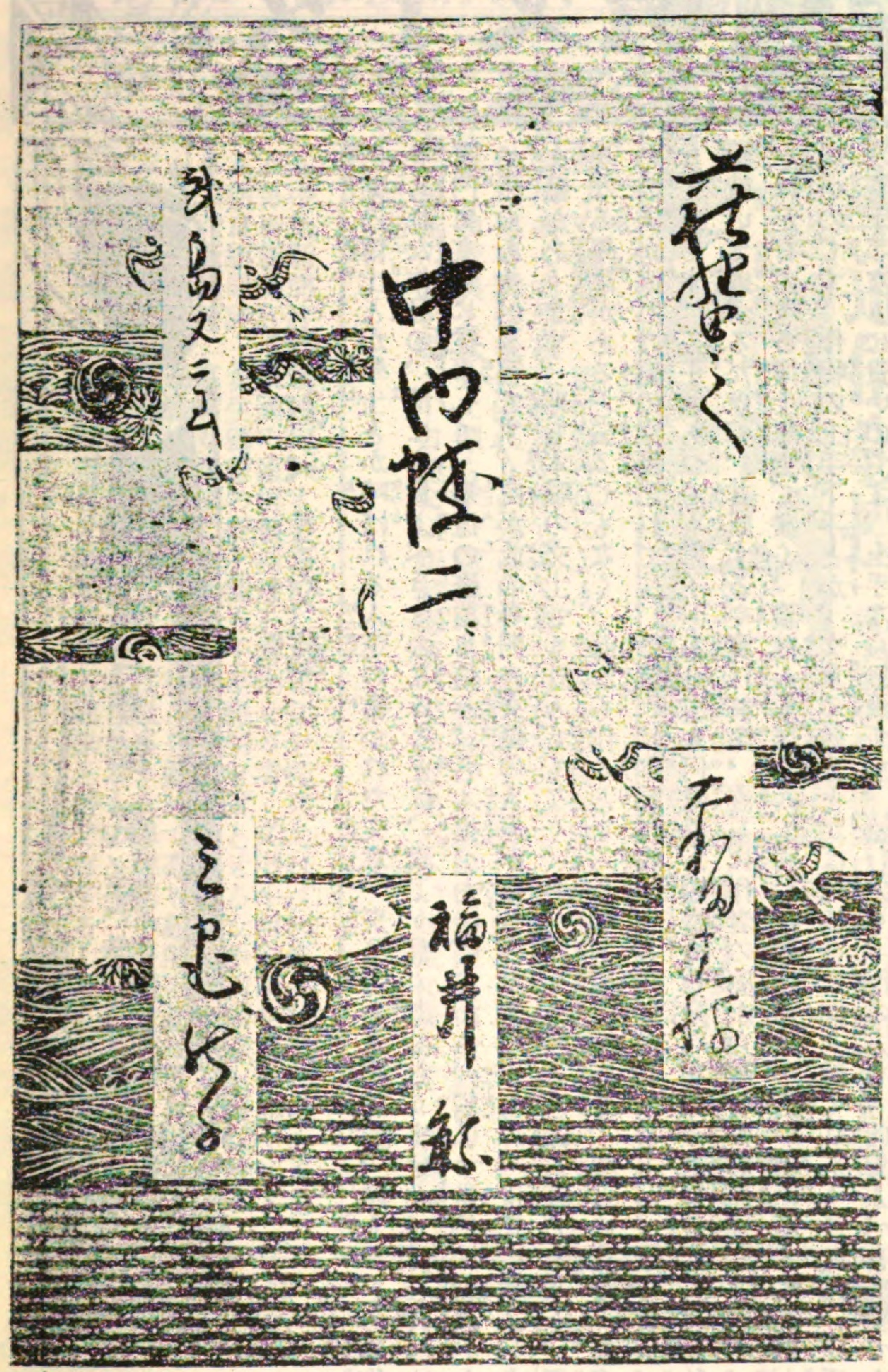




貴ぶべき文藝

何某の博士とか學士とか呼ばれる人達の書かれた文章、又は名ある小說家、詩人などの創作せられた作品の、世にも貴ぶべきものなることは、素より言ふ迄もありません、併し其等は專門に文藝に從事して、斯道の修業も積み、名も揚つた後ですから、謂はゞ當然の結果として然もあるべき筈です。處が此の專門の文藝の人達が作られたもの以外に、世にも貴ぶべき文藝があります。即ち本職の文士でも詩人でもなく、名が聞えて居ると云ふ譯でもなく、深奧なる學識があると云ふでもなく、而かも作るところ金聲玉振の響ある、無名の文士、無名の詩人が成した處の文藝之れです。言換れば本誌に滿載せる詩文の如きものが、最も貴ぶべき文藝です。花子とあつても露子とあつても何處のお孃樣やら分らない、讀む人は只其作物に就いて感ずるだけで、其感ずるや實に純潔、直ちに作者の胸から讀者の胸に傳はるので、それが有名なる博士學士でなく、讀む人も作る人も同じ階級に在るから、猶更讀んで興趣が深いのです。作物の上手下手とか、文章の熟否とかは此場合に問ふ處ではありません、下手なら下手なりに貴いのです、上手なら猶更です、讀む方も、作る方も、此貴ぶべき文藝であると云ふ事を自覺なさると、讀むにも張合があり、作るにも力が籠らうと思ひます。

女子文壇寄稿諸大家寫眞筆蹟





心の緒琴

佐々木信綱

とだえせる友に

美しきあやの錦、半織りなされて打捨てられたらんには、いかばかり殘り惜しき思ひ致し候べき。それにも比べつべく、又更に深き恨は、親しき御交はりの忘れられたるにて候べし。

はらからの如く睦びし學校時代も過ぎて、遠く離れ〳〵の身となり候てより、いつよりともなくとだえがちになりたる、來し方思ひ起し給はゞ、その機織る人が、おりあげしきぬとりいて、そを織りし頃の思ひ出に沈むにもいやましたる深き思ひさせ給はずや。

さてもその後はいかなる世をか過ぎ給ひし。安らけく幸ある御世なりとは人傳に承りをりし物から、なほ人知らぬ樣々の世の旅路をも過ぎ給ひしなるべし。今はいかなる方にか心をむけゐ給ふ。我身の上、何も取り出てゝ申す程の事も候はず、人なみの世をおくりて世の常の母となれるとおぼし給はゞたり候ものゝ、君と共に昔ながらの心の調奏であふを琴の絃切れたりとにも候はず。

こよひ秋の夜の月すみ渡りたるみ空眺めて、そゞろに思ひ出でらるゝ過來し方、折から送りこされ候學校の校報によりて、御住居の所さだかに知るを得、御なつかしさたへず。取り急ぎ音づれ申上候。せめて都のうちに御出でなばと、雲井遠く隔て奉ることの恨めしく、近き寫眞一葉さし上候。御もとよりも給はるを得ば嬉しさいかばかりなるべき。かしこ。

未だ御目にかゝらぬ御主人の君に宜しく御紹介なしおき給はりたく。

その友よりの返事

昔ながらの御手の跡とめて記し給しなつかしき御名、

まづ心打騷ぎて、封押し切りしにて候。嬉しき御言葉の數々、そのかみおぼゆるあはれ深き御筆の運びは、今なほ御みやび心の程思ひやられて候。

誠や昔共に奏でし二つの小琴の、幾年月をさかりゐて、こゝに又あふをえし思ひ、君が心の絃のひゞきと共に調べあふ音のなくてや候べき。御文よみて、幽なる昔の思ひ出にくれ候ほどの心地は、たとへば朧月夜のうすあかりに昔のすみか望み見たらん思ひ、げにいひがたきものにて候ひき。

安らかに幸ある世とは、まことに人目にて候べし。安らかに幸ある世といふものゝ、いかなるものなるかは誠によく知りたりと存じ候。さるよ今はくだ〳〵しうも申しあげじ。御うつしゑ十年昔の忍ばれて候ものから、いたうも變り給へるものかな、矢がすりのお召にさげ髮風になびけ給ひしそのかみの學校すがた、いづこにか求めうべき。さては我のを見給はゞ、君もいかに思ひ給はんといさゝか心恥かしくも候へど、御もとめもだしがたく、先頃寫しゝものさし上候。

仰せの如く山河隔てゐ候身の、今更うらめしく、秋風に傳ふる思のみしげくて候。扨は申す迄もなく行末の深き御交りこそ願はしく候へ。くさ〳〵の昔語は折にふれ時につけて申しあぐべし。今はなほ幼きうち小切人形などのことよなき寶秘めおきし手箱に向ひて開かまほしきやうの、又ひとり秘めおきたきやうの思せしをおぼゆるにて候まづはかしこ。

着京のしらせを故郷の母に

一昨日出立の折はいろ〳〵と厚き御心ぞへを給はり候事、たゞ〳〵御禮申し上候。さて旅路何のつゝがもなう、只今伯父樣方に着いたし候まゝ、御安心あそばされたく候。始めての旅行、めづらしき海山の景色の、たゞ樂しく面白く、醉ひ候ふ人も少なからず見うけ候ひし汽船にも、私は少しも醉ひ申さず、東海道の汽車に乗り移りてよりは、道々のうつくしき眺めに打興じ申し候。たゞ進みゆくまゝに、なつかしき母上ゐます古里の遠くなりゆく事のみ悲しく、やがて知る人もなき都大路のたゞ中に、ひとりたゝむ身かとそれのみ心細

く存じ候。されどこれも外ならぬ我身の修業の爲、學の道修め得て母君喜ばせまつらむすべと思へば、悲しむべき事ならずと思ひかへし候。新橋につき候時は夕方、國の停車場の百倍もあるべき大なる建物に、電燈星の如く輝きて、人々雲の如くむれをるさま、たゞ〳〵打驚かれ、大いなる人波の海原にたちたる心地いたし候ふに、御迎へに御出下されし伯母樣の姿見え候時の嬉しさ、夢のやうに覺え候。さて車にてこゝにまゐり候道々の賑はしさ何と申すやうもなく、眼くるめくばかりに候ひき。伯父樣御宅につき候に、皆樣何くれと御深切に御世話下され、御一緒に御夕飯頂きつゝ、古里の御話さま〳〵御話致し候。母上の御言傳もすべて申し上候。よく母上の手放し給ひし事よと伯母樣ともども申され、なほ行末は出來うる丈の世話すべければ、安心せよと御親切に御話し下され候。皆々樣御健やかにて、伯父樣は先年御地に御出ありし比のとほりにて、少しも御年めされし樣子なく、太郎樣は見違へるほど大きうなり給ひ、今は高等小學に通ひをらるゝよしに候。

まづは着京の御知らせかた〳〵、只今夕げをへて休みをり候ふひまにしたゝめ候。いづれゆる〳〵申し上べく候。

伯父樣伯母樣よりよろしく、御土産物の御禮などくれぐれも傳へられ候。かしこ。

旅だちする友に

いよ〳〵明日は上方へ御出立あそばされ候よし、樣々と樂しかるべき御旅路のほど思ひやられて、たゞ〳〵御羨しく存じをり候。こゝかしこ美しくめづらしき境など見めぐり給ふらむ折ふしは、都べに君があたりたえず思ひをる友の上忘れ給ふ事なく、折々の消息給へかし。旅になれ給はぬ御身の、御からだいくへにも御大切にあそばされたく、今は樂しき旅路つゝがなくをへ給ひて、さま〳〵の面白き御物語もたらして歸り給はむ日を、一日も早かれとまち渡りをり候。親しく參上御別も申上たけれど、御支度などにて何くれと御忙はしかるべきところをとて、さしひかへ書して申上

候。新刊の詩集一卷御かばんの中に入れさせ給へとてかして。

ナポレオン一世の母

學習院教授　大村仁太郎

十目の見る所十手の指ざす所、ナポレオン一世は確かに千古の英雄であります。余は常に此大人物を育てあげた母たる人の徳を想像し、追慕して、徐ろに敬仰の念に堪へぬのであります。

由來彼女の事に付いては、甚だ記載に乏しく頗る遺憾に感じて居ましたが、頃日偶々チユウチー氏の著書「ナポレオンの母」を通讀する機會を得て、知らんと欲した其人の俤を腦裡に描く事が出來ました。よつて爰に同書より得たる事實に基き、此稿を起したのであります。

世亂れて英雄出づとか、彼の有名なるナポレオン一世も、正に其數に漏れぬ一人であります。彼が地中海の一孤島コルシカに於て、初めて此世の光明に接したのは、西暦一千七百六十九年で、頃は恰も歴史に名高き佛蘭西革命の種子が、其萠芽を吹き出さんとする時代でありました。

二十六歳の砲兵中尉より崛起して、終に佛蘭西國の主權者となり、勢に乘じて遠近の諸國を風靡した彼は、決して突如として、此虚空に湧き出た幻影ではありません。同じく他の子供のやうに呱々の初聲を擧げて、此世に生れ、母の乳に育つたのであります。

春には馥郁爛漫たる花を咲かせ、秋には多肉多漿の美味なる實を結ぶ樹木も、四季時に應じ、鋏を入れて培へば、花實共に愈々其美を増し、其量を増す事は、誰しも知る所でありますが、それと同じく、希望の光明前途に輝き渡れる子供も、親の保育に依つて、一層多幸の未來を得るものであります。それには別けて父よりも母の力が偉大なる効果を奏するものであります。例へば彼の世界の文壇に雷名を轟かしました佛蘭西のユーゴーの如きは、其兩親が黨派上の衝突から、常に其居所を別にして居ました爲め、專ら母の保護によつ

て、赫々たる芳名を千載に輝かしたのであります。又次に述べますナポレオン一世の如きも、彼の兩親が性格上天淵の差を有して居ました爲め、一に母の敎育によつて、稀世の英雄となつたのであります。

さてナポレオン一世の兩親は、孰れも伊太利の貴族の系統から出たのでありますが、生れは共にコルシカ島であります、彼等の生年に就ては、世間種々の說がありますが、爰には其最も信を措くに足るもの一つを擧げて置きます。

父の名はカールと云ひまして、西暦一千七百四十年に生れ、生長後は伊太利に遊學し、法律を硏究して學士の稱號を得ました、母はレチチアと云ひ、一千百五十年に生れたのでありますが、當時コルシカには、極端なる男尊女卑の陋習が行はれて居る時代でありましたから、勢ひ女子敎育を等閑に附して居ましたので、彼女も亦さしたる敎育を受けなかつたのであります。

カールが未だ笈を負うて伊太利に遊學して居ました時、ある日叔父の手紙に接しまして、コルシカに歸らなければならぬ事となつたのであります、之れは外の事ではありません、叔父が平生から望を屬して居たレチチアとカールとを結婚せしめやうとした爲であります。

歸國後、カールは親しくレチチアの家に往來しまして、彼女が圓滿なる婦德と窈窕たる美貌とを具へ、加之巨額の遺產をも有する事を知りましたから、結婚の約は忽ち成立して、時は一千七百六十四年六月、佛蘭西のルイ十五世王の面影に髣髴たりと、世に持て囃された、風采俊爽の靑年と、コルシカ第一と稱へられた、柳容花顏の處女とは、玆に目出たく合巹の典を擧げたのであります。

さて之れが世の常の女ならば、未だ人形でも玩具にして嬉戲するやうな、少女氣の失せぬ年輩でありますが、レチチアは今や既に一個の歷とした人の妻となつたのであります。世間は此夫婦を正に一對の佳逑と呼びましたが、彼女の未來は果して然程に幸福であつたのでせうか、否憐むべし、彼女の身邊には、山なす怒

濤狂瀾が、身も砕けよと打ち寄せたのでありまして、彼女が生涯の大部分を占むる痛ましき運命は此時に於て其序幕を開いたのであります。

情緒の感應、性格の一致等は、不幸にして彼等夫婦の間には見出し得なかつたのであります。本來一心同躰であるべき夫婦としては、彼等は實にあらゆる點に於て、あまりに相反的でありました。假りに二人の間に生れたる子女の將來を彼等より除き去るとすれば、其結婚は全く無意味のものと成り終るので、レチアの身に取つては、寧ろ不幸の種を蒔いたものと云ふべきであります。以下述ぶる所によつて、讀者は其大畧を知る事が出來るでせう。

凡そ有名なる人物の父としては、世にカール程缺點の多かつた人はありますまい。彼の渾身はやがて缺點其物であると云つて可い位です。彼の胸中は常に勃々たる野心と、抑へ難き不平とに充ち滿ちて居りました。多年伊太利の檜舞臺に立つて法律を研究した彼にはコルシカが自己の立脚地としては餘りに小さく感じられたのであります。己は名門の產である。學士である。何ぞ無智曚昧の島民と共に齡せんやと。彼は自負尊大の念にのみ驅られて、一時は寧ろ無爲徒食の恥とすべきをさへ知らなかつたのであります。

嘗て大學卒業の祝筵を開いて、年收入の數倍を只一夜の歡樂に費した彼は、今や社會に於ける何等の位置を得て居ないにも拘らず、なほ奢侈の風を改めませんて、綾羅錦繡の華やかなると、美味膏粱の甘きとに憧れ、只管其肉慾を滿足せしむる事に汲々たるの有樣でありました。爰に至つて經濟上の困難を生じて來るのは必然の結果でありまして、彼は遂に金錢の奴隸となり、恰も饑渴に迫つて居る狼が生血を吸はんとして、あらゆる殘虐を逞うするが如く、彼は其懷を肥す爲めには、野卑陋劣の手段をも厭はなくなりました。されば年々多額の收穫がありました妻の葡萄園を私かに賣却して、口腹の友を招く一夕の費用に代へた事などは、珍らしい事ではありません。彼の言ふ所は、實行の伴はざる大言壯語のみで、其胸中には常に幾多の

希望と計畫とを持つて居ましたが、然も是れ等は皆朧氣に企てられ、輕卒に着手され、拮据黽勉、飽くまでも目的を貫徹せんとする忍耐力などはなく、悉く半途にして挫折するが常でありました。只彼は此間に於て佛國とコルシカとの關係を密接に結び付けたる故を以て、佛國人はコルシカに於ける自國の利益は、一にカールに依つて穫取せらるべきものと信じて居ましたので、之れが爲めに彼が佛國に旅行した時、大に其國人の注目を惹起したのであります。彼は此機に乘じて東奔西馳、躍起に運動をした結果、終に佛國政府の設立したコルシカの農林學校及び食鹽製造所の長官に任ぜられたのであります。

元來國家と云ふ觀念よりも個人的思想の發達した彼は、此位置に慊焉たらず、隴を得て蜀を望むの念は次第に熾になつたのであります、從つて現在自分の盡すべき職分は之れを忽諸に附して、更に幾多の企圖を書き初めましたが、此際限なき希望の幻影を實現し、之を獲取せんとした彼は、今日は伊太利、明日は佛蘭西と、極めて輕卒に歩き廻つて、コルシカに於ける其寓居には、席暖かなる時がなかつたのであります。彼は偶々希望の一半を遂する事がありましても、傲慢不遜、更に復分外の慾望を果さんとする心が燃え上りまして、それがやがて彼を元の杢阿彌として了ふのであります。

如上の性行は、殆んど彼の生涯を一貫して居たのでありますが、彼は多年の鯨飲に中てられて、不治の病床に呻吟するに至れる晩年には、漸く其迷夢より醉めまして、妻子に對しても轉た慚愧の情に堪へなかつたのであります。又本來無神説を唱導した彼が、漸く敬虔の念を起すに至つたのも、此時でありました。斯くて彼は未だ不惑の齡にも達せずして、堪へ難き身心の苦痛に腕きつゝ、不歸の客となつたのであります。

嗚呼絶世の英雄ナポレオン一世の父カールが、果して斯の如き人物であらうとは、吾れ人ともに夢にも想はなかつた所であります。然らば其母レチチアは如何なる人であつたのでせうか。之れを知るのは更に一段の

興味ある事に思はれます。一言にしてレチチアの性格を云へば、即ちカールと全然反對で、眞摯率直、あらゆる婦人の美德を具へて居たと云ふの外はありません、彼女は決して分外の慾望を懷きません。すべて事物の結果と同化して、常に滿足の意を表して居たのであります。夫とは異つて身分の高下などは更に意に介しません。極めて平民主義で、自由平等を愛し、華美虛飾の弊を忌み、美酒佳肴の贅を避け、身は殆んど連年に亘る妊娠の辛き目を物ともせず、當年二才三才などの幼兒を抱いて、僂麻質斯に起居の自由を失つて居ました叔父の奉養看護より、放心輕卒なる夫の世話まで、家庭の一切萬事を一身に引き受けて、花薫る春の日、月清き秋の夜、長き間にも、寸刻の安息を求めず、只營々として働いて居たのであります。

夫の浪費に家政上の困難は益々度を強めて、今は經濟上の問題までも、彼女の一身を攻めかけ、一家の浮沈は全く彼女の弱き双肩に懸つて來ました。斯かる中にも叔父は、唯自己の金匣のみを重くせんと計り、カールが旅費の殘額までも、眞先に奪ひ取つて己の懷に詰め込むのであります。彼女は此苦境に陷り止むを得ずして、節約に節約を重ねます故に、世間よりは身分を顧みざる貪慾者との非難を蒙り、殆んど絕躰絕命の難境に立つたのであります。

門閥と容貌とより云へば、カールとレチチアとは、正に一對の好配偶であつたかも知れませんが、性質の上にかく、大なる差異がありましたので、夫婦の間には何等の慰藉もなく、絕えず云ひ知れぬ心の惱みに閉されて居ました。レチチアの運命には、何人も徐ろ同情の涙を灑ぐのでありますが、然し彼女の神に對する深き信仰は、十分其苦痛に打克ち、總べて人の運命は神の手に委ねられてあるもので、人爲の如何ともする能はざる所であると諦め、よく自分の境遇に甘んじ、晩年家計が益々困苦に陷つて、日々の糧にさへ思を惱ますやうになりました時も、氣丈なる彼女は獨りよく貧困と戰つて、日夜衣服を脫かず夫の病床に侍して、看護にあらん限りの力を盡しました。此時に當つて長子

を初め、ナポレオン其他多くの子女は、未だ幼少でありました故、失の死後に於ける打續いての彼女の辛苦艱難は、實に筆紙に盡し難い程でありました。凡そ此時代に表はれました彼女の美德は、後年地位名聲双びなき佛國皇太后としての時代に於ても、少しも變らなかつたのであります。

さて又彼女の最も力を盡した子女の敎育に就いては、更に感ずべき點が多いのであります。すべて子女の敎育は、冷淡なる姑や、無頓着なる夫の助力を俟たず、專ら自分一個の考に依つて之れを施したのであります。彼女の言に、

「子供の敎育には、深く之れを愛する時と、嚴しく之れを躾ける時との區別を立てゝ置かねばならぬ事と信じましたから、妾は常に此方針を誤らないやうに心掛けたのであります。妾の子供等は、眞實此御庇て、親を尊敬し、よく其命令に服徒するやうになつたのであらうと思ひます。

されば如何に溫かき慈愛と、嚴格なる訓戒とを以て、彼女が母たるの務を盡したかは炳焉なる次第であります。

尙セント、ヘレナ島に流されたるナポレオンが、二三の機會に發した言を綜合すれば、次の如くなるのであります。

「余の少年時代には、喧嘩口論の絶間なく、實に人一倍粗暴な男兒であつた。母は余の惡行を毫も恕する事なく、嚴格に懲罰したが、愛には偏頗なく、偶々美事を爲せる時には口を極めて賞賛したのである。嗚呼余に與へし母の感化は實に偉大である。余の有する總べての嗜好と總べての長所は本來悉く母の賜物である。

又終焉に近づきました彼は、今更の如く母の德を欽慕し、侍醫に對つて、

「余を忠實に看護し、常に苦痛を和げて呉れた國手の恩は至大であつて感謝の辭がない。然し余が母より受たる高恩の甚大なるには比べくもないのである、

と云ふたのであります。更に長子ヨゼーブがレチチア

を評した言に、

一、母は氣丈の婦人であつた、賢妻であつた、良母であつた、否良母の龜鑑であつた、

と云つて居ります。眞に適切なる讚辭であらうと思ひます、之れによつて見るも、彼女が最も立派なる婦人の德性を具へて居た事が知られませう。吾々は多くの言を費すを要せぬのであります。世界を振動せしめたる一皇帝も、榮譽燦然たる三國王も、皆此纖弱なる一個の婦人から生れ出たのであるかと思へば、彼女が如何なる人であつたかは、十分想像するに難からぬのであります。

さて以上に述べましたのは、唯レチチアの概畧を描いたのに過ぎぬのでありまして、尙多くの興味に富める種々の事蹟がありますが、一先づ之れで此稿を終る事に致します。

雪ちら〳〵

大和田建樹

雪ちら〳〵かゝる。今しも門に立て終りたる。緑あたらしき松の葉末に。

雪ちら〳〵かゝる。大根かぶら參河島の菜など。積みあまるほど載せて引きくる車のうへに。

雪ちら〳〵かゝる。晝までに賣らんと道急ぎゆく。豆腐屋の荷桶の蓋に。

雪ちら〳〵かゝる。歲暮賣出しの提灯あまた綱に通して。軒に張り渡さんとする手代の羽織の肩に。

雪ちら〳〵かゝる。醉ひたる勢いさましく。地に引くサーベルに音をさせつゝ。打ちつれ歩む近衛兵士の紅なる帽子の庇に。

雪ちら〳〵かゝる。電車の道まもる男の、こちへと打ち振る萠黃の旗に。

雪ちら〳〵かゝる。繪葉書うる店を出でゝ。電車の停留所にと急ぐ女學生の。波うたせゆく髮のリボンに。

赤坂より電車に乘りてながめつゝ行けば。ちら〳〵かゝる雪なほ止まずして。お堀の鴨に。お城の松に。四谷見附の枯木の櫻に。花の如く輕くとまりたるが硝子ごしに見ゆ。

水繪の友（二）

かつみ

（日曜日の訪問）

平常の日は男女の學生宛ら織るが如く、往來もまゝならぬ本鄕通。有繋に今日は何となく淋しく、行き逢ふ學生の模樣も何所やら落着きたる風あるは、これぞ一週一度の安息日たるが故ならむ。

されど町の繁昌は平常にも增して賑しく、『ハイ御免〳〵』と意勢能く飛び來る車夫、ガラン〳〵とベル鳴しつゝ驅け來る郵便の赤馬車、其他花屋、羅宇の着換、新聞賣等、東奔西走殆ど應對に遑あらざるなり。

今この雜沓せる町を本鄕湯島の彼方より、駒込指して來る一人の女學生あり。彼女は今大學表門の前まで到りしが、森川町一番地の角にて左へと曲りたるなり。而して某神社の横手なる細き往來を半町程行きたりしが、花野某といかめしき門札出たる門構のうちに入りたるなり。

彼女は即ち黑神艶子にして、今日日曜の休なれば、親しき友の高子を其家に訪れたるなり。艶子は恭しく案內を請ひ、高子に刺を通ずれば、高子は眞に嬉しと云ふ樣にて出迎へ、

『アラ黑神さん、能く來て下すつてね。恰度今日は兄さんもお母さんも、朝早くから他所へ出て行きましたので、妾獨留守番爲て居る處なのです。サー誰も居ませむから、ヅート此方へ』

と、高子は艶子を己が居室に案內せるなり。艶子は高子に導かるゝが儘、高子の居室に到りしが、艶子は思はずも

『マー美麗なこと』と感に入りたる樣なり。尙又言葉を續て、

『好く斯樣に御部屋が飾れましたね、有繋に美術家は違ふたもの、それにこの澤山の額は一寸展覽會にでも參つた樣では御座いませむか。それに私も斯樣に飾つて有る處を拜見爲ますと、益々繪と云ふものが好になりますわ、一寸花野さん貴女先日もお話があつた樣に、

妾の樣なものでも繪を書たり又味ふことが出來ましやうか。』

『夫は黑神さん、誰方にても美術思想の無い者はありませむから、少し其氣になつて心懸さへすれば、普通の智識は得ることが出來ますわ。

然し何時も先生から御話を伺ひますが、其美術思想も若い時から段々に養ひませむと、終に枯れて了ふて、全の俗物となり終るのださうです。マーこゝに比喩て御話致せば、裏庭に一本の立派な林檎の樹があつたと致しましても、別に手入も爲ず風雨に曝して虫に喰はして置たのみては、如何樣な立派な林檎でも花も實も附かず、唯の雜木と少しも異の無いつまらぬ樹と同じ運命で終るのでは御座いませむか。妾共もそれと同じことで、如何美術思想を持つて居つたとしても、若しその儘手を入れなければ、貴女それ迄では御座いませむか。夫れに婦人は家庭にあつて、内を樂しく爲て置く務がありますから、唯自分一人て樂むと云ふ許りて無く、其上に他の者にも其樂を與へる義務があるのであらうと考へます、大層生意氣の樣ですが妾實際左樣思ひますわ。

若しそれがさうとすると、假令自分が立派な繪を書かない迄も、繪の心得があつて、その心得から萬事を割出して行つたら大層樂からうと考へるので御座います。夫れにこの間も大へん感じた事があつたのですが、妾の親類のものに、平常から人並はづれて着物の柄を氣に爲る人が御座いました。その人が先日も貴女三越へ出懸けて、色々と新柄などを見立てゝ來ましたが、そこが繪と云ふ心得の無い悲さに、何んでも價が高ければ夫れて善いものと思ひまして、マー大層奮發致したは、宜敷ふ御座いますが、妾共の眼には一目厭味が御座いまして、少しも氣高い處も無ければ、又色の配合の調和も無し、唯着つた服裝と云ふに過ぎ無いのでは、御座いませむか、折角高價の物を求めましても何うも夫れては惜いものと存じます。一寸致したお話では御座いますが、斯樣なことを考へましても、普通妾共御互に繪畫マー結局美術思想の大切なことは、

これでも解るては御座いませむか。』

『ほんに花野さん左樣仰ればさうに違は御座いませむは、夫れに妾は平常からさう存じて居りますが何うも妾共婦人の服裝などの流行は、如何も花柳界から其流行が出て居りまして、夫れが屹度上流の婦人社會に燃へ轉ると申す風で御座いますが、何と云ふ不都合な情け無いとては御座いませむか。夫れと申しますのも、一には此方に夫れだけの力が無いから、何時も負けて了ふのかと存ます。唯今迄は兎も角もこれからは、何うかして此方は又此方で、流行の動機を惹起す樣に、努めなければならぬかと存じます。夫れに致しましても矢張繪書の心得があれば、何事も所信があつて致すことが出來樣と存じます。花野さんもう理屈から繪の大切なことは充分解りましたから、妾もこれから貴女の御仲間入を致しまして、本氣に繪の稽古が致したう御座います。アー色々先々を考へますと斯樣に妾嬉いことは御座いませむわ。』

と二人は我れをも忘れて美術論に餘念なかりしなり。

艶子は飲殘した茶を啜りながら、尙も浦山敷花子が居室を眺め居りしが、

『一寸花野さん、妾先刻から眼に付て居りましたが、其所に懸つて居る牛の繪は他所でも能く見掛る繪で御座いますが。夫れは誰れが描いた繪なので御座います。妾大變上手に出來て居るかと存じますね』

『これですか。マー貴女その有名い繪を御存知無いの。それではこれから其繪を描た畫家の御話を致しましやう。然し貴女餘り饒舌を致しまして咽喉が渴きましたから、サー小さいのですが蜜柑でも御剝き遊せ』

讀むべき書

小紋生

文藝の感化力の上から讀むべき書物と、讀むべからざる書物とを選擇する事は、極めて重要である。新刊に就いては暫く言はず、昨今のやうに文藝上の製作が進歩する事の速い時代には、古い物の速く忘れられる事

もある、素より忘れられて宜い書物は多い、併し忘れて困る書物まで、讀まざる書中に數へらるゝやうなりはすまいか、例へば此處十年以前までは『日本外史』と云へば、中學時代の金科玉條とも言ふべきものであつたが、次第に忘れられさうだ、其外の漢文書類、四書、五經の類は追々忘れられるやうになるだらうと思ふ。けれども古來から文藝上のオーソリチーともなつた有名の書は、是非一通り眼を曝す必要がある。今の若い人達に論語や孟子の話をしても恐らくお對手の出來る者は少からう。之れ一面から見て嘆くべき次第で我々は決して古典的な學問をせよとは勸めないが、苟くも幾百年か、思想界に生命を繼いて來たものは是非一わたり讀んで頂きたい、それが乃ち修養である。今の時代は餘りに文藝の進步が速かなので、是に眩惑して古いものなどを見ると、何だかかびくさいやうて、隱居樣の仕事のやうにも思はれるが、正當な用意を以て歷代の文藝を修める事は、決して陳腐でない、非常な大事である、詩歌文章を作るにも、えらくなると、ならぬの相違は全く此の修養の足りると足らないとにあるので、我輩が文藝書類を讀まれる事を諸孃におすゝめ申すのも此點にある。書物の選擇は必ずしもむつかしくない、誰でも知つて居る書物ほど、是非讀む必要がある、國語讀本などに拔いてある或る書物の一項を讀めば、其一項に止まらず拔いてある原書に就いて全躰を讀破するだけの勇氣を持つて貰ひたい。書物を多く讀むのは決してむつかしい字を記憶る爲でない、新しい思想を汲む爲で、漢文や和文を暗記した處で詮はない、要は書物の意義に通じさへすれば事は足る。書籍を讀めとは少しも事新らしい問題ではないが、其實是も諸孃の頭に朝三暮四、いつでも置いて頂きたい必要な事である。而かも此節の新しい思潮に浴するものゝ爲に、歷代の文藝書類を忘れないやうに反省を乞ふ事は、甚だ適切なる事と信ずる。



天

○希望と不平

大阪鹽町一丁目 つゆ子

人のこの世に活動せんとするには、何人もその心中に希望なかるべからず、希望は人をして、有らゆる勞務を辭せざらしめ、勉勵、忍耐の美風を養成するものなり。然して希望の發生は、決して無意味、偶然のものに非ずして、必ず或る動機に基因せざるべからず、不平は此動機の大部分を占むるものなり、故に希望は不平あつて始めて發生するものにて、その半面や實に不平なり。人の心中に不平生ぜんか、彼は必ず或る方法を以て之を滿足せしめんと料るべし、是れ即ち希望の發生せしものにして、希望の遂せし時は不平も之と共にその影を消すべし、斯の如くにして希望と不平とは終始相離るべからざるものなり。此故に不平ある所には必ず希望生じ、希望生ずれば活動起り、斯くして社會は日々向上發達の度を進むるに至る、不平は實に進取的氣象なり、文明的理想なり。

然るに世動もすれば此不平を排斥する者あり、是れ希望を排斥すると同一にて、彼等は實に進歩の呪咀者なり、何となれば、世人にして全く不平なからんか、隨つて希望もなく、その活動は全く休止して、社會は日を追うて衰退に赴くべければなり。

人不平を唱ふる大に可し、青年男女は殊に大不平なかるべからず、されど不平時としてはその人をして自暴自棄の深淵に沈ましむる事なきにしも非ざれども、是れその不平の力に比して、之に伴ふべき意志の力のあまりに弱きに因るなり、要はその不平、希望に相等するだけの意志の力を備ふるに在るのみ。

吾は飽く迄も不平を唱へ、且つ之を尊重する者なり。是れ不平と希望は互に相連鎖せるものなればなり。

（評）不平即ち希望との說奇に似て眞なり、余も大に同感なり、不平を排斥する者は希望を排斥する者なりと喝破する邊世の天下太平漢をして顏色なからしむ、文理亦齊整、よき天位なるべし、

地

○長幼の序

尾張　千代子

長幼の序ありと申すことは、今日に於ては餘りに世の中には大切なる人生律法として取り扱ふものなけれども、その實はこれ程必要なるものはなく、これ程有難きものはなし。子が親に對するにも、妹の姉に對するにも、弟が兄に對するにも、少年が壯年に對するにも、凡そ人と人との交際に於て、これ程行き渡りたる都合よき秩序とてはなきぞかし。實に古人の言は平易にして、往々大なる眞理を言ひ顯すものなり。

世の中に秩序なければ、世の中は亂暴にもなり、混雜をも來し、喧嘩も起り、騷動をも來す、小は一家より大は國家に至り、部屋の隅より世界の舞臺に及ぶまで、一として秩序てふものによりて治められざる者はなきなり。而してその何れの人々にも如何なる場所にも通用するは、長幼の序てふ事ぞかし。特に一家の内に於て、若くは社交の上に於てはこれ程必要なるものはなし。長幼の序正しうして一家も治り、長幼の序亂れずして社交も圓滑となるなり。近き例を擧げんに、白髮の老人を後に押し退け、倔强なる若者が我物顏に上座を占むるが如きは、いかにも片腹痛きことならずや。若し長幼の序を正さゞる時には世の中は暴力の支配となり所謂弱の肉は强の食と申すが如き淺間しき狀態を見るに至るも、未だ知るべからず。姑が媳を下女の如く追ひ使ふは、甚だ見苦しきことなれども、媳が姑を下女の如く追ひ使ふはまた甚だ見苦しきなり。兄が弟を奴隷視するは惡しけれども、弟が兄を凌ぐは決して善き事にあらず。もし一家に於て長幼の序を正うし、姉は妹を愛し、妹は姉を敬ひ、いはゆる長者はその長を恃まずして幼者を引き立て、幼者を幇助し、幼者はその長者に從順にしてよく長者を扶け戴かば、一家平和なるべし。長幼の序は神が立て給ひたる自然の法律にして、人間が細工したるものにあらず。人これに從へば幸福あり、逆へば禍害あり。愼まざるべけんや。

(評)筆に靈氣あるを取れり、茂樹翁の講演を聽くの感あり、

(人)

○混堂

くま子

世に混堂ほど僞りなくうち解けて面白きはあらじ大方の打解くると云ふは或は園遊會とか或は懇和會とか姿

を飾り物を戯らでは人も免さず己れもしかするをこゝには尊きも卑しきも高きも低きも肥りたるも細きも黒きも白きも母も娘も老いも若きも奥様も下女も些の包みかくすところもなく見るからの赤裸々となりて一ッ湯舟に肌擦り合ひて顔から足までの垢を洗ひつ臂の突合ひ湯の溶け合ひも「御免遊ばせ」「イエ私が！」と互に折れては角もなく背の項の洗し合ひも「彼方向きませ」「先づ貴方から」と譲り合ひてはしなやかに尤め怨みも垢摩りの奇麗薩張り板の間に洗ひ流して何事も汲み合ふ湯桶の眞ん丸と石鹸の肌の滑かに糠の袋の艶やかに。さてかけ湯も濟みてすが〳〵しう裕衣引懸け帯締めたる時の心地よさは何に例へん。さる人の「湯上りの心地こそいつも持ちたきものなれ」と云ひけんこそ實にもと思はるれ。

（評）淡々たる叙事の中大なる主張を含む末段輕妙々々、

夕しぐれ　（賞外）



呉市明神町　戸阪英子

秀逸

○迷へる詩人

伊勢國田丸町　守岡一翠子

鏡面に映ずる物像をもて、實體の反映とせば、文壇の作物は、やがてそが作者の品性の反映なるべし。李白の詩、貫之の歌、蕪村の句の崇高幽雅なるは、其の李白、貫之、蕪村の人格を想像せしむるに足る。然らば、我が明治詩壇に顯はるゝものは果して如何ぞや。温厚の君子か、はた清高の淑女か。蓋し之れあらむ。妾の眼孔の小さき、未だ其を見ざる耳。徒らに、わが想像の網膜に映ずる者は、黄金の波打つ秋の田の邊に佇める痩骨の詩人にあらずば、才華を衒ひて虚名を漁る斗筲の文客に外ならざるなり。試みに、今の文集一部を繙きて見よ。光焔あり、精彩ありて、吾人をして、その措辭押韻の如何に巧緻を極むるかに驚かしむると共に、頽瘵纖佻にして、幾ど忌まはしき亡國の韻を聞くに髣髴たらしむるものあるを。更に眼を轉じて、天下の大詩園を見よ。區々たる石、涓々たる水に憧れて、あたら青春多望の身を、空しく物外に憔悴しつゝあるを。

此の潮流や、逸早く紅顏の男子を浸して、浮華の渚に輕佻の澪標を樹て、今や延いてわが婦人界に及ばんとす。豈に禦がでやは。

あゝ迷へる詩人よ、汝何を果敢なみてか、此の光明ある世を憂しとは見つる。抑も理想は到底現實と一致するの期なしとしてか。かくて猶ほ宇宙の美を描き、造化の秘を闡かんとす。誤もまた甚しからずや。

汝は知らずや。趣味は遂に科學と離るべからず、文豪必ずしも世外の人ならざるを。『道もせに散る勿來の櫻。』『越山併せ得たる能州の景。』その詩の高き、品性の淸き、如何にその陣中閑日月ある英雄の面影を偲ばしむるよ。天使が放つ白羽の征矢、そは必ずしも、汝をして、世を厭ひて謠はしめんとにあらじ。

更に知らずや、王朝文弱の弊は、やがて朝綱の式微を來たし、元祿奢侈の習は、失政の悲劇を胚胎せしを。嗚呼、國民一日も趣味なかるべからず、然かも輕佻の文學は、亡國の兆にして、氣力なき詩人は、賣國の奴なり。醒めよ詩人、而して氣力を持ちて自然に對へ。

(評) 叱咤痛快、運筆の充分ならざるを惜む、

○枯葉集

讃岐の國　なでしこの花

自ら尊大なれ

人の宇宙に於ける地位は主義者なり指導者なり、あゝ天下何物か是の自覺を否定するものぞ、神は吾が心にあり、吾人は須く自ら尊大なるべきなり。

天下の最も美なるもの

天下の最も美なるものは夫れ秋の自然界に於ける巖上の松か、

例へば高節なる偉人が滔々たる世の濁流と健闘し胸に超世の信念を畜へ心に不動の自覺を有し何物も來つて妨ぐ可らざる底の自信を以て衆愚を嘲笑せる態度の如きか。

見よ蕭殺たる天地恰も物質に飽きたるが如く萬山黃ばみ落つるの頃彼は獨り千古渝らざるの姿容を以て確然たる基礎の上に其美を擅まゝにするにあらずや

あゝ天下眞に憐むべきものは彼の花を賞し酒に吟じ虛榮に醉ひて永遠の生命を思はざるものか、

さもあらばあれ松の美は語るべからず唯見るべきのみ、人々自ら悟る所あれ。

春と秋

春の自然は吾人をして唯物主義を回想せしめ秋の天地は妾を導きて唯心論を思はしむ

あゝ吾人は三春の行樂に我を忘れ、我を沒して果敢なき人生を夢中に暮す可きか、秋の天地に心を潜めて吾れの意義と價値とを研究し以て永遠に生くるの道を講ず可きか。

（評）高遠、

○野菊

三河西鴨郡石ヶ瀬澤田忠三郎方 澤田つま子

野菊はわが理想の花である

あゝ理想の野菊！師友とする野菊！

其の花には梅の高潔なる姿なく、櫻の品位ある趣なし、牡丹の如き富貴なる相、海棠の如き艶なる粧、一つもあることなし、まこと色に香に乏しき哀れなる草花なるよ。

されど野菊！。

其がしなやかなる莖の姿、可憐なる花の容は、いかに優しく麗しき温順の徳をあらはせるよ。其が秋風に屈せず、嚴霜に撓まず、恰も己が運命を自覺したらむやうに、蕭條たる野末に微笑める、いかに雄々しき貞操と自覺の念とを示せるよ、哀れ是ぞ野菊の徳なる。

あゝ思へばわれら婦人の身！

冬の田舎　（賞外）



淺草八幡町　松浦あや子

高潔身を持すること梅の如きも必要なり、容姿端嚴にして櫻の品位を保つも必要なり、あるは、牡丹の福相を有し、海棠の艶粧を持つも必要なるべし、されど氣高さ、美しさ、福々しさ、艶めきしと言へるが本能にはあらじ、婦人としての誠の徳は、野菊の花に見る如き、優美、婉順、貞操、自覺の四德なるよ。

さればわれは！。

自らの美に誇りて、仇嵐誘ふがまゝに散り行く櫻たるを望まぬよ、高潔身を持して、凛乎人を恐れしむる梅たるを欲せぬよ、又は福々しう咲き出でゝ、富貴の花と唱はるゝ牡丹たるを思はぬよ、唯々艶めきし粧に、人に媚ぶる海棠たるを願はぬよ、たゞ可憐優美なる野菊の花と咲きて、婉順に敬虔に、高く貴き志操を持して、運命を自覺して、之に安むぜんとこそ望むなれ。

哀れかくて野菊は、永にわが理想の花であるよ、師友たる花であるよ！。

（評）美しき理想なり、但し今少しありたし、

○思ふこと二つ

紀伊　米田時子

○

花は櫻、桃、さゞんくわ、などはありふれて珍らしからず、梅さらに云はず、菫は蝶も羽根かろき頃はよけれ、友なる胡蝶の衰へて後、うらぶれの姿を、汀に澄める水鏡にうつすなど、淺間し、撫子花西も東もわかぬ深山路に、美くしきは己れ一人のみぞと云はぬばかりに、咲きみてるはいとにくげなり、

姫百合のしほらしく咲きたれば、頭痛の兆にもやまたおそろし、蓮の花雨ほそきあした咲き出でたるは、云ふべくもあらじ、開く音たつるもおかし、玉ちるもうれし、うばら名をきくだにおそろしき心地ぞすなる、朝顔今や今やと朝一朝待ちに待ちて、有明の月しろくまだ西に消えやらぬ頃、はじめて一輪さきたるは殊更なりや

かるかや、女郎花いづれもいづれも哀れなり、寒菊一と株おくれて咲けるはこよなう寂し、色に出されど霜の中よりさむさをかこつもまたなういとし、椿、雨ふる一夜、病みつかれし身を欄にたすけて、只一人打ち沈み居れば、しめやかなる夜半に聞ゆる落椿の音は、更けぬらんなどと思はれてさびし、

○

ひと頃世にときめきし龍田姫の、その紅の衣も、霜にさらされ色あせたり、戀になき、戀になやみし鈴虫も、はや老いぬれは、それもむかしの夢となりけり、

枯枝の蜘蛛のふる巣に、危くもかゝる枯葉よ、紅葉と、名のみ昔しのまゝなれど、色は黒みてしわも寄りたり、ともすれば、風に拂はれて、はては谷間に朽つるはかなさ、

戀の夢、さめずに死ぬる鈴虫も、吹く風につもる落葉の下に、それぞとも知られて埋もれ果てけり

あゝ！秋になくてふ人よ！願はくば人知れず、谷底深く朽ち果つる、これら哀れなるものに泣け!!!

○百合と薔薇

新潟　小出蹊生

薔薇。墻根のほとり仄かに白露を帯びて、嫣然と微笑める姿、たとへば嗜のごとき戀の香に酔ひたる妙齢の佳人にも比すべきよ、何人かその艶々たる風韻、可憐なる容姿の恍然たらざる者ぞ

百合花、初夏の候、緑山の峰の上、谷の中、畦のほとりに點々と、恰かも雪の如く咲きこぼるゝ百合花のその高潔なる風姿に接する者は、誰れしも敬虔の念慮あふれて襟を正すなるべし「野の百合花は如何にして生長いかを思へ、勞めず紡がざるなり、われ爾曹に告げんソロモンの榮華の極みの時だにも其裝此花の一に及ばざりき」、とあゝ清き百合花、これ聖なる神が我等萬人にあたへ給ひし最高深遠なる理想の啓示にあらずや、

○薔薇はこれを涙おほき戀人、多情多恨なる詩人に例ふべし、寂びしき人生の園生に咲匂ひて優さしき微笑をたゝへ、温たき愛と同情と優美なる趣味とを鼓吹して人を慰め、勵まし、仰ひで希望の曙光を認めしむるもの、これ詩人、これ薔薇の面影にあらずや。

百合花はなほ之れ、高風徳たかき聖徒の如きか、塵の世にありて濁に染まず超然と流俗を脱し、身は清貧に甘じていさゝかの不平なく、世を憂ひ人のために悲しむ、其清き信仰の生涯は、まこと百合花の咲きて誇らず散りて恨みず清く世を過ぎて永遠の春にいると、良き對照にあらずや。

○ばらは優美、温雅にして如何にも可憐に、百合花は崇高、幽遠にして氣品たかし、妾は園生に匂ふ薔薇のひとひらを封して、都なる戀しき妹におくり、後山にほゝゑめる百合花の一枝は、これを敬愛する恩師の御墓にたてまつらむとこそ想ふなれ。

○薔薇は美の化身、百合花は自由、正義、人道の權化と言ふべし、ばらはわれらに優美、愛憐、同情、趣味、熱誠などの美徳を啓示し、百合花はわれらに廉潔正眞なるべきことゝ低く生活して高き理想を有すべきことを身をもて敎ふるなり。

河井酔茗先生選

新體詩

天 ○希望の花

茨城縣稲敷郡木原高等小學校内　諸岡梅子

いともくしかる紫の、　あやの袖に招かれて
おぼつかなさの夢路より、　春の朝野にたゝずめば
雲美くしう姫神の、　右手に希望の花をもち
「あゝ美くし少女子よ、　幼き春を忘るな」と
神の御聲を命にて、　希望の花よいざさらば
わが世の限り胸に咲け。

いしくも歌ひ得られたもの哉、温顔にして而かも誠あり力あること、此作の如きは誠に貴ぶべきもの（選者）

地 ○森陰

熊本市外九品寺官舎　湖畔

「橄欖の花雫す」と、　聖者三人のさゝやきを
片聞し身のうれしさに、　おどりて入りぬ夕の森
羊の群におのゝきつ、　檜の和香を身にしめて、
諸葉黄金の面てりに、　只すかし見る遠の方。
汝きたれのどよもしの、　枝、葉、大木につたはりて
銀鈴高くひゞくとき、　白鳩一ッ西にとぶ。
啓示とうけてほゝゑみて　迫る柔葉の露の香に
『聖きいぶきとよみかへり　今さしてゆく花のかげ。
『萬樹の精の凝りし玉　「詩の冠に汝かざせ」の
どよみに煌は照りはえて　銀鳩金羊足下に伏す。

幽玄の態、現代の詩の技工を能く心得た方と思ひます（選者）

人 ○細糸

大分縣中津　宮田秋子

戀にはあらず春痩せて、　花ちる窓になやむ身の
あてなき思ひふと覺めて、　繰るに物うき糸車

去年のつばめの嬌語に、　心もそらに亂れては
はたと切れたる細糸の、　もつれわづらふ思ひ哉

細糸の微かなる響きがあります(選者)

秀逸

○四季　本郷　田中うしほ

うるはしき日のかゞやける、『新年の森』くれなゐに、
幕ひけるごといろどれば、野より山より鳴く鳥の、
一羽一羽に舞ひ集ひ、今年の『歌の譜』つくると、
四季にわかれて樂のねや、『春の譜なりぬ』と鶯が、
うつくし聲の初唄ひ、かくて夏の譜冬のうた、
やさしき鳥の音になりて、冬誦す樂は小雀の、
ちひさき聲につくられぬ。

四季と云ふ題にも斯云ふ歌が出來るやうになりました、詩界の進歩、春行き夏來るよりも早い(選者)

○春や十八　麹町　春子

化粧の水の凍てたるを　そとたなそこに温めて
とくや臙脂の榮の色、　めでたき朝よ二九の春。
幾夜寝がての母の御手、　愛知らずも生ひし身を
幸よと笑めば若き頬の、　血潮色めく二九の春。
春着姿のはなやかと、　口疾にいひし母のゑみ
ふと姿見をみあげては　うつむく我や二九の春。
「清き善き身」の聲のうち、人に小さき耻らひや
袂を口にそと押せば　かざしさゆらぐ二九の春。
幾世の春を名に負はゞ　幸と笑とに送られて
とはに榮ある身なれよの　祈ぞあつき二九の春。

十八におなりてしたと云ふので新年の化粧の歌は至極女らしい着想ですが、惜い哉二九と云ふ言葉は、面白くありません、十八と云ひたいてす、二九とは十八のなぞて、もう使ふひふるして却つて輕薄に聞えます(選者)

○梭の音　上總　小川とり子

うらなつかしき明星の、　光はぢらふ曉に、
寢亂髪をかゝぐれば、　泪にくもる水鏡。
隙間もる風身にしみて、　をゆび凍ゆる冬の夜も、
更けて靜けき梭の音は、　寢覺の床に聞ゆなり。
落葉焚くなる山里に、　草の戸深くたれこめて、
梭の音たゆる時もなく、　はたをり暮す機織女。
たまのうてなの姿見に、　月の細眉つくらずも、
鶯さそふ花の香を、　折りてもかざせ前髪に。

嬌態、夜雨の詩に似たり(選者)

○宮の浮彫　芝　松岡紫子

昔名工が靈こめて、
七彩聖き飛雲龍、
宮の丹塗扉すべりくる、
主が遺言にそむかじと、
空に高めく靈彩に、
露としたゝる眞夜中を、
妙香いとゞ匂ひくるかな、

永刼に榮えあれ我腕と
髪の香高し浮彫や、
月光あびて百年を
凄う爛たり兩眼
吐くや息吹のこほりては
神ぞ守るか冷風に

居留地公園（外賓）神戸二ノ宮四丁目　徳永みれ子

雲の詩を愛する自分は雲の詩を見ると賓によそならぬ快い感が動くのです（選者）

○小鈴集

新潟　小島ゆき子

白百合、

炎の帝の愛子なる、
金翅まばゆき天美童が、
玉の御階のつまづきに、
すべりて落ちしそれかそも、
むねかざられし寶玉の、
露にうつむく野の百合。

こほろぎ、

その音はよしや細くとも、
快樂の曲をかなでなば、
こほろぎ汝よ萩の戸に、
さゝやきて寄る星もあらむ。

鈴虫、

夜の香つめた戸によりて、人うつゝなの宵暗を、
こぼるゝ萩をあやしみて、よき音をとめし鈴虫の。

こほろぎが最もよろしい、百合は文字のあやは美くしいですけれど、類想はいくらもありませう（選者）



○公孫樹

台北　胡蝶女史

巨人さながら二百尺、高ら聳ゆるおもかげは
幾千代玆に經りし世の、
活きたる歷史とそゝり立つ
元より優しき性なれば、
春もえ出る濃みどりに
織りし直衣身にまとひ、
淸き自然の庭にして
めぐる太陽に輝きつ、
湧く彩雲に相むつむ
嗚呼壯嚴の公孫樹や、
王者ふれるもことはりや、
歌に興ある秋日和、
黃金小扇地に散れば、
めぐし讚美に舞ひ出て、
そこに詩人詩あさる

公孫樹は此後ち幾多の詩人にうたはれるでせう（選者）

○落梅賦

三河　しらはぎ子

藥香迷ふ窓の邊の、
紅梅こぼるゝ夕暮を

十月わづらふ小枕に、　死の影暗くせまるかな
床の小琴のそらなりに、　散り行く花を數ふれば
魔の子は弓弦はりあげて、　わが胸打つか悶あり
今宵汚れの身を出でて、　天路遙に馳けるらむ
衣の雪より消え易う、　弱き魂の緒さゆらぐは
夢に波立つさゝ胸に、　十字の影を描きては
禱を上げん唇の、　熱き血汐も枯れしかな

詩に能く熟れた處が見えます(選者)

○猿

武藏　眞藤とう子

看經の聖、御僧が、　冬の夜の籠居更けて
科戸漏る風の寒さに　花机、うつふし勝の、
物思ひ、行燈暗や。
手慣れたる子猿、群猿、　圍居する御僧のかたへ
圍爐裏にて酒溫めて　献ずるやそと膝行出で
僧の君召しませとのみ。
『こや猿ども』と御僧が　『來よ』と小膝を打ちませば
肩に背に手に縺り寄り　僧、御輿の唄拍子、
習ひ得たりな猿の舞。

輕妙、滑稽の才あり(選者)

○越路の海

信濃　月子

寄せては返へす荒海の　舟路は遠し四十九里
只見る影は星にして
白うくづるゝ浪の嵩、　海士の漁火遠く陰消えて
み空に高き神の業
何日に何處に盡たらむ、　白く彌彥の社頭より
佐渡へかけたる天の川、

今一いきと思はれますが、兎に角新工夫の痕は見えます(選者)

○夢には影の

茨城　藻の花

夢には影のうすかりき、　されども君とおぼえたり
つれなかりしと夢さめて、　螢を草に放ちしが。
夢には影のつゝましき、　つれなき君とおぼえたり
そのかよ路にまどゐたる、　身なればせめて物思ふ。
はなれ小島の身はひとり、　夢のみ多き貝葉に

歌はかくとも仇浪の、　とけくちぬべき命かな。
かくても遠き故郷に、　かへらむ術もなき身なり
せめては語れいとせめて、　夢には影のうすくとも。

夢の字の多いこともうるさくない（選者）

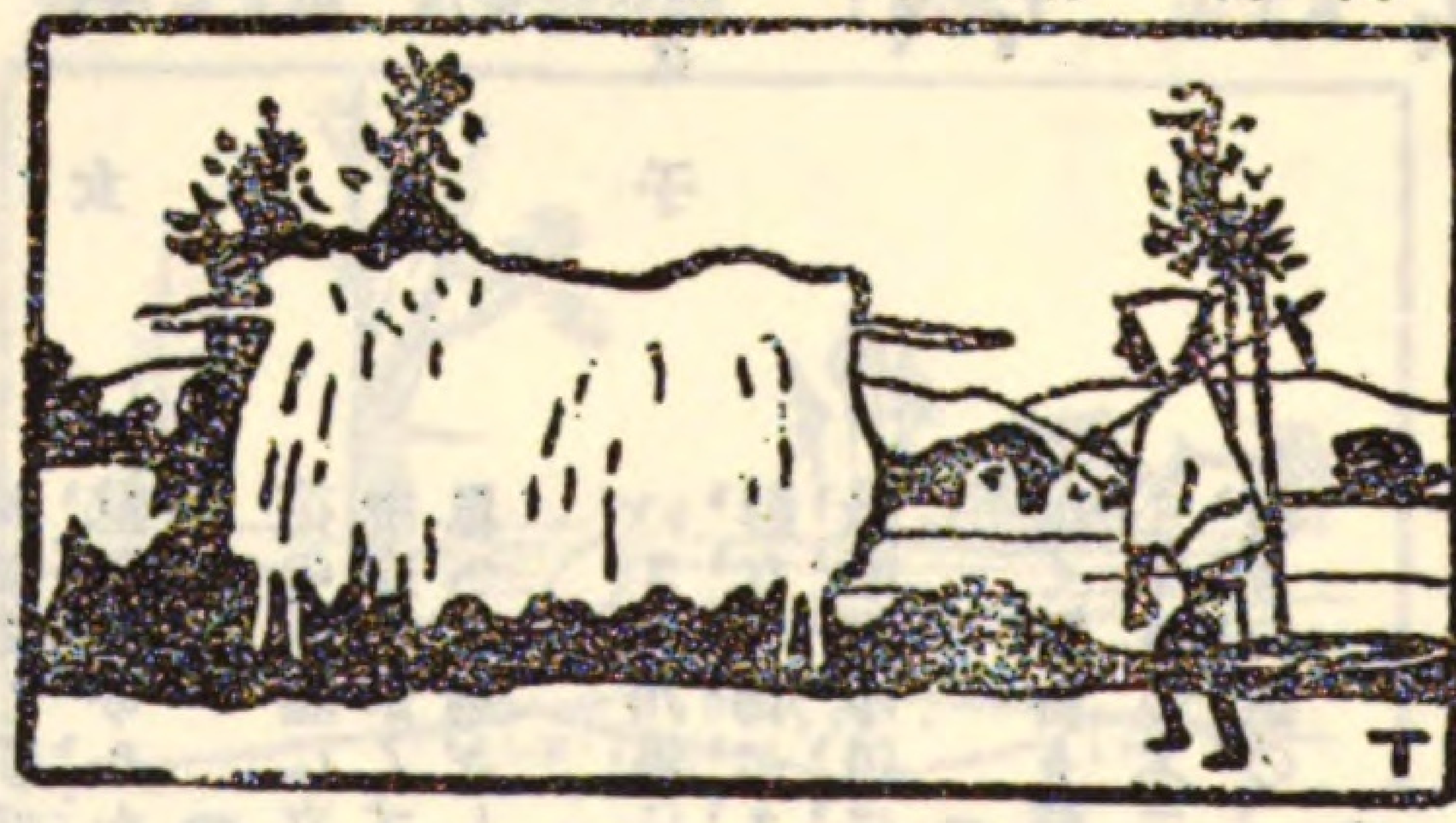
○雪

紀伊　靜山まさみ子

冬の姫御子畏くも
「翼あらば」と詩の子が
常花春の御園生を
憧憬れ仰ぐさまを見て
哀れと御胸いたましつ
高欄近う出でまして
「畏ぢな縋れよこの手に」と
御手伸されてよびませど
縋るに高き雲の宮
嗚呼など人に自由なき
園生に滿てる眞白花　羽衣の袖にみたせつゝ
「さらばよ待てよ今しばし　風にたぐへてものせんに」と
霞にまがふ御空路を　飛び翔りつゝ撒きたまふ
霏々として降り降る　げに地は春と甦り
うら枯れ果てし草も木も　時、春しらぬ花ざかり
あゝ雪とは人の呼ぶ名にて。

前半は好し後半は少し說明に過ぎました（選者）

郊外（賞外）　京都　石田ちほ子



○小さき願ひ

久留米　彌吉和歌子

生れて九月白百合の、　かほり潮と迫り來る
夕顏棚のはなれ垂に、　母逝きし其宵を
人はつどいて泣きけるも、　何の氣はなくすや〳〵と
高く笑は夢にして、　ホヽしほらしの片笑くぼ
天には新星地には花、　雲は五彩に天翔り
千山快樂に埋るとき、　只思出は淚にて
銀河斜めに雲白ふ、　孤雁の聲の消ゆるとき
妹の瘦顏を眺めては、　幾度一人泣きけりな
春夏秋と水の輪の、　岸にくだけて夢の如
悲愁幽怨十年の、　血なり淚の日は過ぎて
蝶は菊の香をしたひ、　子鳩は親に抱かれて
暖かふ夢を結ぶとき、　幼心の苦はなきも
寢覺〳〵の玉ゆらに、　母はと呼びてはいじらしよ
星の瞳のくもりゆく、　日は日れもす夜もすから
見るに聞くに今更を、　煩惱の胸は狂はしふ
妹が小さき願ぎことに、　袖をしぼるに力なきかな

○低唱

神戸　野菊子

君往く路の側、　草に點ずる花見ば、
家に寄する女は無くも、　手折らで去るな旅の子、
運命吾を痛めて、　若き懸想を碎きぬ、

野の花手にも折られて、
頸にかゝる髪には、
詐僞多き男を、
娵に疎き唇を、
ながく走る吐息の、
朽ちしに是や比すべき、
眉揚ぐる力あれど、
繋ぎよるに長足らず、
乳より白き齒に噛みて、
色紅と成る迄も、

秋田　菫村女

○新星

入日なごりの西の空
やがてむらさき薄墨と
下流はひろくうな原や
そこに新ぼし影見えて
光は落ちてうるはしく
いろ紅ゐにそめなして
かはりゆきつゝ天の河
錦のあやのなみをあげ
たかき潮のみてるとき
ゆふ飛ぶ鳥の影くろし

近江　勝山久子

○蜘蛛

白銀の絲千筋に張りて、
芥子映る落日の壁に、
餌に走る巣の上の蜘蛛、
蝶の子の眞黑羽衣、
奪はれしやさしの魂よ、
斃れるよ蜘蛛の入道、
迷ひ入る落日の雲に、
强きもの瑠璃殿に眠り、
蜘蛛潛む藝術の網よ、
ヘマムシの顔を縫ひつゝ、
冥府の門に醜女が織りし、
あゝ宿命靑き魔腕に、
身に餘る美餌占めて、
黑蝶が怨の魂の、
呪ひ焔の燃ゆるもしばし、
弱きもの破れ襲に泣く、

神戸　勝田かつ子

○嫁ぐ日

化粧室に入り、
鏡にうつる、
けふ嫁ぎなば、
小胸とゞろき、
黑髪とけば、
眞白の乳房、
この色失せん。
持てるおしろい、
こぼれぬ赤き、
友禪の袖の上。

福岡　黑田なみえ

○暮秋

散りし紅葉に雨細そく
松籟天にたかきとき。
三里の海邊黃昏れて
波濤幽かに眠るとき。
秋姫そこに佪低ふ
悲愁の琴をかなづらむ。
千草百草枯れ果てゝ
千鳥友呼ぶ姫の濱
あはれ我が世も今逝くと

常陸　秋山欽子

○晩秋

花の樹陰に立よりて、
中空たかくすむ月に、
思へば過ぎし夢なりな、
いさゝ川邊に我立ちて、
影なき物がさゝやくよ、
秋姫宮を追はれしと。
旅のつかれをやすめしも、
柳がもとに眠りしも、
過ぎ來し世をば忍ぶ時、
夕べ凩銀杏を吹きて、

上總　石井貞子

○朝の不二

なく霜白き朝まだき、
うす紅ゝの不二の峯、
頂きに銀の、衣きて、
連なる山の其の上に、
裾に紫雲の帶まとひ、
淸き姿よ朝の不二、

四谷　一枝

○新年海

浪は岩間をかみてゆき、
いかれる沖もなぎはてゝ、
黎明奏ぐる梵鐘の音に、
かすみの帳うち破り、
崇き、尊き、榮光あり、
下界の我等に告ぐるなる、
洞は鹽吹くあらいその、
潮滿ちくるはろのうみ。
東海の彼方壯嚴に、
きらめきわたる日の光。
幸福ある年を天國より、
奇しき光ぞ照りわたる。

浦曲の白水郎も、袖人も、
今日の初日を祝ふなり。

寛大き、長閑けき、海のごと、

◎夢のあと

月おもしろき秋の夜に
もみぢをかしき木のもとに
月よもみぢよ心あらば

牛込 林安津子

影ならべしも今は夢
袖つられしも今は夢
かたれむかしの夢のあと

◎夜

笛に小琴に合奏の、
月の傾き門柳の、
今し落ちたる流れ星、
此の下界臨りの露姫の、
幽し調べの絶え果てゝ、
寂し我世は夜の領ぞ。

淺草 天流かつ子

一節一節に夜は更けて、
囀きに見ゆる秋の夜や。
睡眠夜守の闕脱けて、
靈慕ひて天降る。
夢は沈默に閉ざさるゝ、

◎旅の一ふく

青田を走る蛇に似て、
松の林に山すゝめ、
秋の日そゝろ山峡を、
ふもとを回る村々の、
鐘したはしき旅僧か、
刀にきざむ盧遮那佛、
今龕ふかく据ゑられて、
古りてこぼるゝ藝術の、

荏原 西野神紘子

うねりくねれる峠路や
さへづり交す堅さむく。
吹きてとよもす山おろし
中にそびゆる鐵城や。
行脚の杖を止めつゝ、
時世の涙のいくかゝり。
秋は精色の含さびぬ、
頽ばそこに溢れたり。

◎工女

夕べ休めの笛の音に

伊勢 白菊女史

惡魔の手より許れて

八丁田（賞外）陸前登米町 猪又きち子



沐しき渓に立ち踊る、
悲しからずや少女子の、
罪に汚れしうす絹の、
酷き苦のかげなれば、
髪も眸もつやうせて、
つむぐ糸よりいや細き、

工女の群を何と見る
若き血潮の色あせて
肌冷たきうらぶれは
世はこれ暗き谷の底
星の光の宿らぬを
汝が運命をおもほへば

おぞき惡魔の迫害に、
悶え苦しむあはれさよ

◎根來寺の秋

夕の鐘の音さむく、
今吹きくだる搖落の、
見よ寂寞の色ふかく、
鹿の子群る根來寺の、

紀伊 前田しづ子

悲愁を天に傳へては、
峰の木枯し音すごし、
闇この山を蔽ひては、
庭に落葉の聲低し、

榮枯盛衰人の世の、
せめては此處に登り來て、
眉毛ましろき老僧の、
悟りの言聞くを得む、
今鐘樓の欄により、
更け行く秋の根來寺、

運命になける鹿の子よ、
この聖境にひれ伏せよ、
愛に滿ちたる口よりぞ、
さは煩悶も消え失せむ、
またゝき清き夕づゝの、
げにも寂しき眺かな、

◎海の朝

曉の雲はやゝに薄らぎて、
かぶきのまくの明く如く、
あらはれ出てあざやかに、

津市坂 ふみ

かすみたな引く大洋は
彼方此方の島影も
千鳥なく音ふ船歌よ

◎えにし

備前 松本落葉女

拙なき筆をかなしみて　折りて焚かんと誓ひたる
我れにしあれど今さらに　人の調のめでたさに
又筆とりて紙ひれる　あゝ断ちがたき縁かな。

◎ありし昔

赤阪　森ふさ子

紅梅散りしく梅林、　君と手を取り花をあび
たのしく語りし事もありし、　優しく吹きくる春風に
かほり床しき花の道、　君と手を取り袖つられ
こゝにかしこに笑み出でし、　すみれ摘みにしこともありし
亦春風に誘はれて、　ひとりこゝにさまよへば
むかしながらの花のみち、　清きかほりは今もなほ
そでにみちきぬ紅梅は、　なほも袖を飾れども
君いまさぬを如何にせん、　ならばこゝに今一度
夢まぼろしの影なりと、　あひ見ることのすべもがな

◎菫

常陸　酒葉つれ子

流れも清き小川邊の、　若草もゆるそが中に
床しき菫の姿かな、　水に形をつくろいて
いとも清けくうるはしく、　やがて遊びの少女子の
やさしきみ手に摘まるべき

◎撫子へ

岩代　杉原たかやす

馴染そめにし撫子の、　はなうるはしくさくまでは
わかれずはなさすはなれずと、　かたみにかたく誓ひしを
たのみかひなきわが身ゆゑ、　日に日につのる病あつく
止まるすべもあらずして、　許せ撫子別るゝを

◎流浪の歌

周防　小澤千恵

若き心のさゝやきに、　東都に出てゝ我ながら、
此世つらしの思のみ、　今更胸を刻み行く。
朝夕見つる人の子の、　知らじと計り過ぎ行けば、
心細さのいやまさり、　ひたすら故郷を戀ふる哉

東に西に漂泊ひて、　踏み來し路は三千里、
志をば世に得じと、　此まゝ土に埋れむ。

◎秋の朝

茨城　滑川うつぼ

秋の朝、萩の香高く、　涼しき風、たれ髪なぶる、
垂れ柳まれくや川端、　行く道を白萩とざす。
露の萩踏まばこぼれん、　あゝ惜しや露散らさんは。

◎霜

武藏　細沼藤子

『花の月夜にあくがれて、　少女の眉にくだけつつ、
はかなき戀をもろ共に、　なげきし者は汝ぞかし』
『月かげ白き秋の夜に、　尾花の袖を宿として、
浮世果なき此の世をば、　あはれ添へしも汝ぞかし』
『花の雫のうるはしく、　置く白つゆの優しさも、
哀れや夜半のさむ空に、　霜となりしぞわりなけれ』

◎三日月の夜

芝　まきの

はぎの錦はやれはてゝ、　まれく尾花の袖さむく
虫のこゑ霜がれしさへ　あはれ初冬の、みそらには、
三日月淡く星清く　我が文机をてらせりな
こゝに隔つる三百里　遠きみそらに見うへは、
一人淋しくおわすらめ、　されど今宵の月かげは、
あはれいづ地もかはらじな。

◎ねむれる少女

淺草　大沼菊江

まとう衣はうすくとも　あつき情を身にもゆる
邪なくねむる少女子の　心は清し神の如
折々もらすゑみの底　いかなる夢か漂へる

◎あけぼの

加賀　恒子

秋に近きにわとりの、
欄干あたりさまよへば、
庭の若竹露清く、
紫さてはくれなゐの
見よひんがしの空の色、
天津女神やいますらむ、
うす靄暗き乾坤は、
あたりに滿つる愛の色、

床しき壁に夢さめて
ふくも涼しき朝の風
垣根に匂ふ朝がほの
花の色々麗はしや
そこには清き曙の
やがて射出づる金の征矢
そこにいよ〳〵明けそめて
あはれ尊し曙の色

〇仇かたみ

美濃　傍島威子

去年の祭に愛で着てし、
いとし我妹今いづこ。
なげきの内に早や一と歳、
見るにつけても增なみだ、

振りのはれぎは殘れども
忘る隙とてなけれども
さても仇なる此のかたみ。

〇草とならばや

河內　蓮花

草とならばや我こゝろ、
春野に君の出てんとき、
摘まれて籠に入らむ哉。

草とならばや我こゝろ、
涼しき風にいこふとき、
君がほとりをさまよはむ。

草とならばや我心、
岡邊に君の出てむ時、
せめては君を招き見む。

君が情に逢はざれば、
はかなき望とげたらば、
枯るとも何かいとふべき。

のどけき風に誘はれて、
葉となりてもえ出てゝ、

戀しき君が端ちかく、
蚊遣の烟と身をなして、

泣なる虫に誘はれて、
葎となりて穗に出てゝ、

やがては絕ゆる玉の緒の、
風ふきて霜ふりて、

〇とく歸らなし

陸奥　三宅嶺子

故郷に、
ふるさとに、
いざさらば、
歸り來と、
故郷に、
ふるさとに、

母は待つなり、
妹はまつなり、
とく歸らまし、
母ぞ待つなる、
妹ぞまつなる、
とく歸らまし、

〇戀

沖　水子

春の女神の天降りては、
若き乙女に戀なくば、
地なる花には香あり、
世を飾るてふ若き子に、

香もなき世にも花は咲く
などて快樂のあるべしや。
み空の星に榮あり
戀てふもののなからめや



文學士 沼波瓊音先生選

天

○濱づたひ

津市西新町三十九番地
松尾はな子

寒い長谷嵐が颼と計り川面を渡るとざわ〳〵と立騷ぐ波に捨小舟の二三艘どたんばたりと動いた。途端苫に止まつて居た鴉が吃驚してふッと飛ぶ。

私が綾川堤路に沿うて阿漕ヶ浦に出ると風も凪いで松林がさや〳〵と鳴る計り、紫がゝつた海面には白帆の影もあらず、只白い鷗が二四水に戯れて居る。

「えんやッさ〳〵えんやッこら、えつせ……」

太い銅錆びた聲が聞えたので前方を見ると數多の漁士が連りと網を引ひて居る、私は氣儘に柔かな銀砂を踏んで行く。軈て其後への草原に憩うた。

時は恰度夕暮て冬の夕日は今しも布引の山嶺に落ちた計りで弱い力ない夕燒の空も美はしう末廣がりに茫乎と桃色、オレンジ色、水色に溶け合つて、その水色の果てに、早や十三日の夕月が薄つすりと浮いて居る。

贊崎燈臺の回轉電燈の光が海面に流れて油でも流した樣、海原遠く參尾の諸山が夢の樣に見える。

「えんやッさ、あれやッさ、やれやッやッ〳〵〳〵」

今しも網は數十間の處迄迫まつて追船の邊り、白鷗が魚を瞰ひつゝ飛び迷うて、魚の飛ぶ度び銀鱗閃々と勇ましい、老いたるも若きも銅の樣に燒けた脛を現はして掛聲急がしく網を曳く、二十間十間、早や五間!!漁夫は喧ましく罵る、魚は跳る、船では手を擧げて、合圖をする、鷗は驚ろいて飛んで行く。

袋は早や手元に迄迫つた、妻の手助けに眞裸躰になつた壯者數人、此冬の海に飛込むや否や袋を取つて船に運ぶ、銀鱗閃々と光つて舟に積まれる、兒童は魚得むと馳せ違ふ、見る間に無邪氣な漁夫の歡呼の裡に船は砂上に曳き上げらるゝのであつた。

四邊は見る〳〵夜の幕に蔽はれて、欸乃長閑に漕ぎ行く漁船の櫓に金龍銀蛇燦々と流るゝのである。

（評）漁村の夕景見るが如し、殊に網を曳く所短句を重れて勢あり、

地

○朝

廣島市天神町
畑井音松方
双蝶女史

日曜と云ふ嬉しさに、早や眼が醒めた、障子はまだ薄

暗いが、楊子くはへて、階段を下りる、宿のお婆さんはまだ眠ていらつしやるのだらうと思つたから、静かに椽を下りて、井戸端に行く、武田の山の端に曉の星が一つ、垣根に少さな白菊が一本、折らうか折るまいかと、思案をしながら顔を洗つたが、終に折らないで書齋に歸ると、下でお婆さんが夜具を疊む音、妾も直ぐと夜具を納めて、ばた〳〵と机、本箱、障子を綺麗に掃除して、桐胴の火鉢にうんと炭をつぎ、さてその前に坐を占めると、何だか重荷をおろした樣な氣持、どこやらでギーと釣瓶の音、裏で鷄の鳴く聲、といつの間にか明るくなつて、昨日張り替へた丸窓の障子に、ぱッと暖かな朝日影、庭の老松が描いた樣に映る、あゝ晴々する、遠くで拍手の音が聞える、あまりの麗らかさに、窓押し開けると、山茶花の赤いのが露を含んで、朝日にきら〳〵と光る、清い日影が青疊にさし込んでゐる、軒端で雀が朝の歌！ほんに朝は氣持がよくつて、罪も穢も清められた樣な思ひ、空には一點の雲もなく、澄み渡る湖の樣、河一つ隔てた琴彈山の、松も紅葉も手にとる樣に見える、から〳〵とお隣の二階の雨戸を開ける音が、はたと止むと、ガアと鴉が一羽、琴彈山から出て來て、裏の熟柿一つ殘つた柿の木に止るかと思ふと、又直ぐと飛び去つた、山社の神々しい太皷の音が響き出す、堤を牛引き行く農夫の姿、樂しい光明の下に活動すべく行くのであらう、山麓の藁屋根から朝餉の煙りがゆるく昇る、と階下から御飯の暖い香！

（評）景平穩詞亦平穩これを讀めば心自ら然たり



ふじ山（賞外）芝金杉一丁目　額川とき子

人

○終焉の床

三河西加茂郡石ヶ瀬澤田忠三郎方　澤田つま子

かりそめの病に打臥した妹を慰めようと、未嘗五六つ

けし計りの紅梅をその枕邊に挿したが、何時か美しい盛も過ぎて、色褪せた花葩片々と藥の香迷ふ窓に散る黄昏を。妹は遂に逝くべき運命を神より授かつたのである。

「姉樣！」吁其の細く微に、顫を帶んだ聲、妾は聞くに胸も裂くる思、「アイ！」と枕邊近う寄添つて頰に亂れし鬢のほつれ毛搔上げてやりながら、ヂッと其の面疲れした顏を見入ると、鳩の樣な凉しく愛くるしい瞳はいたくも落凹んで光もなく、唇は菫の花の褪せた樣になつて幽に觸るゝ呼吸の亂れはありやなしやと疑るる許り、母樣は絕えずその熱に渴くのを、筆の命毛もて濕して居なさる。

瓶の紅梅の花、ホロリと一つ散つた。

「姉樣、父樣は？」とその落凹んだ眸を見張つて淋しげに眤と四邊を見廻した。「雪や父は爰に居るよ、分明るか、確りしなけりやいかぬ。」と仰つてホロリと眞白い髯を泄る一雫、夜晝なしの御介抱に御無理もない御老躰は綿の樣にお疲れて、憂と心配に滿ちたお顏もドンヨリと曇勝てある。

さらでだに藥の香の立罩めた陰氣な病室の外は折柄の春雨の空暗く、筧の音は詫し氣な響を傳へて、宛ら滅亡の魔の囁かと思はれ、雪の如き敷布の間や、枕元に並んだ藥瓶の蔭には、忌しい死の影が潛んで居るやう。

「皆樣、長い間お世話を受けましたが、妾今夜は迚も？」

胸苦しいのか唖れ果てて虫程の聲音、幽かに開いた眼には哀れ涸れ果てた最後の一滴が玉の如く輝いて、枯木に似た蠟色の手には既に脈搏も絕えたのか冷く氷のやう、取縋つた三人は思はず側を向いて咽んだのである。

紅梅の花今一つ散つた、又散つた、最早殘れるいくつ哀れ幽けき香をそこに湧かせて幾日か妹を慰めた紅梅は今殘りなう散り果てようとする。

俄然妹の呼吸は亂れ〳〵て脈は次第に低くなり、顏色が刹と變つて閉ぢた眼をバッチリと見開き、三人に腕を握られた儘莞爾と、力を集めての笑は世にも美しう輝いたが、夫や恰も落暉の榮の彩だにも如かで、忽ちガックリと色を失うたまゝ、眸を閉ぢてすや〳〵と、終焉に近い昏睡に陷つて行くのである。

吁其の時！、僅に一點の名殘を止めた紅梅の花はバラッとくづれて、仰げは骨許りの枝、俯せば石のやうな妹の亡骸。

紅梅の花散る夕暮を、妹は靜にこの世を辭し去つた、

美しい其の姿や、凉しい其の聲の永劫聞く事の出來ぬ深い暗黒の死の谷を、今宵は寂しう辿るのである。散る花心あるか、逝く人心なきか、軒には春雨の音も愼ましう降つて居る。

（評）凄惨の氣紙面に溢る、紅梅の花を處々に點して凄更に凄、

秀逸

○菊園の朝

大阪鹽町一　つ　ゆ　子

今日は亡きお祖父さんのご命日なので、日頃お好きだつた菊の花を手向けんと、私は城山の頂に、まだ消え殘る明星の光りを仰ぎつゝ、裏の菊園へ來たのである、しかし此時、夜は未だ十分明けて居ないので、四邊うす暗く、つい眼の前の花ですら、その眞白いのだけが幽かに見えるのみで、その他の色は確と見分け難いので、已むを得ず此處にひとり佇んで、夜の明けるを待つて居た、この園といふのは、まだお祖父さんが達者で居らしつた頃、處々から種々の苗を取りよせて、丹精こめて造られたもので、お祖父さんは、年毎にその立派になるのを見ては、何よりも喜んで居られた、そして花時になると、朝早くから私を連れて、此處をお散歩なさつて、私のねだる花を快く折つて下さるのが常であつた。然しそれは既に六七年も昔のこと。今頃は淋しい冥途で、定めしこの園を見たいと思うて居らつしやるであらう。或は冥途から此處を見て居られるかも知れない――。

朝寒の風に、それからそれへと移る妄想の夢を破られて、ハット頭を上げると、夜は全く明け放れて、うす紫の煙が、遠近の農家から、縷々と立ち上つて居る。此時不意に窓が明るくなつたので、さては日の出と、袖を重ねて見詰めて居ると、今までふは〳〵と山の上に浮んで居た紫紺の雲が、恰も花の開くやうにぱつと擴がつて、一天見る〳〵朱に變じ、眞紅に化したと思ふ瞬間、炎々たる旭がヌーッと山頂に躍り出た、と同時に、金色の征矢が幾條となく下界を射た。「アヽ奇麗だこと」と思はず私は口走つたが、我ながらあまりの大聲に、はつと四邊を見まはしたが、幸ひ人も見えぬので、胸なでおろして菊園を眺めた。

白、紅、黄、或は桃色など、皆配りよく植ゑられた無數の花は、一樣に、曉の氣に蘇生つた如く、得ならぬ香と共に、各々美しさと大きさを競うて居る樣の見事

さ。殊に金色の露を帯びて光つて居る白菊が、今にも燃え出さんばかりの眞紅の花と、見る眼も眩しい程の黄金色との間に植ゑられて居る配合の美しさ、それが又旭の光りに一入見榮のする樣、實に朝の女神とでも言はうか。花は恰も靈あるものゝ如く、犯す事のできぬ威嚴を持つて居て、美しいと言ふよりは寧ろ氣高く見える、私はいつしかその氣にうたれて、暫しは茫然と眺めて居た。

私はいつまでもかうしては居られぬと、氣を取り直して、その中で、お祖父さんの最もお好きであつた白の大菊二三枝、なるべく露のこぼれないやうに手折つて、早うお供へしようと、急ぎ足で家に歸つた。心は尚ほも花のあたりをさまよひつゝ……。

（評）清氣人を襲ふ

○藥堀り

松山市三番町九三武智内　山脇幸子

例の食事岩の上に立つて見渡せば狹霧晴れ行く麓の村の小高みに見ゆる我宿……午餉の煙は裏の柿の梢から細う〳〵立つて居る、門の邊に小さな人影が二つ動いて居たがやがて裏の煙りが立止だ頃其影はころがる樣に西と東とに分れて一ッは內へ一ッは隣りの家に入つてしまつた、アゝあれは琴ちやんと隣の美ちやんであらう、此の山奥に生れたけれども美ちやんと琴ちやん程仲のよいやさしい心ばえはあるまい、そして二人はいつも一處に遊んで片時も離れた事はない、只寐る間と御飯の時に分れて居るのみだ、やがて又出て來て睦じう遊ぶのであらう、殊に來年からは二人共學校へ行くのだが私はアノ美しい天使の樣な美ちやんとやさしい琴ちやんとが袖を連ねて手を引き合うて學校へ行く時が待たれるのです、けれども美ちやんは內がお金持だからどんな學校に迄も行かれるのに琴ちやんは內が貧乏だから中等以上の學校へやる事は出來ない。アゝどうかして美ちやんと一處に上の學校へやつて上げたい、オゝさうだ……よし此の姉は襤褸一枚で冬を通すとも此の枯枝で髮のほつれを止めるとも充分だ、此藥堀りで滿足だ、美ちやんが行く學校へは琴ちやんも屹度やつて上げよう……オゝさうだ……。

私はかう決心して我が家を見ると向の畠から歸つた父は今門をはひられた、私も食事をしようと腰を下した、やがて立上れば父は早元の畠で鍬を振つておいでだ、美ちやんも琴ちやんもまだ出て來ぬ、お母さんに朝からの遊のお話しをして居るのであらう、私は鞋の緒を

しめ直して再見れば二人は早元の處に睦じく遊んで居る、ア、私は埴生の宿に理想の妹を持て居ます、ア、今日は早く歸つて此の嬉しい決心をお母さんや父上にお話しませう、そして此の腰にさして居る秋の草花を美しいやさしい美ちやんと琴ちやんとに半分づゝ……

（評）温厚なる味、春葉の小說の如し、

○元旦

藤枝町　わか榮子

東天紅と告わたる鷄の聲に、私は待に待たお正月かと心嬉しく、抱き合て寢て居る妹に「美いちやん愈お正月よ、嬉しいね」と囁けば「うれしいわ、姉さん」とこれも今目覺めたばかりで莞爾する、ほのぼのと夜が明けそめて、勇ましい鳥の聲が裏の森で聞えたと思ふと、くるくると父上の若水汲み玉ふ車井の音響いて、つゞいてぽんぽんと拍手の音。

「起きよう」と二人するり床をぬけ出て、くみたての水に面さつと滌めて、四疊半の小座敷、明るい窓の下に鏡臺据て、妹の髮結ひにとかゝる、品のよいお下げに、リボン、輪櫛も映りよくつけ終へて、つぎに自分の高髷、撫でつけ居れば、乳母は早くも襖の外にて、

「お風呂が湧きました。」

霜しげき曉の冷きつた躰を、心ゆく許溫めて、またもとの小座敷、鏡に向つて、水白粉掌へぽつちり顏へひつたり、手早くふいて合せ鏡で直し、更に妹の襟をも直しやりて、衣服更め、打つれて父上のお室へ御挨拶に行く、

秋の山家（賞外）



茨城縣下妻町　外山しん子

「明けまして御目出度御座います」「お目出度御座います」、父上もにこやかに「や、お目出たう」、長いお髮をきれいにわけて、五つ所紋付の黑羽織ゆたかに、あらたまつて被居る、ところへ母上も入來玉ひて「御目出度御座います」、四人ひとしく何とはなしに莞爾する、

一としきり、雜煮の餅やく香、花かつぶしのかをり、座敷に流れて、一同新しき年一つ拾ひて、みな〳〵箸を置く。

少時して父上の禮服は母上、妹の紋服は妾が手傳ひて、裝ひやれば、父上は俥にてお役所へ、妹は婢つれて學

校へ。愈妾らの着更と、母上は小紋の重ねに黑羽二重のお羽織、妾は紋御召の三枚重ねに、小柳織有職模樣の廣帶、友禪の帶上に脊負ひ上て、しばしと姿見の前に立つまもなく「お客樣で御座います」。

かねて用意の、ごまめ、數の子、勝栗なんど持ち出てゝ、鶴龜のお盃に屠蘇なみなみと、すゝめまつる役は妾、それからそれとお客さまの入らしつて忙しい事。午後はお母樣に替つて頂いて美いちやんと一緒に琴のお師匠樣へ御年始に、晩は伯母樣のお宅のかるた會に、ゆくつもり、朝から羽根突くひまもない、いそがしいお正月だこと。

（評）まことに女らしきやさしき寫生文なり、寄稿家に往々ある「名のみの女子」には斯る文は出來まじ

○欲望

府下日暮里元金杉一〇三〇　小中村榮子

そも、人生の慾望や、無限なるに遂げらるべきもの幾何ぞや、人は獲取すべからざる富貴を追慕し、知得すべからざる眞理を渴仰し、到達すべからざる官爵にあくがれぬ、かくて世は、疾視反目絶望叫喚の修羅となりき、無きものゝ叫ばざること長明の如く、有るものゝ散することカルネギーの如くば、平和に於ける戰の聲は、長へに消ゆべき哉、あだなる望をすてよ、まことの果實をえむとなれば、請ふ、自然の詩を讀め。

（評）言簡にして意長し

○秋の一日

熊本市外九品寺官舍　湖畔

「姉樣お好きな安巳橋の秋の色を見に行きませうよ」と誘ひにきた靜さんについていつしか身は白河の橋上に佇んだ、四五日見ぬまにこゝかしこの景の目新しいのにタイムの業の速さには驚ざるを得ない。

河添のうるし並木は眞紅の錦と化して居る。向う岸には盛者必滅の理を說き顏の柳の古木が只一本過ぎた昔の物語でもしたさうに立て居る、そばの畑は如何な優しい賤の女が耕したのであらうか作物の周りには色さへ妙な野菜が思ひのまゝに笑んで居る。

砲兵隊から起つた歸營のラッパの高鳴に躰を回して右手を見れば雜木林の其さきが一群なした竹村で末は霧の中に溶けて、其あたりで白河は急に狹まいと岸の紅葉を寫して居る常は眼のとゞくところも夕姬が干した銀鼠の布にかゝつてしまつてあとはなしに「寂寥」が滿渡つてゐる

栄ある過去の巻繰りかへしたとてタイムはもとにかへらうか、今家宿は、百重隔たる雲霧に都の空も見えわかぬ南州の地ではあるまいか。都慕うて何とする昔忍びて如何する……あゝ、むしろ私は永久に静さんのやうな心となつてつらい現在をしひて笑まう……と幼ない顔を見守つた時短かい日あしは我立つかげを水に投げてさて人の世のなべての『物』を金の征矢もて射初めた

「往くべきものをゆかしめよ、運命を人はいかにせん」と吟むうちに水音がせはしく聞えてきた。早水車近くにきたのであらう、木の間をすかして行手を見れば十歩のさきで一に堰れた水は急湍となつて茅屋の内に迄迫つて居る。かくて一分〳〵に搗れた米はやがて皇國の資と成るのである、いくら文に歌に拙なき身とて撓まずなせばこゝに居たとて如何して志の達せられぬことがあらうか。

鳶の葉の半赤くなつた門で弟のいたく呼ごゑに銀星西にまたゝくころ家は柴折戸を閉したのである。

（評）感慨更深

○夕ばえ

横濱市西戸部六〇五番地　川田てい子

コラ〳〵と叱るやうに鳴子がなりますと今迄チュウ〳〵と騒ぎ合ッて居た雀の聲がぱつたりやんでばら〳〵と空に礫を蒔いたやうに飛んで行つてしまひました、あとは森としてそよと吹く風さへも御座いません

瑠璃色に輝いて居た空はだん〳〵と赤味を帯びて玉虫の羽根のやうに美くしく光り初めました、お日様は、今丁度、富士山の後ろの方へ静かに降りようとしていらつしやる、だん〳〵暗くなりました、それはお日様が今あの雲の御門をお潜りになつたからなのです、邊が一時にぱつと金色に輝き出しました、

朝見た時には雪のかたまりかと思つた程裾の方迄眞白だつた富士山が、今は丁度金屛風に描き出された墨繪のやうにあの美くしい金色の空に高く濃紫に輪書正しく聳えて居ます、二つ三つ刷毛でかすつたやうな雲がふはり〳〵と互に近寄つて來たかと思ふと一處になつて握手しながら飛んで行つてしまひました、暫くするとむら〳〵とシャボンの泡をとかしたやうな白い雲が重なり合つて出て來ました、どれも皆んな黄金の冠を戴いて。お日様は今朝本牧の沖から出ていらしつた時のやうに、にこ〳〵と笑ひながら美くしい〳〵光

をはなつて悠々とお降りになります、新郎が祝の殿に入る時のやうに、黄金の冠を戴いた雲は皆一同にウヱルカム〳〵と云ひながら手をのべて此の美くしいお日樣をつゝんでしまいました、ア、何と美くしい此の夕。

（評）雲を描く殊に富麗

○夕べの橋

姫路市小利木町八番屋敷本郷方　水の守歌子

怪しい雲のたゝずまひ、何うも空模樣が穏かでないと、お三や田吾作が小首を傾ける中、釣瓶落しの夕暮は、いつしか城山に半身をかくして、一日の榮を惜しむかの樣、寂しい光を禿山から長々と地に引いて、碧色の流の上に横たはつて居る福井橋の此處まで達してゐたが、其れも暫しの間で、小倉袴をはいた役所通ひの書記と、燗徳利さげた何處かの主婦さんと、空俥引いた車夫と、小犬一匹とが、續き〳〵に橋を通り越した時には、もうばつたりと落ちて了つてゐた。と、そろ〳〵吹き初めた冷たい風が、文明の吼聲に畏敬せよと云はむばかりの工場の汽笛や、此世を寂滅の底に打落して了ふかと思はれる鐘の音を、交々流して來て、凋落の聲を岸のわくら葉にざんざめかす。

處へ、紺の半天に紺の股引と云ふいなせな職人風の男が、ぽつ〳〵と白い息を吐き乍ら、差しかゝつたかと思ふと、すれ違ひに、向ふから仲居風の女が一人、小走りに下駄のきざみを高う響かせ乍ら、橋の中程でぶる〳〵と身振して、呟く樣に『おゝ寒むッ』いつか薄墨を刷いだ樣な黄昏の色が、何處からともなく下つて來て、甍の、波だつて居る市街は、幾多の電燈の光に、空を燻して居る。『あゝ落寞たる夕べかな』と恁うつぶやいて、一人の書生風の青年が、籐のステッキで地をこつ〳〵敲き乍らやつて來て、橋のてすりに衝と凭つて、蕭條たるあたりの風物を、睥廻した。途端、向ふの方で、丁稚が村元氣に大聲をはりあげて歌つた軍歌の一節、其餘韻が黝暗の空に長う響いた。

（評）賑やかにして淋しき景趣

○戰死

福島町仲間町二番地内　高澤愁子

兄上さんはなぜ歸らないのか知ら、正ちやんの父さんだの、欽ちやんの兄上さんだの、立派な軍服を着けて歸つて來たのに、兄上さんばかりなぜ歸らないのか知ら、仲よしの姉上さんに聞いても、外方を向いて敎へ

て下さらないんだもの、あゝ姉上さんはもう僕を可愛がつて下さらないのか知ら、だけれども何日であつた、あゝ寒い晩だ、僕と姉上さんと奥の座敷で、勇ましい兄上さんのお寫眞を見た時だ、姉さんは「敏ちやん、何日までも姉さんと思つて頂戴よつ」て僕に抱き付いた位だもの、矢つ張り僕を可愛がつて居るには相違ないよ。

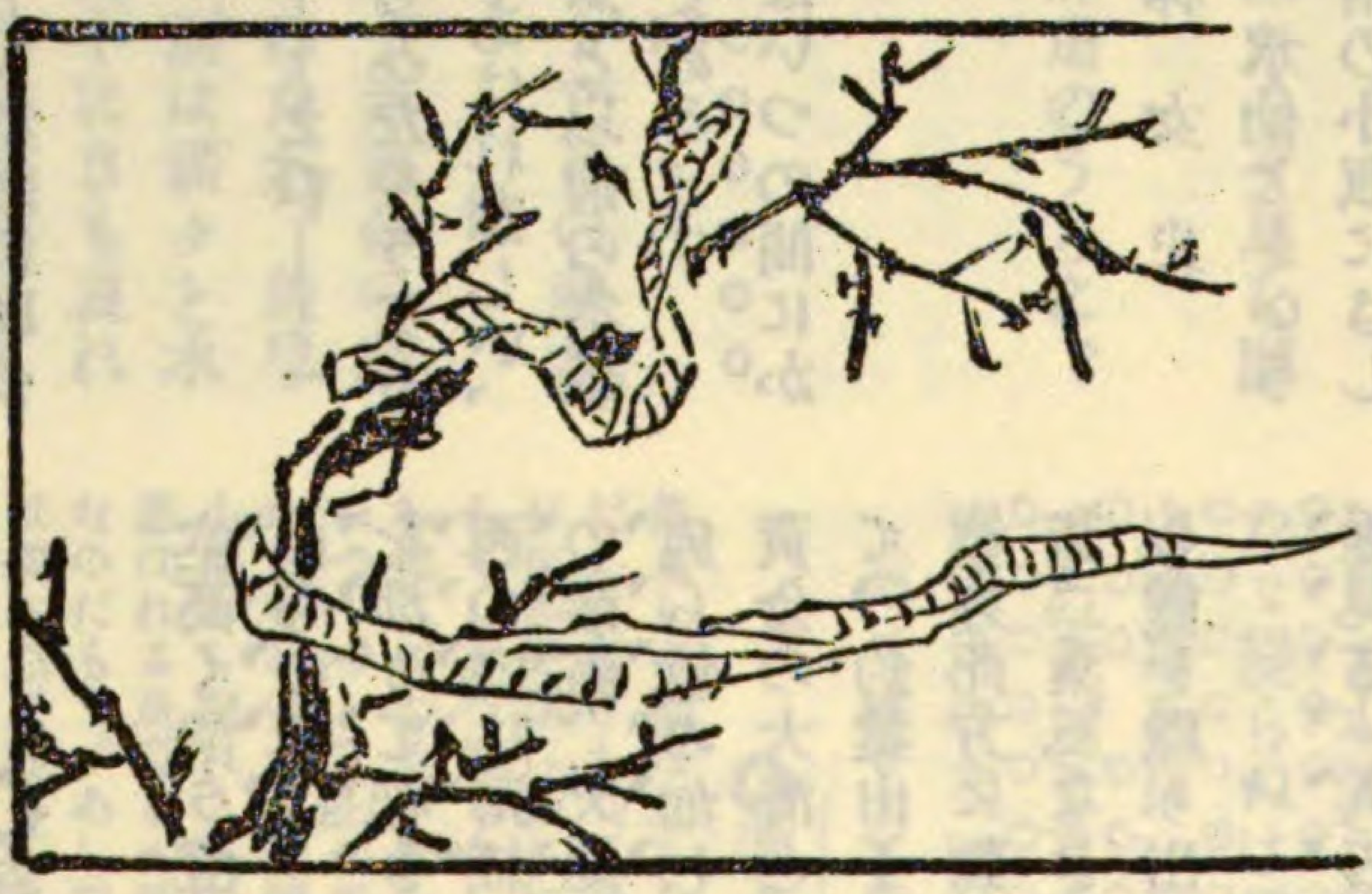
あゝ兄上さんはいつ歸るのか知ら、僕のお土産は必然劍と喇叭と……歸る時、僕は仲よしの姉さんと兩人て、停車場迄お迎に出て、兄上さん萬歳と云つて驚かしてやらう。姉上さんは必然笑ふよ。

* * * *

姉上さんこれは誰のお墓？……姉上さんこれは？……姉上さんなぜ泣くの……姉上さん忌だなぜ泣くの……僕も悲くなるから泣かないで頂戴よう姉さん……

（評）戰死を言はずして戰死の慘を曲盡す

蛇の脫衣　（賞外）　高知市永國寺町　宮田春子



○磯の夕暮

羽後國飽海郡南平田村大字櫻林　菅原花子

「沖の鷗に汐時問へば——
　わたしや立つ鳥—波に問へ——」

浮きあがるやうな、のんびりとした、和らかな聲調で、さも面白さうに唄ふ欵乃が、彼方の船の苫のまから靜かにもれてくる。

暮れ易き冬の日の今日も早や黄昏。名殘惜しげに暫し西の空に彷徨うた薄明も次第に消え失せて了うた。

沖邊には白や黑や、色とりどりの帆前船が七八艘も影をならべ、遙かに見ゆる飛島も次第に灰色の薄衣に包まれてゆく。

あゝあの聲ののんびりしたうち、其處に彼等が一生の氣樂さがよまれるのである、實に彼等は幸福である、自然の寵兒である、身に名譽なければ世の毀譽に頓着せず、人に恐れず、世に諂らず、急がす、騷がず、常に悠々緩々と板一枚下

地獄の上に安居し、自然の大文章を我ものとし、造化の賜物を無遠慮にあさり、朝に愉快な歌をうたひ、夕に樂しい夢をみつゝ、實にうらやましい生活ではあるまいか……など考察へつゝ、尚も深い〳〵空想に耽つて居た――此時

「わしが心と沖くる船は――
樂にみえても――苦がた――えぬ――」

成程、左樣かも知れぬ――苦樂は他からみたやうなものでない、悠々たる彼等も猶心裡には、あはれ悲しい、苦しい感想をして居るのか……と思ふと以前の空想は忽ち消えうせて、或る感に觸れたのである。

靜肅なる灣内を照して、宮の浦燈明臺はいつの間にか光を放つて居る。

(評) 平淡にして思淺からず

○水仙花

水戸市大野屋　好林女史

恠しう人めきたる名の草木多かる中に、水仙こそいうにをかしけれ。根ながらとりきて、水精の小瓶にさして見れば、花はたをやかなる仙女の顏して、いみじうくゆりかゝる香は、實に人間のものとはおぼえず。葉は青摺の裾をよそほひ、根は素きうすきぬの襪をはきて、水の上を渡りくるやうなるは、うべも水仙の名に負へる哉とぞひとりごたるゝ。

(評) 文亦洒脫

○落穗拾ひ

上總千代田村岩山台内田方　翠蹊女史

空高く淸う澄める日は暮れんとす。

山寺の鐘は、嫋々たる餘韻いとながく、野を越え、溪を渉りて響き來る、見よ富士の嶺は巍然として崇高く、西の空は薄紅の色に、東の空は葡萄色に匂ひて、一幅の活畵、天地明瞭に繪がかれつ、寂寞たりし晩秋の景宛ら鏡の如し。

黃金の大海といひし數千町の田の面は大方刈りとられて、釣案山子の俤今は名のみにして、秋風に吹かれて彼方此方に動く樣いとをかしく、彼方の山の紅葉は一葉二葉風なきに散りて三葉四葉……はては薄絹の如き霞を織り出だしたり。

＊　＊　＊　＊　＊

唯見る一人の少女、綻びたる裳を秋風になびかせて、淋しき河畔の葦間に、或は水田に、此處其處と落穗を拾ひ行けり。あゝ可憐の少女!!!

あはれ瘦せたる後姿のいたいけなる……

忽ち落穗拾ふ少女は、暮靄の中にかくれ、冷やけき風はその後を追うて吹けり、我は茫然として後姿を見送りぬ。

＊　＊　＊　＊　＊

折しも雁二聲三聲、萱屋の上には、燦然たる夕星を顯したり。

あゝ我は縷々たる感懷に堪へず、夕の靜肅のうちに、留守なき晩秋の庵に歸りぬ。

（評）哀なる情趣あり、物足らざるを惜む、

〇初冬の野邊

能登輪島町川端丁菅野方　しげ子

有名な北國の雪はまだ降らねど、荒涼な十二月の神が冬空を渡るのである

つい二月前までは、此の塚田川邊の稻は一面黄金の莚を敷いた樣で、そよ吹く風に浪打よせてゐたが、最早刈り收められて其影も見えない、刈田の面は滿々と水は溢れて絕えずさゞ浪を打つてゐる、其中にさも哀れに立つて居るは、長らくの間こゝ等數丁の田を預りて三伏の炎熱も風雨のあしたも厭はず、勤め大事と守つて居た案山子である、

向ふの川岸には、冬木立が五六本骨のやうに立つて居るが、丁度瘦せた老人が杖に倚つて淋しく立つて居る樣である、さうして青い物というては曳き殘された大根の一團と、玉葱の彼處此處に殘つて居るのみでどこを見ても最う冬の景色である、

たゞ變らぬは信綱塚の一本松と、鴻巢山麓の杉森で此山の峯を白い湯氣の樣な雲が絕えずさまようて居るのである、こなた野小屋の水車は勢よく廻つて居るが、意氣地のない私等には何んだか寒う聞える。

（評）飾らざる所に荒涼の氣あり

〇道すがら

丹後　小枝女

勇ましい樣な愛らしい樣な又どこか悲しい樣な鄙唄の聲が後の方にだんだんと遠ざかつて今は微かに聞えて居る。と堤の脇の細道から二人農夫が何か聲高に話しつつ妾とすれ違つたがいつしか其姿も夕もやの中に消えてしまつた。今し日は山端に入らうとして雲に映じて淡く美しい彩色を流してゐるにそを縫うて星のきらめき一つ三つ二つ。岩手の坂を登りつつ、つと立止つて此雲の美しさに恍惚として居るのは學校歸りの袴姿なる妾なので。折柄響く入相に驚き漸く步を移したが行くにつれて水車小屋から洩れるかたりことりの音が高く大きく聞える。世に悲しとのみ思はれる此音さへ妾にはマーチとも云ふべく。あゝ妾はなぜにかく幸運なのだらう。あした星を戴いて出づればそこに幾多無邪氣なるいとし兒は笑を以て迎へてくれる。日ねもす愛の神と化せられて夕星影をふんで歸れば、ここになつかしの母あり妹ありて其眞情より流れ出るお歸りの一言に一日の勞を忘れ又夕餉の膳に山海の珍味はなくもより以上嬉しき母上が心づくしのあつ物に一家團欒の樂しみを味ふのである。あゝ樂しい妾幸多き妾とくり返し思ふ刹那。

汝が敎ふる子は次代の國民たる事を忘るな

汝は汝が母の愛のため今日あるを永久に忘るなあゝ天の聲であつたか。と同時に夢よりさめた心地。と見れば滿ちたる月は山の端を少しはなれて、そして身はいつしか町に入らんとして居るのであつたあゝ今日も暖かいホームの人となるので、母上は如何に待つてゐらつしやるだらう。明くれば又小國民たる可愛の子等を導かん、あゝ樂しさことよ

◎朝の散步

千葉　小高せい子

今朝は五時半に起きて、例の如く野外を散步すべく家を出でた、雪かとまがふ許りの霜は小川に架してある圓木橋を白くそめて居る、川の氷は昨夕の寒さて凍つたのであるか、俄かに水が少なくなつて氷と水の間が一二寸ばかり離れて氷は白くなつて居る、其下をチヨロ〳〵流れ出してるのは宛然氷の隧道である、私はいつも此の小川の邊を唱歌をうたひながら行くのである今朝はあまり寒いので良い聲も出ないが、遙か西の方て水車てガタンギー〻〻〻と西風の强い弱いに因つて高く低く、恰も音樂の樣に聞ゆるので私は此の聲に負けず歌ひ出した。丁度學校の周りを一巡りして歸る時に太陽は庚申塚の松の枝の間からキラ〳〵と差し上つた。ふと私の家の方を見ると、鎭守の森は半照らされて、私の背齊もこのまばゆき光を浴びんとしてる、私は此の新鮮なる空氣のために深呼吸する事數回、霜を渡る寒風に向ひつゝ歸つた。柱時計を見ると六時四十分まだ八時の登校時間には一時間の餘も早い、それては此の間に靴でも磨かうとゴシ〳〵摺つてまばゆき程に光つた頃は正しく七時十分。

◎溫泉日記の一節

信濃　千婦れ

十一月廿一日　　晴天　　火曜

嬉しい日。樂しい日、待ち遠しかつた溫泉行も、漸く今日となつた!!!、お母樣に、早く仕度を仕無いと措いて行くよ、と言はれて吃驚、お化粧もそこ〳〵にして出掛けた、午後三時、澁溫泉博愛館に着、

十一月廿二日　　晴天　　水曜

昨夜は、如何したか一寸も睡れなかつた不快さに、早々入浴にと向つた、農事多忙の故か浴客の少數な事、思ふ存分我儘して浴し、時計の七時も知らず、卅分過ぎたのに驚いて上る、歸ると下女が膳を前にして大欠伸、最う御飯が冷えました、と不興らしく言ふ、お母樣はお隣り座敷にお話しにとか、午後三時頃入浴、夕方早く御飯を濟して入浴、約三十分許りにて上る、世に湯上りの心地程快いものは無い、歸つて遺憾心の淸々した時に歌の一首もと思ひ、作れど〳〵思はしき物一首も出來ず、あきらめて臥床に入る

十一月廿三日　　晴天　　木曜

「お客樣、葱、納豆、玉子、ても如何に」と商ふ、少女の聲に醒されて驚いて起きる、東の窓の隙間より、お日樣はお寢坊など言はぬ計りに、强い光線を直射して入らつしやる、湯上りのお母樣に、お前今起きたの、と言はれた時のきまりの惡かつた事、お返辭も出來なかつた、十時頃入浴、午後お母樣と裏の築山へ散步に行く、別に眺めるべき物もない、無數の浴客に、此れはと仰がせた紅葉も、褪せてしまつてゐる

十一月廿四日　　晴天　　金曜

昨日の代りに早く起きて、皆んなを驚かしてやつた、一浴後朝飯すまして、お隣りのお客樣と西洋むさしの勝負をやる、やつと今朝覺えた計りの、殘念ながらいつも露西亞、是れでは叶はぬと思ひ切り、お辭儀をなし、座敷へ戻り入浴も忘れてのお稽古、あすはおんもりと勝つてやらう

◎鐘の音

讃岐　久保あや子

物靜かなる山寺の鐘樓に、美しき夕映の色を眺めて茫然と佇み居りし一人の僧、俄に思ひ出したる如く、つか〳〵步み寄りて、そが痩せた腕に撞木の繩を取るや、一おもひに力込めて撞き出したる夕暮の鐘、霞を破りて四方に廣がり行き、やがて其の音のかすかにかすかに消えなんとする時、散り殘りたる梧葉二片、三片、風無きに纈染めの袖にかゝるを、知るや知らずや、口の中にてかすかに念佛を誦しつゝまたも一撞き、あはれ鐘の音よ、林に森に、野に山に、やがては人の里にひゞきゆきて、如何なる思を告ぐるらむ、噫々あはれ。

◎初冬の田園

長野　幾子

身をきる樣な木枯の風が、裏の木立に、ひゆう〳〵と物凄い音をたてて、木の葉が、から〳〵と、霜柱の高く立つた庭を走りまはつて、菊のたふれかかつた、からたち垣の隈に堆く吹き寄せられる。納屋の前には、五六羽の雀がちち〳〵と、いかにも寒むさうな聲て、餌を拾つて居る。朝

餉の烟が、むら／＼と立ちのぼつて、こればかりは、何となく温かさうに見えるのである、そして、軒端には、竹の竿が渡してあつて、それにもう黑くなつて來た串柿が、ずらりとかけならべてある。「まだお芋は燒けないの」と言ふは、今目をさましたばかりといふ樣な幼子の聲。「もうぢきだからね」と、やさしげにいつたのは、母親らしい。これこれして、朝日が向ふの村をかの土藏の上にあらはれて來て、こゝの樣にもあたゝかな光をなげかけたと思ふと、もう白髮の嫗は、ぶんぶんと糸を紡ぎ初めるのである。

○親王塚

加賀 舟岡やま子

加賀から、能登の內浦路を通つて、七尾の方へ出た方は必ずご存じでせう。近く宿丈の翠鬣を仰いて、邑知の碧波を控へた、今までの窮屈な松並木の道がカラリと豁いて、千畝の稻田も一目に見える樣な所に、恰然置き忘られた樣な、杜が見えるでありませう。小田中の親王塚といふのは、これで、塚は崇神天皇の御子大入杵命を葬つてあるのです。

崇神天皇は、かの四道將軍を置かれた帝て、大入杵命も亦、北陸の夷を征服すべく、父君の勅をかしこみ、越の國々へおいてになつたが、不幸にも、こゝて、遂う遂うおかくれ遊ばされました。

これについて、こんな口づたへがあります。

昔は、この親王塚のあたりまて、海てありました。――志雄が海てあつたことは、萬葉集にてゝゐます、小田中は、志雄のすぐそばてす――て、その前まて來てゐる邑知潟も、そのかみは、海てありましたが、だんだん入江になり、湖となつたので、その時、大入杵命樣は、大きな／＼龜にのつて、此邊をお通りになりました。ところが、運わるく、急なおん病づきて、詮方なく、此所におつきになりましたが、間もなくおかくれ遊ばされました。里人等は、厚くおとむらひ申し上げて、その時の龜も一處に、龜は、命樣がおつきの時、一本の松につながれてありましたが、命樣と運命を同じうしたので、塚に埋めました。

命樣の塚の前の小さな丘はその龜塚て、傍の松は、つながれた松てす。松は、最早や、半分枯れて常磐の色も失せかゝつて、をりますが、親王塚は、尙里人のあがむる所となつて今は、宮內省の所轄になつてをります

○農家の生活

靜岡 福井美智子

第一月、あらたまの年たちかへるあしたから、三日間は休業て、若水、神前の供へ物、家內の屠蘇、雜煮がすむと、老若男女の分ちなく、貧富上下のへだてもかまはず、して主人は年始に出かけ、主婦は家に居つて客をもてなす、學校生徒は校長の許へお年玉を持つて行き全生徒校內に揃うて君が代の唱歌を唱へて歸る、常日頃怠惰の少年少女も此三ケ日は日の短かきに驚いて常の一日程も無いやうに思ふ、如何な貧家の少年少女も此三ケ日ばかりはホテぎり喰つて思ふさま遊ぶ。

さて三日が藏開き、四日が初山、五日より農家は仕事をする、六日の夜が年越、七日は休業、十一日田打始め、十五、六日がモチイ、廿日宇頁正月、三十日孝明天皇祭。』此餘は皆仕事をする、父母等は薪を取り、兄弟は參肥擔ぐの外山に入り薪を取り炭を燒く。姉妹は此暇を利用して裁縫の先生へ通うて御稽古。野菜はみづ菜、葱、大根、人參、里芋等。間食としては菓子より外果物を貯へ置き、ほしこのさつまなど子供だましや人寄りの茶うけとす。

○陣取

尾張 犬飼雨園

隣りの家の前に空畑があるが、昨日の雲過、大層賑やかなので、また子供逹が來て何か遊んで居るさうなと思うて、讀みさしの本を措いて出て見ると、十歳ばかりの男の子供等、十數人衣裳からげ跣足になつて東西二軍に分れ、愉快さうに陣取をして、走り廻つて居るのであつた。

見て居るうちに、東軍の方へ眞一文字に逃げて行く一人を、西軍の一人が追つかける。「そら武ちやん、早く走らぬと擒になるよ。はやく陣にお出て。」と東軍のかけ聲。

「おうもう少して……とう／＼逃がしたな。殘念々々。修さん、お前喜一さんと行きな。」と大將の命。おつと承知と、ばら／＼つと敵の陣地に向ふ。彼方はまた逃げ出し、「どうして、こんなべら坊になんか擒になるもんか。」捕手これを聞き、「なんだ、べら坊なんて云やがる。そら修さん、そつちから追ふんだ。」またも向ふは已の陣に逃げ込む。

「おい修さん、どうしてお前さううろ／＼して居るの、今度は信さんかはりに行つてお出て。」と大將らしい者の聲。よしきたと陣を走り出て行

く。

「それ信さんは後にまはつて追ひな。喜一さんそらぼんやりしちやいけないよ、それ今捕まへるの。」と後の方からやかましく云ふ。向ふの方の陣にても口々に、「はやくそつちから廻つて逃げな。」と聲をかける。兩將夢中になつて部下を指揮し、部下は一生懸命に走りまはつて居る様は、なかなか勇ましい。

かくして、暫しの間は勝敗が決せなんだが、遂に東軍は陣を乘取られて、擒を三人まで捕へられた。西軍がこぞつて萬歳を唱へたのは、百雷の一時に轟いたかのやう。

これに引きかへて敗軍はひつそりと聲がない。大將株の一人それへ出てゝ、よし、今度は眞の勝負だから、みんな負けぬ様にせいと注意する。西軍の方もなに負けるもんか、また勝つて見せてやると本陣に歸つて行く。

暫くしてまた、陣取は始まつたのである。

あゝ、この中には未來軍人となつて、國家の干城たるものがあるであらう。兩軍の紙旗は風に翻つて居る。

○黄昏の散歩

遠州　靜枝

今日も例の如く隣家の鈴ちやんの手を引いて散歩にでかけたのである、樫や杉や松などが茂り合つて小暗い徑を通りぬけるとそこには、美しき萩、ゆかしき桔梗、やさしき紫苑、さては刈萱、女郎花の紅、白、紫などが皆それ〴〵、美の神の裳を綾どるかのやうに咲き亂れてゐる、これを見た鈴ちやんは、急に手を振りきつて、「アラ綺麗ネ」とそなたに走つてゆく、

今しも夕暮の空の奇しく、戀しく、聖い色が末廣がりにぼかされて茫……と何だか見てゐる中に氣が恍惚となるやうに靜かに彩つてゐる、冷やかな夕風は絶えずそよ〳〵と花や草をゆるがせて、さて鈴ちやんのリボンのあたりを吹いてゆく、そして何處から來たのか翅の弱つた白い秋の蝶が一羽、花の香りを戀ひてか鈴ちやんの姿を慕つてか、そのあたりを力なげに逍遙つて居る、鈴ちやんはやつぱり無心にその蝶を友として、一々花びらに接吻を與へて行く、アヽ、その無邪氣で愛らしい姿は、丁度天使が紫紅裂ける雲の上に舞ひ戯れつゝあるそれの様、殊にその愛らしい唇から御得意の『夕暮』を唱ふ其聲は、恰も天から聞える美の神の音樂の様、實に鈴ちやんはエンゼル此草花畑はエデンの園ではあるまいかと疑はれる、

やがて幽かに〳〵夢の様に長く引張つた牛の聲がもうと響く、氣が付くと日は全く暮れて夜の神が黄昏の帷をたれようとして居る、あまりおそくなつてはと、鈴ちやんを呼んで歸へらうとした時、フト向ふの一軒家に豆の如き燈火が灯つた、

○秋の夕暮

水戸　山田叫月子

―さすがは三十五萬石、德川氏の城下とて――、常盤岡の、裾をめぐつて、流れて居る小川に沿うて、愛らしい聲で歌ひながら、歸つて來たのは、四郎さんと鶴ちやん。けふは土曜日なので、權現様の森へ、椎の實拾ひにいつて、今その歸りなのである。

「兄さん、またあした行かうね。」

「うむ、今夜風が吹くといゝね、澤山落ちるから。」

折から響き出したのは、御殿山の鐘の音。

「一―ッ……二―ッ……三―ッ……四―ッ……五―ッ……あら兄様、もう五時。」鶴ちやんは眼を圓くした。

四郎さんも驚き顔に、

「うむ、遲くなつたから早く歸らう。」

やがて二人は、板橋を渡つて、細い畔道へ出た。

折しも、さつと吹き來る一陣の夕風は、田の面に黄金の波をうたせて、その名殘が鳴子をたゝいたので、幾百のむら雀、波の中から、飛び上り舞ひ上り、彼方をさして亂れて行く。可愛い眼を上げて、その行方を遠く見送つた鶴ちやん。

「あれ、兄さん、あの雲！」

夕陽に彩られた西の空には、花やかな雲が數片、先を爭うて飛んで行く。二人はウツトリとして、その美觀に見とれる中に、夕陽は刻一刻、その氣高い影を、隱し去らうとして、彩雲はます〳〵うすれゆき、遂にその影も、筑波根越しに落ちて、空は一面に、平凡の色と化してしまつた。

「兄さん早く歸らう、姉さんがないもふかして待つてるつて。」二人はまた急ぎ出した。

あたりは、だん〳〵うす暗くなつて來て、夕霧は、そつち、こつちに、棚引き初めた。

和歌

佐々木信綱先生選

天

◎ 高知市道手筋八十三　春野ゆき子

檜扇にちる花はらふはふり子が
　燈しに榮ゆる大和舞ぎぬ

〔評〕艶麗

地

◎ 大和國北葛郡王寺村　和田芳子

もみぢ葉のこぼるゝ雨に一人濡れぬ
　秋はたそがれ城山のみち

人

◎ 陸中　綾子

うき事の數々小さき胸に秘めて
　小窓によれば芙蓉みだるゝ

秀逸

◎ 茨城　藻の花

藻の花に沈みし戀のあとあはれ
　愁を秘めてさゞれ波よる

いづこかの雜誌にてか見し心地すれど、いかゞあらむ。

◎ 岩代　佐瀬不二子

悲しげに聲もしめりて琵琶法師
　平家を語る秋雨の宿

三句原作「琵琶法師の」とあり。さては調だるみたり。五句「春の宿」は秋雨の方、一首との調和よろし。

◎ 牧場之麓　平山龍子

何となく君が喚ぶらん心地して
　出づれば暮の鐘の音細き

誰やらむの作に見し心地すれど、わかひがおぼえにか、すべて參考に古今の人の歌を讀み味はふはよき事いふまでもなけれど、古今の人の作を故意にかすむるはまことの歌よむ人の行といふべからず。こは此歌一首につきていふにあられど筆のついでに。

◎ 館本　湖畔

思出にたへぬ夕べを野路ゆけば
　裾に冷めたし荻の白つゆ

藤原の大臣の車すぎゆきて
都大路を春の雪ふる　岡山　松本もと子

歳暮　千葉　鎌田壽賀

こしかたのかへりみ多き年の暮
籠の小鳥を放ちても見つ

風さむき冬の夕べを野にひとり
戀しともなう君を想ふかな　茨城　秋山きみ

秘めましゝうたのにほひや御墓べの
すみれの花とさきかいつらむ　下總　雪子

秋かぜに袂をあげてたゞ一人
今日も入日を遠くながむる　下總　小高せい子

梅匂ふ三笠山のふもとあはら屋に
かねうつ槌のおとの冴えたる　京橋　內本ふさ子

鶯のゑをかへやると竹椽に
あをなする日の朝うらゝけき　名古屋　ますみ

亡き兄のかたみの笛の塵をはらひ
夕べさびしく吹きて見しかな　熊本　平岡信子

落穗拾ふ子等は殘らず歸り行きて
靜かなるかな夕餉たく里　豐後　溪の月

夕榮に高き銀杏の神さびて
斜に低うちぎれ雲とぶ　防州　岡部佐保

君も言はず我も語らで別れ行く
磯の松原さよかぜ寒き　磐城　鈴木勝子

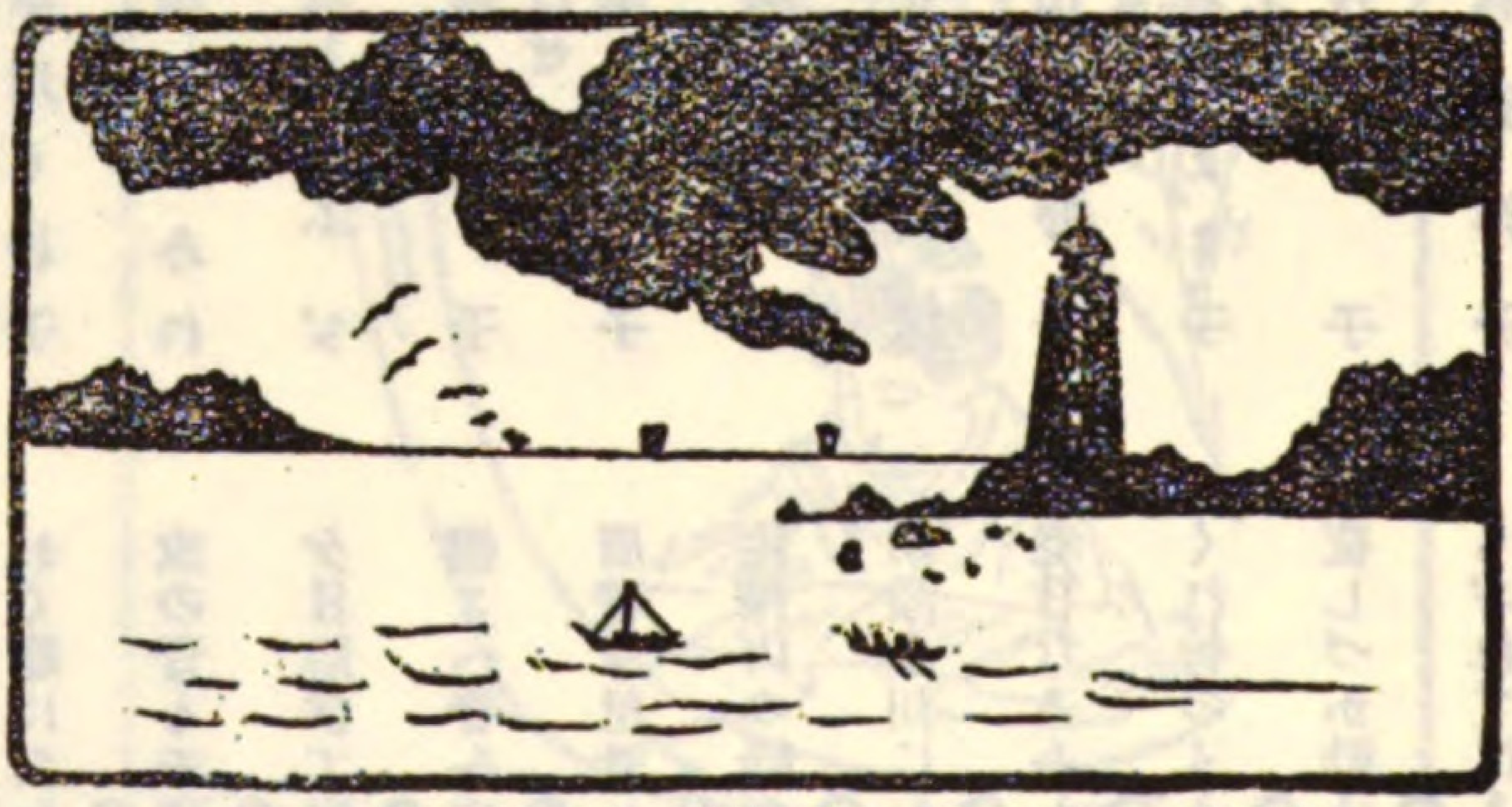
をりをりは何おもひてのほゝゑみや
梅の戸によるうらわかき妻　在都　ゆり子

朝はれの遠き海見る濱やかた
欄をすべりて眞帆片帆ゆく　都にある　うらぶれ人

遠征夫に　博多　渡邊とも子

刈り入れし一穗を文にまきこめて
唐の野にます脊子におくるも

○　　　　　　　　　　奈良　藤田そめ
鶯のねぐらやいづこくれ竹の葉ごしに匂ふ梅のはつ花
夜の梅　　　　　　　　横濱　高田登志
夢よりも淡き朧のよい月夜ほのかに匂ふ庭の白梅
○　　　　　　　　　　　植村をさ子
花の香のふとほのめきて星見えてすみはにきゆる美く
しのかげ
○　　　　　　　　澁谷　一看護婦
いたつきに惱めど語る人もなくひとり淋しき寄宿舍の
中
○　　　　　　　　　甲府　くに子
宵月夜土佐繪に似たる野の小家秀才のひめの歌に興や
る
歳暮　　　　　　　　　澁谷糸子
何ことも思ふまゝなる世なりせはくれゆく年もをしま
しゝの哉
○　　　　　　　　茨城　さつき子
打ちわびて母のみ慕し守る吾をつれなう吹くよ木がら
しの風
○　　　　　　　下總　大崎ふみえ
おばしまに蘭麝かをりて燭もれて琴の音さゆる紅梅の
殿
○　　　　　　　　京都　粟野雪子
稚兒が知らぬ人見て安からぬ面もちするに似たるわが
胸
戰死せし人の母を見て　　　　やす子
譽よと語る心ぞなか〳〵になげくにあまる歎なりける
能登の岬にて　　　　　　やす子
山背く水又清き里にしてさえゆく月にかりかれをきく
自然の美　　　　　　京都　粟野雪子
おのづから心は染みぬ春秋のおのづからなる花に紅葉に



(外選)千葉縣　梶まさ子

○　　　　　　　　　　下野　桂子
淋しさや人も訪ひ來ぬひねもすをたゞ木枯しの柴の戸を打つ
深夜砧　　　　　　栃木縣　高山富士子
夜は更けて月かけ冴ゆる窓のもとにきぬたの音のまれに聞ゆる
○　　　　　　　　　大阪　三宅良子
新潮の潮の香かをる田子の浦にうかぶ八千代の雪の富
士の根
○　　　　　　　　小石川　たま子
やがて花ちりなむものをその深くあくがれ入りしわれ
にもあるかな
淋しき庭　　　　　　　近江　始子
庭守が鼻うたの聲いつか止みて落葉を誘ふ村雨の音
夕雲　　　　　　　　　山口縣　時子
古里の空かあらぬか夕暮になれば立ちまよふ雲のひとむら
古里を思ひて　　　　　尾張　浦子
久かたの雲井遙になかむれば月朧なり古里の空
深夜の山家　　　　　岩代　根本松江
夕べ〳〵耳になれたる松風に夢破られてうらむ夜半か
な
○　　　　　　　　越後　宮島紅百合子
星清き淋の流れに筆洗ひ戀しき君の姿うつしみん
○　　　　　　　　千葉　小川くに子
旅人のあとより暮れてほの〳〵と柳に霞む里の燈火
○　　　　　　　　京都　石田ちほ子
夜あらしの聲に巷は更けて行きて書院の燭の油つきん
とす
○　　　　　　　　石見　三明糸子
亡き人のいたう愛でにし山茶花のことしは花に君の靈こもる
○　　　　　　　　大阪　吉田君子
かれのこる尾花の袖に秋散りて朝風さむし冬や來ぬらむ
○　　　　　　　　群馬　森本芳子

戰ひにめしいとなりし若人の按摩の笛に雪の夜更けぬ　德島 住友登喜子

○

小山田に刈りのこされし稻さびし雨ふりいてゝ雁なくゆふべ　山口 村田みさを

友の許に

雁のつばさをかりて今宵われ君がほとりにゆくよしもかな　名古屋 早川くわ子

田家の夕暮

風寒き夕寂しく灯の影に見ゆる山もとの村　本所 山田すみれ

○

山里は雪きえなくも鶯のなく音に今を春とこそしれ　栃木 落合ふぢ

○

谷川の水の音さへ通ふなり調も高き峰の松風　芝 綠設子

○

君が行く船路の末にかゞやきて夕つゝ見ればわれと思はせ　仙臺 美重子

○

競ひ咲く長者が菊の畠五反見めぐる花に夕日うするゝ　兵庫 林一榮

冬の夜の月

君は今如何に見るらん滿洲のあれ野を照す冬の夜の月　金山の麓 花蓮

○

夕まぐれ舟こぎゆけば墨田川波にくだくる夏の夜の月　芝 山本春子

○

月さえてはらから思ふ秋の夜をすぎ行く雁の聲あはれなり　神戸 右田まさ子

○

むかし我住みにし家のあと荒れて古井のほまり梅の花さく　伊豆 ゆき子

明星

一つ消え二つかくれて明星の殘る一つに吾世さびしき　牛込 林安津子

○

箏ひきて誰にきかせむ歌よみて誰にか見せむ君まさぬ世に　群馬 吉田きみ子

○

嬉しさのなかばみだれて今更に涙ぐまれぬ今宵嫁くわれ　茨城 竹內保子

戰死せし夫を思ひて

いくさ終へてかへる武夫見るにつけ失せにしわが脊またしのばるゝ

親しき友

眞心をかたれば語る友垣の隔てなきこそ嬉しかりけれ　上越 木原安子

秋の夕暮

山寺の鐘もあはれに聞ゆなり片山里の秋の夕暮れ　千葉 梶まさ子

暮秋の菊

おく霜にたわまぬその〻白菊はくれ行く秋のかたみなるらん　四谷 一枝

○

虫の音も千草も枯れて淋しきに黃菊白菊たゞ香に匂ふ　愛知 品子

○

夕日浴びて脊戶の小川に絲洗ふ興作も見ゆる秋日和かな　常陸 川並芙美子

○

櫻さへ春を忘れず笑むものを我身の春はいつか來るらん　芳賀郡の女子

○

眉若き尼君おはす山寺のまひるしづかに牡丹くづるゝ　常陸 白韻女史

秋の川

佐保山の峰のなこりの色のせて流るゝ水の行へをそ思ふ　本所 山田すみれ

○

山添の川にむかへる賤がやの軒端に咲ける紅槿の花　上毛 新井すみれ子

○

春日なるみかさの山の花すゝきむかしを今にまねきけるかな　京都 香螢

○

くれ竹のうき世といへとなりくくはうれしとおもふふしもありけり　千葉 高橋幸枝

○

夜しづか勤めは終へぬいざ暫し疎朶折りくべて文よまんかな　肥前 松永貴美子

○

ちぎれてはまたつゞきゆく夕雲に思はそはて今日また暮れぬ　周防 中村照子

○

病癒えし母を助けて樂しくも今日三年ぶり嵯峨の花見る　伊勢 菫子

○

なやみある胸をいだきておばしまにとぶ雁金のゆくへ見送る　筑後 近藤はる子

錦江灣の夕景　鹿兒島 福留たつ子

夕ばえに波しづかなる錦江の海にかげそう櫻島山

○　福岡　横田あや子

草刈の刈りのこしけむ萩の花一もと淸し湯の宿の道

○　東京　西野紳絃子

人こゑも絕えし川そひ黃昏れて虫の音ほそく秋の雨ふる

○　茨城　秋山隆

はら／＼と桐の葉落る音のしてかりがれ悲し秋暮るゝ夜半

○　尾張　犬飼雨園

分れ來し里は狹霧につゝまれぬ峠三里の雨の夕暮

○　山梨　白合子

落葉かく子等の一むれ歸り行きて松原つゞき只秋の風

○　千葉　小金ちよ

破れたるを琴抱きて夕雲を野べに眺むるうらぶれの人

○　信濃　とき子

君まさぬ世の花などて眺むべきとく散りて行け君ゐます國

○　陸奥　三宅嶺子

三とせ越し友を漁村におとつれて思出おほき磯の月見る

新年　茨城　中西芳子

梅咲くも見る人もなきわら家さへ自からなる春は來にけり

○　周防　おぼろ

なにとなく思ひておほき今宵鼓遠音にきこゆふくろふのこゑ

○　遠江　伊藤ゆわ子

野も山も木葉殘らず散はてゝ風に聲ある頃となりけり

少女羽子板を抱きて眠れるかた　徳島　春野いつみ



（選外）横濱　玉章女

羽子板をいたきてねむる少女子はたのしき春の夢や見るらむ

○　神戸　鈴木まさ

やむ母のかたさすりつゝ語り合ふまどにちりくる白桃の花

○　神戸　春雨

ゆふげたくけむりと見えて霧くらく墨繪ににたり山本の里

○　伊豆　内田鐵子

駒とめて御歌使が案内乞ふ柴の戸かすむ白梅月夜

○　遠江　伊藤蝶子

來む年は斯くも悔ひじと去年の今日の契重ぬる年の暮かな

○　南總　小川くに子女

筏師のすがたおぼろにかきくれて春雨けぶる淀の川面

○　津市　松尾花子

磯館やかたのうへに月細う波の音近く千鳥鳴くなり

○　神奈川　中村美枝子

この思ひ此苦しみをいつ君に分ちてともに泣く日のあらん

○　茨城　筒井せつ

仇うちてかへらす父をまつ夜半の夢おどろかす木枯の風

待花　大阪　鈴木せき子

梢のみ打まもられて櫻花咲かぬ木蔭に立たぬ日もなし

○　もみぢ子

武士がたかきいさをゝ家づとにかへりきませる今日の目出度さ

○　靜岡　桑原靜子

山松の梢の風は吹きたえて月すむよはに鹿のなくなり

うくひす　山城　山本かや子

いかにせむなぬれて来なくうくひすにかすべき梅のはな笠もなし

○　信州　岩間花子

柴刈りの少女がともの打むれて里川渉る霜白き朝

○　大阪　松本須磨子

なりなりは鹿を友なる山窓に都のてぶり聞くよしもがな

○　和歌山　保田愛子

まちわびし人はきたらず日はくれてみそらのほしのまたゝきしげき

丹波　柳原ゑつ子

新年

新玉の年のはじめのうれしさは昔も今もかはらざりけり

○　伊勢　きみ子

いとどしく過ぎにし方の戀しさにまたくりかへす巻物かな

○　山形　佐藤欧枝

月になき花にうらみてあぢきなく十とせの月日はやゆきにけり

○　島根　倉橋かほる

朝顔は露のひぬまにうなたれてわかおこたりをとかめぬるかな

○　岐阜　紫雲女

池の面をさやかに照らす月かげの曇ると見しは落葉なりけり

上毛　河内ちよ子

姪の誕生に

行末は家の柱となりぬべき庭の若松たのもしき哉

神戸　木田しげ子

新年琴

手なれこし琴のしらべも新玉の年のはじめはめつらしきかな

○　上総　亘子

朝ぼらけ霞こめたる山のべに聲ものどけく鶯のなく

○　上總　紅顔女史

白衣の人雨に過ぎゆく不破の關實寂として山椿ちる

○　三重　森島榮子

その上の勲功傳へし鎧櫃輪飾榮えて白梅薫る

○　備中　稲本千惠子

天地に平和の光かゞやきて凱歌の聲のいさましきかな

○　下野　秋元靡子

いつはりの多き浮世に嬉しきは鏡にうつる清き心ぞ

○　上總　小百合子

難波江や枯葦そよぐ月の夜を千鳥きくかな苫舟にして

○　群馬　萩原かな子

むれの恩ひ誰れに語らんよしもなく獨りわびなくうす月夜かな

○　能登　杉下花靈子

ほろほろとちる山茶花に秋ふけて靈靜かなり山寺の庭

○　北信　櫻井みさを

身ひとつをなぐさめかれし我なれどなほ行く秋のをしまるゝ哉

○　三重　奥瀬かすみ子

奥殿の御簾おろされて白菊や黄菊に細し夕暮の雨

○　周防　小澤ちえ子

三年なれし唐の曠野を後にして故郷へ歸る火船の上

○　新潟　北井ふじ子

亡き君が植ゑし芙蓉の紅あせて小庭さびしく小雨そぼふる

○　徳島　仁木春子

夕はえはうすれて消えぬ鐘の音にけふの休息を宣りしらせつゝ

徳島　仁木春子

紅葉がり

紅葉がりしるしはかりをかさしつゝならひてかへる野邊の細道

○　石狩　久保たけ子

ふる里に病みます母やいかならむ寒さ身にしむこの霜の夜な

水戸　好林女史

若水

くみあぐるかとの古井のわか水にこそのなごりの月ぞうつれる

○　下野　大木しづ子

力なき秋の夕日に照されて梱れりゆく山陰のみち

○　下野　前澤きく子

戸に倚りて雲の行方を眺めやる人うら若し秋の夕暮

○　下野　大木靜子

又しても雲の行方の偲ばれて仰ぐみ空を星一つとぶ

神戸　上田輝子

秋山里

杣人のゆきゝもたえて村雨にさびしく暮るゝ秋の山里

○　舟橋町　紅女

霜白き屋根のほとりにたちのほる朝の煙りの紫匂ふ

元旦　鳥羽　佐藤法枝

ゆたかなる御世にしあれば松が枝のみどりに添ふる千代の色哉

凱旋　滋賀　白百合女

勝ちときをあけてかへると見し夢のまことゝなりしけふそうれしき

○　新潟　小島白百合

湯の宿にひとり日記書く雨の宵瓶の小百合の花はこぼれぬ

○　紀伊　倉一地とよゑ

苔むせる墓はすゝきにうづもれて月ものすごきあれ寺の庭

山寺の鐘　紀伊　山本君子

母病むとおとづれありし夕ぐれのむねにそひゞく山てらの鐘

○　東京　長谷川花子

さなきだに秋はうれひの多かるを雨ふりしきる野の一つ家

○　名古屋　原田こと

ふるさとの母にあひぬと見しはゆめさめてはかなき旅まくらかな

○　飛彈　荒垣千代子

君在すと思へば嬉し峨蠟の奥とざせる霧はよし深くとも

○　飛彈　松野みどり子

いづくにかたどりゆくらむ雁がれの月の鏡に影うつしつゝ

○　飛彈　後藤八重子

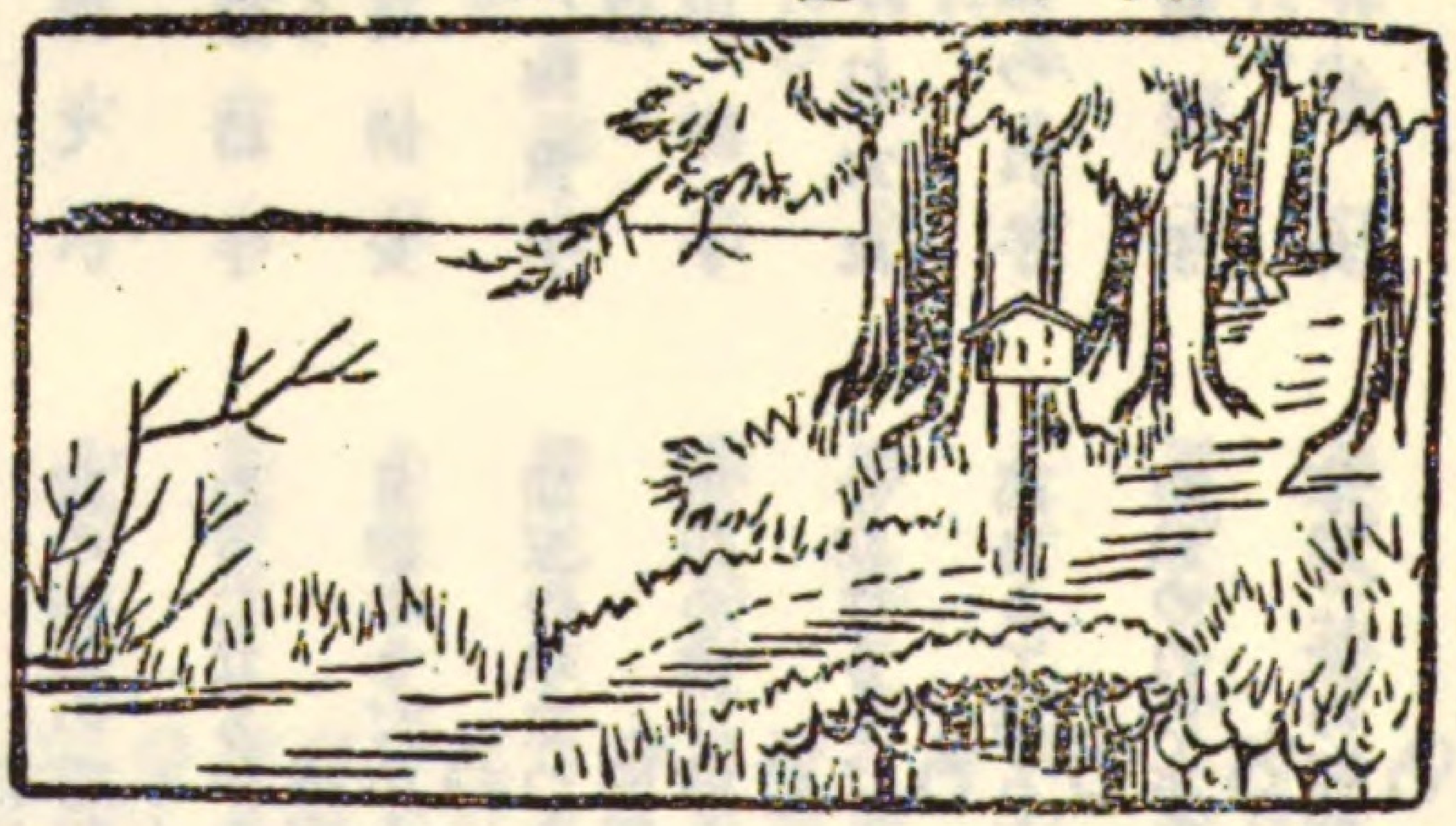
戀しさに君がうつしゑ出し見る夕べさむしく雁なき渡る

○　新がた　大サキ

木枯は山をめぐりて野をこえてこゝにうれひの子らが髪ふく

○　岩手　森毛利子

（選外）　芝綠子



はら／＼と木の葉こぼるゝ音のしてひろもさびしき山里の秋

○　越後　小林かう子

何となくたゞ何となくものがなしほつれげなづる指もほそりて

○　群馬　關口翠子

何となくうせにし友の偲ばれてそと窓をせば梅の香ゆらぐ

冬月　淺草　大沼菊江

こがらしのふきしづまりし松ヶ枝にやどるも淋し冬の夜の月

梅　大阪　永田かすみ子

功立てゝかへります君を待ちがほに宿の白梅咲きそめにけり

○　上毛　關口むめ子

ながらへてかへりましたる兄君の勳きくなり朧夜の宵

○　和歌山　奈加谷とも子

折々は落つる木の葉の音立てゝ板戸にさわぐ木枯の風

秋の夕べ　下野　早苗女史

睦び合ひし友と別れてこの夕べもの思ふ窓に秋の雨降る

埋火　下野　かほる

かたりあふ言の葉ごとに花咲きてあたり春めく埋火のもと

菊　兵庫　紫香女史

霜になやむ淺ましの樣見せじとや垣をよすがに立つましら菊

○　新潟　野ばら子

うなだれて山下りくる愁子が破れし衣に夕日冷き

○　京都　松田ひて子

君が行く船見送りて歸るさの入江の葦に夕日うするゝ

天長節　丹後　竹村こま子

日の御旗高くかゝげて大君のあれましゝ日を祝ふ今日かな

○　大阪　嶋田ひろ子

露ながら君に捧げんよしもかな月に照れる庭の白菊　羽前　東雲女子

○

馬子唄の遠く消え行く芒原霧波なりなり笠の影見ゆ　豊後　平山瓦子女史

○

何となく思ひみだるゝ夕窓に野寺の鐘を徐にきく　大分　野田まき子

○

濵寺の鐘のひゞきも身にしみてむかしにかよふ須磨の浦風　千葉　金澤てい

我が宿

きり〳〵す軒端に鳴ずなりしより夕淋しき我が宿の秋　千葉　森靜緒子

○

はなの上のむらさきの露きらめきて夕日眩ゆし眞野の萩はら　千葉　小高淸女

○

梅折て瓶にさしたるその夕べ夢に詩神のすがたをぞ見し　姫路　船戸幽貴子

○

撞き終へし鐘のひびきに紅葉ちりてさびしく暮るゝ山寺の庭　千葉　高山靜子

山家

君が世はみ山の奥に住む人も都のたより聞かぬ日ぞなき　福岡　すみれ女史

○

さなきだに淋びしく思ふ秋の夜に哀れをそゆる玉水の音　常陸　酒葉つれ子

○

初春の薫り床しく庭の面にほゝ笑みそめぬ白梅の花　播磨　富原愛子

山寺鶯

山寺の齋院に近く聞ゆなりまだうらわかき鶯の聲　松山　師走女

天長節に菊を見て

千よ八千代變らぬ色の白菊も今日を盛りと咲くぞうれしき　愛知　北脇苔花

○

刈はてし門田のくぬ水色づきて鴫かれ寒く秋そ暮ゆく　信濃　安孫子美女

友のみ墓の前にて

青苔に十九の夢をこもらせて眠り給ふか奥都城ところ　茨城　滑川登免子

○

國細く蘆の花やせし湖の彼方の岸に小舟たゆたふ

澁谷分院　牧　澁

菊

尾花枯れふるかや老ゆる昨日けふきみのみさをの獨りかくはしき　澁谷病院　牧　澁

墓に詣でゝ

亡き人をしのひてぬらす袖のへにほそ〳〵と散るさゝんかの花　鎌倉　苅谷しづ子

○

欄干によりてながめん梅の花匂ふ袂に月をやどして　神戸　勝田かつ子

待春

雪の朝炭の香匂ふ小座敷の障子にうつる紅梅の枝　月形　小町女史

しんねんの梅

あらたなる年の初風おとづれて一とせ老ひぬ我が宿の梅　盛岡　江刺家つや

寒夜月

月影のまだ消えやらぬさむ空に鳴く音あはれ水のとりのなく　佐世保　江口しけ

○

新玉の年立つ今日は何となく常見る河もすみまさりつゝ　常陸　酒葉貞子

園部河畔に立ちて

園知の流れ靜かに風わたり花藻みだれて魚一つとぶ　鶴來　舟岡やま子

○

今朝はきしはゝきの跡の見えぬまで落葉つもりぬまひろ庭の面　靜岡　桂影子

○

馬曳きて歸る夕べの月淡く香り床しき野路の梅哉　千葉　白萩子

○

かれのれに木の葉のちりゆくやまざとのゆふべはわれてさびしかりけり　美濃　山田萩子

○

草庵に歌の翳師の興なくて雛罷く夕べ山茶花の散る　山城　葉童子

○

その儘を響さまほしゝ手折なば月やこぼれん白菊のはな　大和　榮山利子

○

千草枯れてながめ淋びしき枯野原吹く風寒く虫の音細き　埼玉　吉羽よれ子

樵夫落葉

道もせにしきと敷けるもみぢをいかできこりはふみて行くらむ　新潟　大崎秋子

○

春雨に書を枕の夢さめて小まどの梅の露きゝぬ　新潟　大崎きくの
○
あたゝかき君が情の玉章を薄き灯にみる旅のやどかな　筑波　彌吉ふみを
○
末の子が父を戀ひなく夕月夜秋風白う花輪くづれぬ　筑波　彌吉ふみを
○
尼寺の鐘の音ゆるう森越えて寂寞をつげぬ廣き天地に　千葉　小林壽江
○
旅ひとのころものそてもこほるらんおく霜白き武さし野のはら　横濱　山崎繁子
○
荒磯の松をはなれし大鷲の行くへにうすき有明の月　横濱　木村泉舟女
○
あさほらけたらさき匂ふ中そらに脊なほさむき雪の富士のね　横濱　落花一片
○
篝火焚いてわれをいたはる人妻のなさけ身にしむ冬のよのたび　失名

凱旋
四東わきまへかれし幼子も口まめしげに唱ふ萬歳　三河　櫻井月溪女
○
めしませと炭うる少女聲かれてやれしたもとに雪降りかゝる　遠州　靜枝
○
蟲の音も細り〳〵て行秋も名殘すくなくなりにけるかな　和泉　紅梅女史
○
武夫がふく蘆笛の音も低う月に露營の想さひしき　和泉　蝶雨女史

初雪
髪断ちてひとり住む身の何となく思ひみだるゝ秋の夜の雨　宮城　笠原龜代
○
ちりしける紅葉の上に白妙の色かされたり庭の初雪　名古屋　世幾子
○
きれの音雨にしめりて風寒きわら家のあたり百舌高うなく　備後　佐々木定子
○
山守の鐘のひゞきの誘ひ來るつれなき風に散る木の葉哉　岐阜　田中悦子

雪
けさ見れは常盤の色も分かぬまで高嶺の松につもるしらゆき　千葉　木内春子
○
ゆめのまに年の半は流れゆきて秋たつ風の音ぞ身にしむ　土佐　秋月慶江子
○
よき國に好き時を得て生れ來し我幸あれや日本をみな子　高知　竹村朝露
○
墨染の衣まとひて池の辺に月を眺むる尼うら若き　横濱　山崎郁代子

山路梅
黄昏れて小鳥の聲もうちたえし山路靜けき梅の一本　武州　雅子
○
にはとりの足あとみえてぬかるみの背戸のほし栗に夕日さすなり　水戸　松島由利子

梅
吹く風はまだ寒むけれど我か庭にかをりてゆかし梅の初花　長野　小林稲枝子

野菊
墓の辺の一本野菊いとやせて咲き出てし花のあはれなりけり　大阪　武藤とし子
○
朝なぎにのほる日あしのうら〳〵となみに輝くかけぞさやけき　横濱　風葉女史

荒野月
あれはてし野へにふけゆく月見ては人まだすまぬ世をおもふかな　神奈川　村田所加登

初雪
見渡せば今朝ま白なり夜の間につもりにけらし年の初雪　羽後　鈴木しゅん
○
むねにあまるおもひを筆にはしらせてかくとも人にしらせてしがな　兵庫　林かずゑ
○
庭になりて一人たゝずむ少女子の袂をかろく春風のふく　播磨　久子

枯野
折々はきつれのこゑも聞えつゝ尾花の野辺の月影寒き　岐阜　臼井しげ子
○
木枯の夕荒らに吹きしきり星かげ寒き磯の一つ家　美濃　礒井邦子
○
霧ふかきみ寺の法のともし火の光り崇高き靈あるがごと

文學士　沼波瓊音先生選

抒情文

天

○小夜嵐

下野小山町初鳥谷　新井琴子

水藥飲み給ひてあと一しきり激しき咳も止りて、父君はすや〳〵と眠り給ひぬ。

この間にさいつ日より始めし水澤の花子樣の振袖を、明後日までの約束なれば、取りかゝりて明日までには仕上げんと、灯火かきたてゝ針の運びに餘念なく、しばしは過ぎ越し方の聯想にふけるなりけり。外は風の吹き出でしが、雨戸打つ音もの凄く、しみ渡る寒さに手さき動かず、今は襟絎けるばかりとなりしまゝ一つに置きて見れば、薄紫の縮染に鶴龜松竹梅の縫出したる振袖、目も綾なりや。かくて又前の聯想は繰り返さるゝなりけり。花子樣は實に幸多き人なるよ、我身も五年の昔は花子樣とひとしき境遇なりしを、あはれ人の運命程計り知られぬものはあらず。今の我身を見れば明暮共にこの古布子一枚に細帶一つ、人の見る眼も耻しや。父君が相塲と云へるに手を出し給ひてより、買へは下り、賣れば上り、村一と云はれし我家の資産も忽ち傾きたるさへあるを、天はまだ我家を惡ませ給ひしか、祝融の災にかゝり、家財を擧げて烏有に歸し、あはれ今の假住居。

それを苦に病みて父君は三年前より病の床につき給ひしが、肺の病は不治と聞くからになさけなく、其上涙の種となれるは、母君の心得違ひ、我にこそ繼々しき中なれ、父君いとしとは覺さぬにや、父君の藥の代にとて我身の衣服調度など賣りし金まで持ち去り給ひし情なさ。我身一つに三年の間、いかに骨を惜まずとて、二人の糊口、藥の代のいかで裕なるべき。悲し口惜しの思は小さき胸をかき亂して、振袖見ればこれさへ思の種なり。我も幸あらばかゝる境遇にあらんものを、今は友の晴衣縫うて其日の煙立つるかと思へば、いとど堪へかねて泣かじとすれどせき來る涙、振袖に一雫散れば目出度き品に不吉の涙、許し給へと心の中。

嵐は雪をさそひてか又一しきり强ら吹き來て肌寒く。油の盡きんとせる灯火は消えみ消えずみ、淋しの夜半を守れり。あはれかくまで涙もろき我にはあらざりしを。

忽ちはげしき咳の聲苦げなるに走せよれば、こは如何に、今日洗ひしばかりの枕の上蔽ひの白きに、時なら

ぬ紅梅の花點々

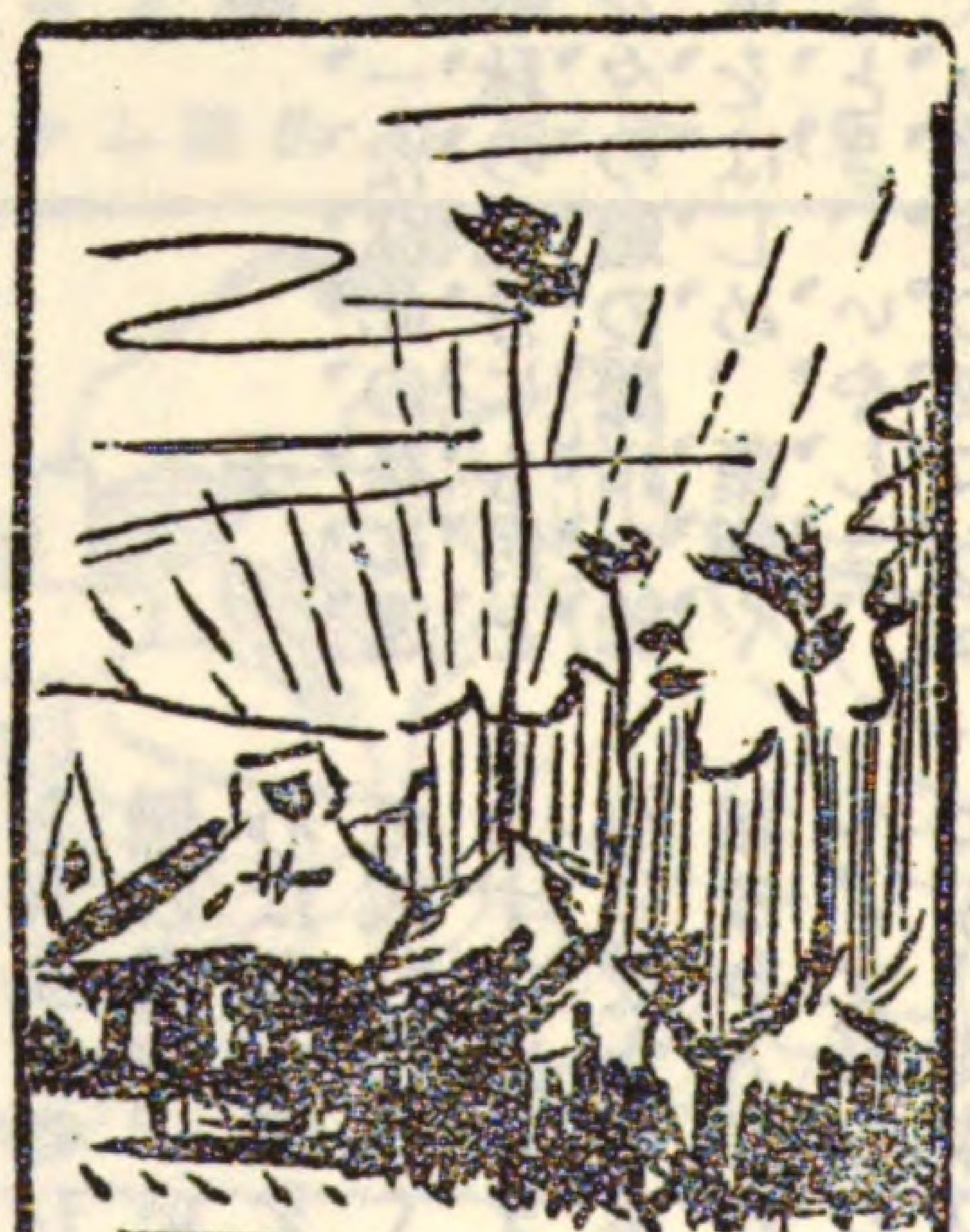
（評）一字一涙。再讀に堪へず。

地 ○くり言

藤枝 若菜女

「旦那がなくても身だしなみですもの、少しは化粧して入らつしやい、と伯母樣は仰しやるけれど、私どうしてそんな暢氣らしい、おしまひなどする氣になりませう、紅白粉に浮身をやつして、嬋妍なとか意氣なとかいはれて、嬉しかつたは、昔の事で御座います、浮世と共にきつて捨てた黒髪に、何の不必要な、るりかつらだの香油だのと、必らず構つて下さいますな、この髮を切るに付ても、伯母樣は「十九歳や二十歳で一生寡婦をたて通さうなど〻は若氣の一徹、とても六ヶ敷ことです、それよりか幸ひ欲しいと言つて下さる彼の方の處へ再縁なさい、武夫さんだとてもお前が襤褸を下げて、抹香いぢりして居るよりも、然るべく身を堅めて、安樂に暮した方が、いくら喜ぶか知れません、さうなさい〳〵」と、繰返しお勸め下されたけれど、私まあ如何してあのお年寄られたお姑樣を捨て〻、よそへなど行かれませう、伯母樣は私をそんな情の薄い女と思し召すか、憚ながら私がそんな女だつたら、恐らく武夫はあれ程迄、立派な最後は遂げなかつたかも知れませぬ、忘もしない去年の夏、御出征の時、私の手をぢつと握りしめて、「園さん、それぢや母上の事は確りたのみましたぞ、どうか僕に成替つて老先短い母上に充分に盡して下さい、僕は、園さんを信じて、唯一人の母上を殘して、潔く死にます」と仰しやつたお言葉が、お顏が、歷然と殘つて、片時わすれる隙もない、それを、そのお言葉を無にして、私、よそへなど嫁つてよいものですか私は斷じてお言葉に從ひませぬ、どの樣に仰しやつても、お情で御座います、伯母樣、どうか此儘置いて下さい

（選外）姫路 萬代恒子



ませ、たとへ饑ゑて死ぬとも、二度と夫を持たうとは思ひませぬ、恩知らずとも何ともお惡しみ、幾重にも受けまする、どうか此まゝ武夫の妻で終らして下さいまし。

（評）貞女の俤、眼前に髣髴として、覺えず暗涙滂沱たり。

㊇ ○戀の辭

遠江國　蝶子

戀こそあやしきものにはありけれ。一たび此の路に迷ひては容易にさとることかたく、春秋の花月にも何となう此事のみおもひ出され、あした夕の鐘の聲にも餘所ならぬ哀を催す。九重の雲井の人をはじめ、藻鹽くむ海人、草刈る賤に至るまで、たふとき、いやしき、かしこき、おろかなるわかちなく、みな戀の奴にあらざるものやはある。

戀や、夕をまたぬ朝がほの如く、朝をしらぬ夕露の如し。戀せる今を迷なりとし見れば悟れるむかしは何をたのしみてすごしゝか知らず。悟れる今を戀とし思へばむかしの迷ひほどたのしきものはあらじかし。むかしの人もこれがために生れ、これがために泣き、これがために死せり。今の人もこれがために生れ、これがために泣き、これがために死なんとす。來んものもまた同じかるべし。

鳥部山の烟たゆるときなく、飛鳥川の淵瀬かはらぬことなし。まゝならぬ此の世のためしにもるゝ身ともおもはねど、死期の定めなきをも忘れ、一目見て千秋のちぎりをこむるはかなさ。いかなればかくもくすしき戀の道や。いかなればかくもあやしき戀の路や。人の心は我が誠をもて知るべきにあらず。我いかに誠をもて彼れにつくすも、松に通ふ木枯とき、ながさんもしらず。あやまてり、あやまてり。垣根の花は折る人の心にまかせ、道のべの柳は吹く風の心のまゝなる世に、誠なき人をたのみて我が誠をつくしゝ耻しさよと、思へどまだその思ひのつきぬまに、あら波さわぐ大海原にも、眞珠の光あり。草木生ひしげる深山にも、黄金の玉あり。彼も人なり。いかで誠のなからでやは。外には見えねど鳴く蟬よりもなかぬ螢の身をこがすためしさへあれば、誠なしと思ひしは我が心のひがみにやなど、思はじと思へばまたさらに、深き思ひにしづむ愚さよ。實に戀は惡魔なりけり。何を思ひ、何をたのしみて、かくもくるしき戀路を行きつもどりつするぞ。

さはれ、物の哀れをしるは戀路をたどるにしかじ。戀の味をしりたるものいかでか他のたのしみをたのしみとせらるべき。あはれ、水鳥の砂にとゞむる足の跡の如く、夜あけの汐に消えてはかなきは戀路なりけり。夢とうつゝの境にある戀、何れを始とし、何れを終とやせん。何處よりこの惡魔の來り、何處をさしてこの惡魔の去るか。人の心は見ること能はざれば、知ることかたし。まことや戀こそあやしきものにはありけれ。

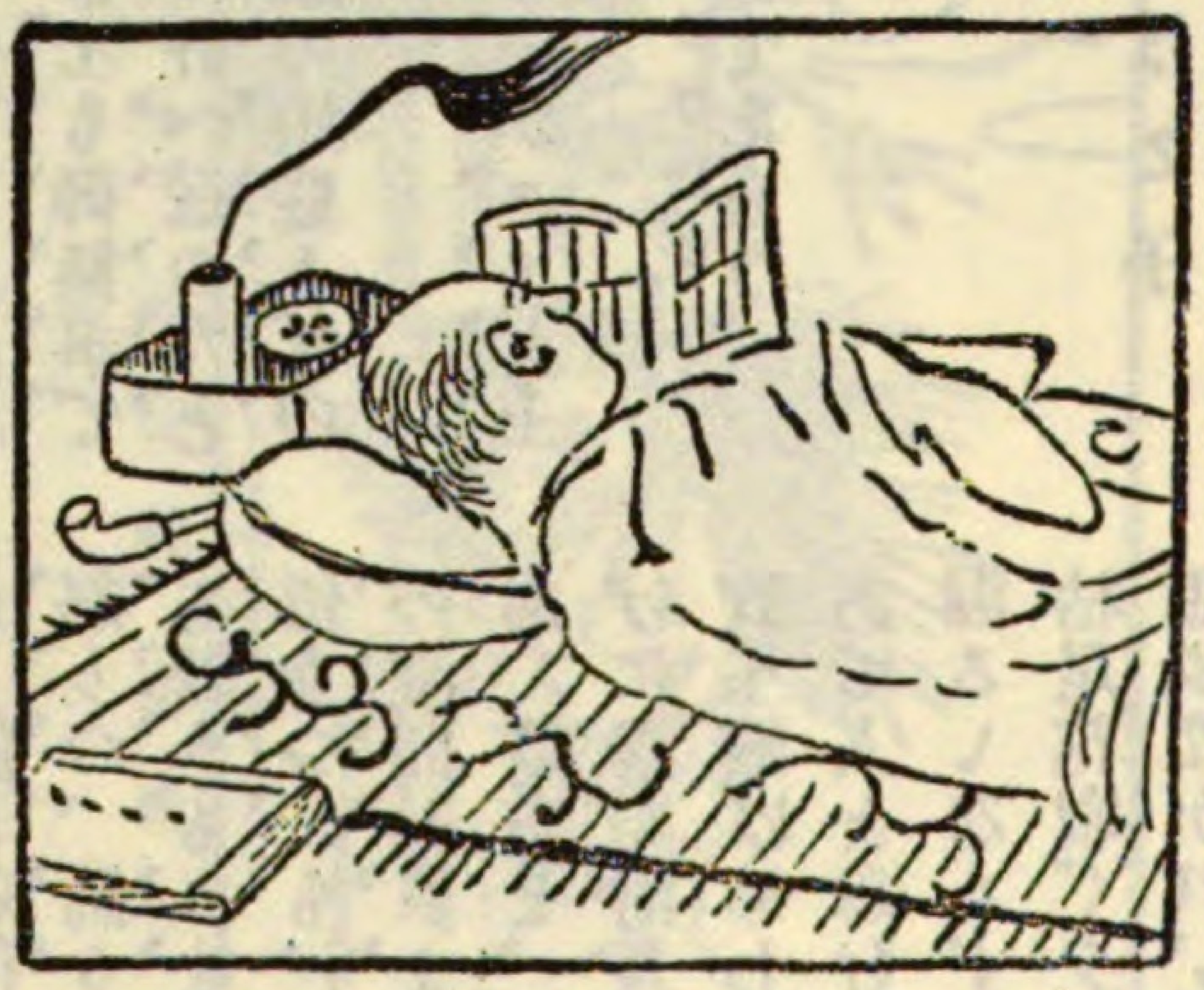
（選外）　千葉縣　秋葉ふみ子

（評）古往今來、戀のうま酒に醉うて、燃ゆる胸の炎に、われと我が身を燒きしもの抑も幾人ぞ。此の怪しき戀にとらへられて、迷へるが如く、悟れるが如く、獨、若き血汐を漲らせつゝ煩悶せる狀、よく描き出されたり。「戀せる今を迷なりとし見れば」云々の一節、樗牛氏の文に學びたるか。

秀逸

○はだし詣

松山市三番町九三武智内　山脇幸子



時雨を含んだ寒い〳〵雲は南の山から北へ流れて、まだ明けきらぬ山家の村の、森も眠り神も夢み給ふらん氏神の石段を、露に濕れる裳裾甲斐〳〵しう、落葉ふみ分けて下り來る跣の女、其涼しい目にも優しい口にも愁の色は現れて、悲しう痩せた其頰は神の惠みを乞ふが樣、石段を下りて立止まつたまゝ、暫時思案にくれて居たが、さしうつむいて足早に彼方へと進み行く。

ア、あれは此の森はづれの靜さんだ、誠にお可愛さうに……、靜さんの夫は今捕虜となつて露國に幽囚されて居るが、夫が出征してから二年近くもなるのに只の一日も御參詣を缺いた事はない。

貧しい上に此間からはお母さんが又御病氣との事、靜さんの御心配はどの位であらう、朝は暗い内に御參詣をすませて、お母樣にお粥をすゝめ、すぐ薪採りに行くのだが、十一時少し過ぎる頃には屹度歸つて來る、そしてお母さんの看護をして置いて市へ賣りに行く、歸りにはお藥やお母さんの好きなお肴を澤山に買うて來てす

すめる、其やさしい事ッたら。夜は裁縫や紡績をして碌々寐た事はない。

「ゆふべは二時に鋏の音をきゝました、一昨夜は一番雞の鳴くまで續ぎの音をきゝました」とは隣のお婆さんの話、

聞けば此間は九圓と云ふ大金へ、お母さんも御無事で居らつしやりますとの手紙を添へて夫の許へ送つたとの事……、思へば私と同じ年今年廿一歲の娘盛りだのに…………。

靜さんの影は早見えぬ、家からは朝餉の煙がスーと上つて居る。

アヽ神樣は靜さんの願を何と聞召されたてあらう。

（評）同情に富める筆致、愛すべし。

○あゝ小牛よ

岩代大沼郡東尾岐村字新町　佐瀨ほこ子

うららかなる春の日影を浴び、たかき若草の香に醉ひて、夢まどかなる、汝れ小牛よ。

女神が御衣か、うす紫の霞棚引くあした、花美しく鳥の歌長閑なる春の野に、牧童がすさぶ草笛にこゝろ澄まし、蹲きしむくら、身動きもせて、靜かに低う、心の奥より誦するは神の美をや歌ふ。

淺間しきは人の子の、濁れる水漲るうつし世に、露にも似たらむ果敢なき命、たゞ長かれと祈るのみか、窮りなき宇宙にある山や川や、田や畑や、恣まゝに私有し、僞りの位、僞りの富を希うて、泣きつ、叫びつ、怒りつ、罵りつ、かくてとこしへ、修羅の巷に、老いも若きもさまようて、春秋玆に幾千とせ、罪の憎さを悟りつゝも、尙ほ犯して耻づることなき、彼等が心裡の淺間しさよ。

あゝさるを、爾はまだ世に罪てふものゝ味を知らず、げに崇く淸き心よ。

寶玉鏤ばめし欄干に倚りて、靜かに春の譜を歌ふを、あて人と尊む勿れ、そは美食に飽きし僞りの口より、漏るゝならずや。

枯尾花戰ぐ夕ぐれの野に立ちて、逝く秋吊ふを詩人と思ふなかれ、そは衣薄からぬ人の僞りの詩にあらずや。

あゝさるにまことなる汝れが心や。

春の情燃ゆる血に動きて、僞りの少女、夜もすがら戀に泣くを、人は優さしと云ふも、汝の潔き心に神の許されし夫を戀ふを、人は醜しと冷笑ふ。

幸なるは爾よ、人の世の罵は顧りみるに足らず、情あ

つき新夫に、心ゆくばかり契りて、少しも羞づるな、僞の愛もて蝶と比べ、僞の情もて鴛鴦にたとふ人の子に什麼に優るよ。吐く息白うして、風冷めたき朝、曉の榮えある彩雲を見よと、諸鳥の告ぐるに、胸の乳房に溢るゝ計りの乳汁を、そのまな兒に與へんとするとき、あな口惜しき、財貨の爲めになさけ奪はれし牧守の、羅刹の如くたけりて、身痛き迄乳汁を絞り取れど、爾の心優しくして苦痛を忍ぶいじらしさ。さはれ何も知らぬ兒牛が、餓になやめる嗁聲を聞かば、汝の胸の悲しさや、あはれ奈何に。



（選外）宮城縣　梅操女史

月の經ち日の經ちて、汝が子また乳を求めず、乳房漸く固からむ時こそ、爾は屠らるゝなれ。猫の乳、人を養ふか。鶯の肉、人の身を肥すか。爾は現世に人を我が兒に更へて養ひ、死しては肉もてなほやしなふ、人は相食むを悩む、されど生けるものを殺して少しも怪しとせず。見よ、聖き神の敎に、たづさはる牧師は、爾が肉に舌皷打つにあらずや。さはれ汝よ、穢れ多き人の世を露ならうみそ、愛溫き自然の神は、菫匂ふ天の御園生に、かをりたかき床を延べて、汝を待たむ程に、幸薄しとて、つゆ、嘆くな。

（評）小牛を假り來つて、僞善の世を罵れる、痛快。

○野菊

但馬　小西八百子

我は谷間の一本菊なり、父なく母なく、訪ひくる友もなく、只々一人淋しき世を送りぬ。風の便りに聞けば、世には我友も數多く有りとか、されどそは山坂遠き人里とやらいふ賑はしき所なりとか、されば交結ぶよすがもなく、人里に出づるつても得ねば、むなしく明し暮すうち、はげしき木枯は幾度か我身をおそはんとし、つよき霜はしば〳〵我をそこなはんとしぬ、されど此はげしき風にも、強き霜にも打勝ち、天

輿のまゝ匂ひ高き白菊の世の塵にもしまで生立ちき、あはれまたも吹出し木枯は、荒れに荒れていつ止むべくも覺えず、昨日までは美しき衣つけてほこりませし楓葉も、今日はむなしく落葉と成りたまひぬ、あはれ明日をも待たぬ己が身、日頃ほこりし此匂ひも、世の人には知られて果敢なく朽ぬべきか、春より幾度かの雨露を凌ぎ咲出しをと、そゞろ悲しくはかなき我をかこちて有りしに、今日ゆくりなくも訪ひたまひし詩人、目ざとくも我を見て、あな淸き花やと、優しうもつみとりたまひぬ、友の幸を羨みし身は、やさしき詩人の文机の友となりて樂しく散りぬべき日をまつのみ。

（評）擬人法を以て霜に傲れる菊の樣を寫し出したる淸新の筆、亦菊の如し。

○田園生活

千葉縣君津郡波岡村畑澤　田村瀧子

鳴呼世の所謂田園生活、それが何で樂しいでせう、それは身分も有り、財産も地位もあつてさうして田舍に住んでこそ、樂しくも嬉しくもありませう、霞靉靆き若草萠ゆる春の色、七草咲亂れ、紅葉染なす秋の野山の景色は、成程田舍に限るでせうが、妾等下流の農家の生活の狀態、何で悠々と風景に親しみ、詩歌を賦して天然を樂しむ暇がありませう、朝に田に耕し、夕に畑に耘り、春夏秋冬二六時中、農家の勤の忙はしさ、霰たばしる寒い寒い冬の日も、金を溶かす樣な夏の暑さも、終日手織木綿に手拭冠り、流るゝ汗拭ひもあへず、手足は荒れて皹だらけ、手には鋤鍬、背には籠、離す間も無く、農作物の間には、家事裁縫や一家の生計の方針等も考へなければならぬのです、一日心ゆるやかに物見遊山に出る間とても無いのです、都會の人の中には、田舍の生活の此上もなく樂しく氣樂な樣に考へられて左のみ莫大な勞力を費さずとも、天然に米麥蔬菜も容易に得られるものと考へらるゝ人もあるやうに聞きました、永く都會に住んで、偶の旅行て田舍の狀態を見られた人には、さうも思はれませうけれども、田舍だとてそれ相應に田畑山林皆租稅もかゝつて、それには植付けや耕作の費用、日々丹精の勞苦、數へきれない程あるのです、樂しみと云へば年に一度の新年の晴着と、秋の收穫後の祝ひの餅、思へば哀れな田舍の生活、筆硯に親しみ讀書に耽る世の幸福な諸嬢よ、妾等哀れな境涯に甘んじて居る不幸な下流農家の生活

は記して見たら豫想外の事實もあるてせう、

(評) 足にひまなき水鳥の、何の苦もなげに見ゆれども、猶此の辛酸あり。夢の如き田園生活に憧憬るゝ都會の女子は、此の貧しき村嬢のために同情の涙を吝まざれ。

○凱旋

神戸二之宮町四丁目六十六 徳永みね女

喇喨と響き渡る行軍喇叭、今朝の六時に和田之岬を出發した第四師團の凱旋軍隊が、今此所を通過して西の宮へと進むのである、高く聞ゆる歩調の音、身には約七貫の重量物を着け、悠々と進む勇ましさ、幾多の戰に臨み、幾多の功を奏して、今久し振に故郷の土を踏み、明日は懷しき所屬部隊に入るかと思へば、鬼をもひしぐ武夫も、流石嬉しさ胸に溢れ、足は自ら進むのである、萬歲は連呼せられ、男女老幼の奉迎人は、橋の袂、辻の曲り角に蟻の如く群をなし、若しや知りし人の勇ましき姿はなきかと、首を伸して迎へる人情、「やア父やんだ――」年は五才位か、くり〳〵と太く逞ましき見供「母ちやん、父やんが居るよ」「何所に」餘り貧し相もないが、さりとて富める家の女でもないらしい廿四五才の女、探すよりも早やせきくる泪、手巾に眼を拭ひ乍ら、顏を振り上げた時「オ、貴郎ッ」思はず群集を押し分けて五足六足よろ〳〵と進んだ、「見苦るしいッ馬鹿ッ」萬歲の聲は一齊に止んだ、前に行く兵は振り返つた、後の兵も視線をそれにうつした、軍曹の服着たる彼の兵は、一寸振り返つて顏をそむけた、がや〳〵と騒いだ群集も、髯ぼう〳〵と生やした恐い眼の軍人も、思はず無言に顏をそむけて眼をしばたゝいたのである。

(評) 喜びの中に悲みあり、悲みの中に喜びあり。

(選外) 奈良 市 三好奈良菊



○涙の朝

麹町區飯田町六丁目十番地　葉　流　子

「お孃様、お見えになりましてございますよ、」とけたたましう叫ぶ松やの聲に、私は急ぎ病の身を起して、仲やの肩によつて門まで出た、あゝ兄様が御出征なすつた時には、新橋まで勢よく御送りしましたものを、二年目のうれしいたのしい御凱旋の今日は、思はぬ病に、父様、母様、姉様、みなお迎へにいらしつたのに私は一人門までしか出られない身……いひ知らずわびしい氣がして、犇と仲やにもたれると、「あれ、若旦那様はおひげをおたてになりましたよ」と、松やがいふ。ふら〳〵するのを強ひてこらへて、眼をあげると、勢よくかけてくる車の長い一列、一番先のは兄様らしいが、成程遠目にも御鼻の下に黒くひげが見える。だまつて見てゐると、兄様はつと軍帽をぬいで、右手に高く〳〵車の上でおふりなさるので、私も大儀なからだをおこして、ハンカチーフをふつた、見てゐるうちに車は近づいてくる。

先に兄様その次に父様、母様、姉様、従兄の孝信さんに、由さんと、あとはもう眼にも入らない程澤山な車……、門の前で車が止つて、兄様はガチャリと佩劍の音もいさましく飛び下りて、「須美さんッ!!!」と私のからだをお押へなすッた。「兄様ッ」と呼んだきり、私は、泣くまい、泣くまいとしたけれど、どうしても涙が出て、よろめく足にしつかりと兄様の御腕にすがッて、私は、すゝりあげて泣いたのである。

「御機嫌ようおかへり遊せ」と、松やと仲やがいふのを、兄様は笑顔でうけて、私の身をかゝへたなり玄關へと……「須美さん病氣だつてね、命をまとにいッた僕は、かうして丈夫でかへッて來たのに……須美さん痩せたねえ……」と、兄様の御言葉は短いけれど、情愛があふれてゐる。又しても涙のふりかゝるのを、じひて抑へて、あふぎ見た兄様の御姿、濃いひげに、色も黒くお成りなすッて、雄々しい中尉の服に、豊かな肉付!!!あゝ、倚るや朝戸の柱つめたう、私は病の身を感じるとひとしく、兄様の幸を心から祈ッて、又、泣いたのであッた。

（評）多情多恨、たゞ取材の宜しきを得ざりし爲め、人を動すの力少きを遺憾とするのみ。

○冬の山家

津市四新町三十九番地　松　尾　花　子

野仕事を終へて老いませし父上と二人家路に就いたのは暮の鐘が鳴つてから、東の御空には絹地に描いた

様な宵月が浮いて居る。今宵を身は切る様な風が吹き荒んで、堀ヶ坂に懸つた時は布引嵐と共に颯々と松に鳴つて身も飛ばされさう。やう〳〵だら〳〵坂を下りて右に、戀しい家にと着いたが、中は眞の闇。燐寸を漸くに尋ねあてゝ煤こけたラムプに火を點じようとすると、風の爲に消えること三度、漸くに明るくなつた。

「おゝくたびれた」と、爐の端に勞れた足を投げてごろりと横になられた父上と、榾火に暖めた茶て夕餐を終へた時、隣りの子が今年二つになるお霜を伴れて來て呉れたので、乳を與へながら今更の樣に其顔に見恍れて居る間に、「おゝ可愛い奴じや々々々々」と頭を撫て、居られた父上も、酒の回つてか早やうと〳〵とせられるので、直に床をのべて御寐ませ申さうと御勸めすると、

「おゝさうじや〳〵つい眠くなつたてなワハ……御前ももう休みな」と、機嫌よく床に就かれたので、私も勞れたまゝ戸締りもいそ〳〵と、轉て床に入いつたが、あゝ如何して寐られよう。戀しい懷しい良人は愈々明後日除隊になつて目出度凱旋せらるゝのではないか。あゝ良人は如何に肥えましたであらう、髯も疎らに生へられたであらう。勇ましい事、悲しい事、あゝ其も聞かう、これも聞こう。それにしても待遠いのは明後日の朝である。私は只うつとりとお霜を見ると、乳房を含んだ儘、何を夢みてか莞爾微笑んで居る其愛らしさ。私は思はず其林檎の樣な頰に頰ずりした。

外方には尙も風が吹き荒んで落葉の戸を叩く音が一連り凄まじいのである。

（評）凄じき風も、此の家のみはよきて吹くらん。

（選外）　三重縣　山本富士子



○わが心

三重縣桑名郡木曾岬村常在院

平松隆子

女の學問は無用なるとなり、彼村長のお孃樣や隣の雪坊が好き手本、兎角女は家鄕に在て働くが良しとて、父は妾を學校へもやらず、唯一度の旅さへ許されず、山に樵り、田に耕し、昨日は繩なひ今日は筵おり、此年まで母が裁ち縫ひの業を隙々に敎へくるゝのみにて、物の書など手にせし事なければ、何も知らざる身は行

末の生計に不自由ならん、せめて女一通りの行儀作法讀み書きの道修めたし、父に語らず母に秘し、都へままよこゝばかりに日は照らじ、一番汽車は人も悟らじ、明朝こそと、野良より歸れば、水入らずの一家團欒、父の濁酒の機嫌麗しく、今日太郎作が和殿は良き娘を持つた、容貌は好し、親に孝行、彼の甲斐性善き働振り、此村に二人とないと譽めたぞよ、他人でさへ斯うだもの、己や婆の眼には何と映るべき、老躰の疲も忘れて稼ぐも、可愛の汝に早く三國一の婿殿迎へ、初孫の顏を見たきばかりぞと、笑ひて德利ふり給へば、母の顏にも和氣靄々たる此家庭、王侯將相の姫公達もよも知らじ、あゝはづかしかりしと、晝の空想、全く消えて、覺えず滿身に冷汗をながしぬ。

(評) 結末力あり。

○吾が嗜好

牛込區白銀町二十九番地　山崎初枝

そも人には、さま〴〵の嗜好あるべけれど、そが中にも、夜やうやく深くなりて、みな人も寢しづまりたる頃、ひとり心をおし鎭めて、文机にうち向ひ、燈火あかくしなして、ひる何心なう見過しし書などを、ひもときたらんばかり、興ふかきものはあらざるべし。

さるは、見きくこと廣からず、をぢなき身にして、あがれる代の賢き人々とかたらひ、あるは、遙けき海の外の國々に渡り、あるは、めざましき人のあり樣など、まのあたりにうち見ることのする、いづれもとりどりにたのしからずやは。まして、或時はあはれをうたひし言の葉の露に袖をぬらし、ある時はをさなき身をさへ奮ひ起さるゝも、すくなからぬ者をや。

されば、吾はいとけなき頃より、讀書を以て無上の快樂となし、いとまあらんかぎりは、多くの書をよみて、わが心を、なぐさめ來りしなり。まことや、ひるの間の、とかく心せはしくして、浮きがちなるをばしづめ、且つ、おのが智識の發達進步せんことをはからんには、夜間の讀書に、如くものはあらじかし。

(評) すら〳〵したる筆づかひ、今一段の洗錬を經ば更に上乘たらん。

○御墓の前

伊豫　俊子

今日はお父樣の御佛事に當るので、お母樣とお叔母さまと、弟の武を連れて、露草を踏み別けつゝ、こんもりとした杉垣の門をくゞると、こゝがお父樣の御墓なのである。妾は手折りし草花をそなへ、しよんぼりと

して御墓を見詰めてゐると、やがてお母様は手を合して何か言つていらつしやる。この御姿を見た妾は、おもはず情がせまつて、胸の鼓動は高くなり、寂しい悲しい、何とも言へぬ一種の感情にうたれたのである。あゝ御父様は今年の春、人道の敵、平和の敵を亡ぼさんがために、御遠征なさつて、とう／＼奉天とかて、秋の木の葉ともろともに、妾や可愛い武を見捨てゝ散り果てられたのである。

「姉ちやんお父様アこゝに居るの？」父上の御墓を指さしながら、愛くるしい弟の口から斯う問はれて、妾は斷腸の思ひで、忍び泣きに泣いたのである。

「そうなのよ、お父様はこゝにいらつしやるのだから、坊やもこれからうして……いゝかね」

何にも知らない武坊は、教ふるまゝに、小さな愛らしい手を合はせて拜むのである。

あゝ世の中に武坊ほど不幸なものは又とあるまい、現在、生みの父上には又と再び此世て會ふことは出來ぬのである。

武のその姿を見られたお母様も共に露宿されて、妾と顔見合せた時は、二人とも瞳に溢れた熱い涙が一雫。

「おゝ母ちやんも……姉ちやんも……泣いてる」……涼しい眼を見はつて、氣遣はしげに斯う云ふた其面には、異樣な曇がかゝつてゐるので。

「武やもー歸ろうチ」寂しさうに草花をなぶつてゐる弟の手をとつて、まだ白玉のかゝつてゐる草深い小路を辿り行けば、常にしめりがちの袖は、いよゝ重くなるのである。「武ちやん唱歌でもうたひませうか」弟は得意の澄み渡つた聲で。

「我等は海國男子なり」……ふりかへつて見ればお母樣は悄然と、吾等の姿を見詰めていらつしやるのである。

（評）君にのみ言ふにはあられど、抒情文とは强ち悲しき事をのみいふにあらず、又必ずしも死をのみ捉へざる可からざるものにもあらず。今少しく眼界を廣くしたらんには、なほ他に斬新奇拔なるもの多かるべし。勉めたまへ。

◎冬夜兄を懷ふ

武州　月桂女史

さ夜ふけて筧の水の音もたえ／＼に、寒さいとたへがたく、折から來鳴く梟の聲、物思ふ身には一入しみ渡りぬ。兄上は餘念なく書見し給へり、妹はすや／＼とねむれり、妾は母上の御腰さすり居たるが、かゝる折父上おはせば如何に心强きとならんと思へば、はや堰きくる涙に、はつと母上の方を見れば、妾の顔ながめ給ひ、何を泣くぞと優しう問ひ給ふに、いとゞ悲しく、お答もし得て。さしうつむきしが、母上は妾の胸を知り給ふか、いかに慕ひまつるとも一たび逝きし父上は、御かへりあるまじ、さるを泣くは愚ぞ、父死すともかへす／＼も力落すまじと、のたまひしを忘れしか、心弱し、涙止めよ、まして昨日今日は敵も歸り來つれば、

父上おはすも同じと諭し給ひしが、いつしか御目に露宿れり、兄上もふり向き給ひ、げに吾程不幸なる子は世にあるまじ、一朝のはやり氣より家を出てさまよひ、五年の間一度の御音づれもなさゞりし爲、父上の亡せたまひしも知らず、母上の病みませるをも知らざりき。皆是おのれが成しゝ業、あな恐し許し給へ。されど〳〵今は早もとの敏に立かへりぬれば安心なし給へ、と宣ふ御口の下より、あゝ我は父を殺し母を病ましめたる大罪人よと、深き吐息をもらしつゝ、男泣に泣き給ふにぞ、いよゝ堪へ得て聲をあげて打ち泣きぬ。

われと我が聲に驚きて目さむれば、燈火はの暗く、病み給へる母上の御顔半てらし居たり。兄上の御姿は見えず、幾度見廻せどもあらず、さてはまことに思ひねの夢なりしか。口惜し、兄上歸りませしは夢か、あゝ、茫然として涙も出ず、折しも母上は敏、敏、と呼び給ふ。母上も夢見給ふか、斯く迄皆々の心を苦しめ給ふ兄上は何處に住み給ふぞ、父は死し、母は病み、たよりなき妹二人は日々涙にくるとも知り給ふまじ、我家こひしと思ぼさぬにや、妹あはれみ給はぬか、あゝうらめしき兄上よ、歸り來ませ兄上。

はりさくる胸のくるしさに、妻戸あくれば廿日あまりの月物凄く、松が枝にかゝりて夜を守る犬の聲かすかなり。あゝ兄上は此淋しき夜をいづくにて過し給ふか、あゝ。

◎はつ夢　　三河　澤田つま子

枕の下へ布いた寶船が氣になつて、羽子や歌留多に疲れし身ながら、まだ夢路にも入らず、すや〳〵と眠つた綾ちやんの側に深ひ空想に耽るのであつた。

春立ちしとは言ふものの、夜の氣はいとど肌寒いので、蒲團の襟深う被きて、眠と眸を閉ぢながらまんじりすると、今宵の歌留多に仲好の露江様て、「天つ風」を奪ひ合ひし事や、綾ちやんが秘藏の「花の色は」を姉様に拾はれて多愛もなう泣出せる夢など、妄想は其から其へと運び〳〵て、果は樂しいお正月もはや一日暮れしかと、寂しい想が池のやうに胸へ祕み入るのである。が、ふと今宵初夢の樂しさを思出すと、いつしか脳の内には、雪の冠、雲の帯と、文にのみ知る富士の姿が描き出されて、自分は恰も虹のかけ橋を、美しい翼の生へた天女に導かれながら其清き嶺へ辿るかのやう、恍惚となるのであつた。されど其も瞬間て、身は梨花雪の如く匂ふ夕月の窓に八犬傳を繙きながら、濱路姫が露にさらはれし一條に、卷を被ひ瞳を閉ぢて、女房達の驚ける姿や、宵侍の狼狽へ廻る様などを空想した春の夕が夢のやうに忍び出でられ、あるひは朝草の露を履んで、野の徑を散歩した折に、紫紺の色滴るやうな茄子を籠に盛つて、いつも暢氣な吉爺さんが畠の隅に煙草の煙を輪に吹いて居つた事など、妄想は限りなく馳せめぐるのであつたが、たゞ是は夢よりもはかない空想よと心附くと落膽して、さて實際の初夢は富士に鷹に茄子と都合よく夢みられるか何うか疑しいので、なか〳〵に眠られぬ瞬は一しほに冴えかへるのである。

あゝ何故早く眠られぬのかと頭をもたぐれば、朱塗の小枕に房々した髪を垂れて綾ちやんは、何面白の初夢にか美しい片笑靨灯影に見せながら、「姉様と」一聲またすや〳〵と眠るのであつた。

◎病める友に　　河内　瑾花

友は西の京の人なり、生れて父を知らず、幼くして母に別れ、伯母様の許に養はれて、さても美くしき乙女とはなり給ひしかど、かれて世を厭ふ思のれざし胸の中に固く、水清き小川の流れに佇む時も、草あをき野邊にさまよふ時も、のどかなる雲雀の聲につけ、さびしき桐の葉の雨につけ、想像の翼をかりて遠き〳〵昔に馳せかへり、慰めの心の花はとこしへに逝く秋と共に過ぎたることを忍ぶ、かなしからずや、語らば涙やつきざらむ。

凡そ世の悲慘と云ふ悲慘を嘗めつくして、ことしの春やう〳〵定まれるまなびやの業をへしも、あはれや、君を呪ふまがつみの神は、再び立つ能はざる病を君に下しぬ。今や嵐山の麓、紅葉の影こき別墅に、小さき心を藥の香高き衣に包みて、静かに只、死の手に抱きとられむを待ち居たまふとか。あゝ、運命つたなき友よ。

一とせ水のおばしまに立ちて、やさしき笑みをもらしつゝ、人や世や、我れに向ひて如何に冷酷きはまるものとも、君よ、神のふところは暖かなりとおほさずや、わがなぐさめの影はかしこにこそと、明らけき月に向ひてさゝやきし君は、今や其の神にさへも見捨てられにしか。

昨日我れ友の文をみてより、其夜まどろみもせでたゞ一人、神いますか、いまさゞるかを疑ひぬ。もし神いますとせむか、心安かれな友よ、一死君に於て何かあらむ。笑うて死を待ち、只神のうつくしき御かんばせを望まむのみ。もし神いますとせむか、人生何ぞ、世何ぞ、宇宙はたゞ何物ぞ、新らしき今日を迎ふるは、一日のなやみつかれを増すのみなり。過ぎゆく今日の日と共に永久の世に歸りゆかむに、惜しむべき者ならじ。何をか憂ひ、何をか歎かむ。心安かれな我が友、花の友垣。

◎離別

常陸　秋山欽子

消えゆく彩雲ひく〳〵飛んで、入相の鐘沈みし太虚を渡り暗に消えぬ。と見ればゆるやかなりし水の調べは、後峯の松風と合して不斷の音樂を奏て、蘆の葉のそよぎうら淋しき夕暮に、獨り我はそゞろ夢見るごと思ひに沈み入りぬ、

鳥がなく花の都に物學びせる友のたれかれ、年毎に錦をかざりて歸省するを見るたび、燃えんとしては消えつゝありし我心は、再び勃興して慈愛深き父母の膝下を離れ、山緑に、水清き故郷を棄てゝ、明朝を卜して東都に上らんとすなり、オゝ去らばよ我故郷の地よ、

悲しきは離別なるかな、されど我前途には赫々たる希望の光あるにあらずや、暫くの別れを何ぞ悲しとはいふ、女々しき我心かな、さはれ越鳥は南枝に巣くひ、胡馬は北風に嘶く、故郷戀しきは我心のみかは、

進み行く前途は極めて峻險なり、されども汝の進むべき道は唯一筋なるをゆめ忘るな、必ず心して道には迷ひそ、と父母は幾そ度となく我を呼びて繰り返し給ひき、いかで我希望の彼岸に着かずして再び故山に目見えんや、

あゝかの森蔭に見ゆる我が家、さては樹木空を覆ふ鎭守の森、一本松千代に榮ゆる城山、脊戸を流るゝ清き小川、我果していづれの月かよく汝と逢ふことを得べき、あはれ故郷の地よ、長へに幸多かれ、

夕風一しきり枯柳の影をみだせば、かなたの森蔭より夜の帷幕は徐々に下界を包み始めて、美しき新星の影二つ三つまたゝきそめぬ、

◎花の主

神戸　勝田かつ子

《花の下蔭風薫る、靜けき春のこの夕……》

私は試驗休みに歸省して以來、丁度一週間になるが、毎朝こゝまてきては、此歌を唱つてさまよふのが常てある。姉樣が十三、私が七つの春、同じ花やかな友禪の振袖を風になびかして、摘草をした幼なじみの野邊てある。今は私が十七、友禪の振袖時代はとくにすぎて、姉樣も二年前に嫁がれ、可愛赤樣まで出來たのてある。然し野邊の有樣は少しも昔と變つてゐない、色々の草花の咲いてゐる畝も、小川のせゝらぎも、雲雀の歌も、勞れて共に休んだ石迄もそのまゝ。あまりのなつかしさに、毎朝私はこゝまて來て、拾年昔に立歸つた氣になり、姉さんと合唱した歌を唱つて、其昔を忍ぶのてある、けさも相變らず朝露に裾ぬらしながら、いつもの樣に小聲に唱ひつゞけ、行きつ戻りつ幾度も幾度も、少し勞れたので傍の石に腰を下した。あゝさうてあつた、私が此石の左に、姉樣は右側の方に腰をかけて、あどけない事を話合つたのは、思へば今も眼先にちらついてくる。きのふも通りかゝつた七つ入つの女の子、けさも手に露のしたゝる花を澤山擬つて、前を行き過ぎやうとするのてある。其花の色があまり奇麗なので私は思はず『その花を一つ分けて頂戴な』といへば、女の子は無言のまゝて一寸私を見たが、近寄つてきて惜げもなく、四五本の花を差し出した。よく見るとふつゝりとした赤い頰、房々とした髮の艶、殊に其まなざしの愛くるしさ、如何な醜男でもそれてながめられては頰ゑまねばならぬ位。『有難うね』女の子は愛らしい眼を丸くして、無邪氣に一寸うなづく。まあ其時の顏が姉樣の幼な顏に瓜二つ、小さい口許から《花の下蔭風薫る》御歌の聲が漏れ出さうてある。

◎白泡の記

周防　小澤千惠

今我は浦濱の巖頭に立ちぬ。吁思出多き此巖、去年の六月、此處浦濱の港を後に遠く出征し給ひし兄上、死は元より望む所との給ひしが、其の百の葉の露とならんとは露思はざりきよ。

時は何日、大石橋夜戰の夜、劍影閃に閃き、主を失へる馬狂ひ叫ぶ修羅の巷に出てまして、あはれ異鄕の露と消え給ひしなり。

吁思出の此浦浪。

嘗ては、三千の村人に送られて、笑つて出征し給ひし兄上の、先つ日は白木の箱に一片の骨と化して、家に歸られし其時、我涙の泉は枯れんとしぬ、されど泣けばとて兄上歸り給ふに非ず、我は再び兄上の死骸を護りて此浦浪の際頭を過ぎ、村の共同墓地に行きぬ。

吁其後此際頭に立ちしは幾度ぞ。

浪路はるかに一抹の煤煙。今日此頃は、我將士凱旋なすと聞きたれば、それにはあらざるか、同じ出征の身にして、不幸なりけりな我兄上、若し御無事にてあらんには、面白き土産話しに夜も更かさんに。

鴨二三羽、羽ばたきて深き我空想を破れば、風寒く肌にふれて、紅葉ハラ〳〵と降り來り、白泡の、岸を打ちては返し、返しては寄する中に、卷き込まれて、影を失ひぬ。

木枯尙高くして、波の音凄く、湧き上る白泡の丈一丈。

○わが慕はしき君

豐前　淸水南溪女史

先だつも後るゝも同じ夢の世といひながら、契りし君に先だゝれしこそこよなう悲しけれ、何事も共に學成り業遂げて後にこそと、常々の御言葉も今ははや仇となりぬ、あはれ黃泉に行きませし君、今妾の悲しみを如何に見給ふぞや、

あはれ人の命は草の葉末における露とはいへ、などかくうるはしき君を散らせし、入面の山の春の花、暗無瀨の秋の月、思へば昔の夢はいと樂しかりき、去ぬる三十五年の春なりしか、またしばし逢はればとて、樂しげに希望など語り、歌詠み文作ることも習へよと仰せられて、いと美はしき硯さへ給はりぬ、その御硯は、今茲にあり、其御言葉なほ耳に殘れど、この歌、この文、また誰にか見せまつらむ、あゝ、歌ならへ文よくせよとは、この哀れこの悲しみをうつせとはあらざりしならむに、この御硯今は十行の涙を湛へて、長へに悲哀の紀念とぞなりぬる、あゝ悲しき哉、君の病重かりし時、熱き涙をはら〳〵と流させ給ひて、無言に妾が腕擬られし時の心地更に現とも覺えざりき、その時迄も尙ほ見舞の詞いはれしことの情の深きよ、あはれ君の逝かれしは去年の今宵にて、月もおぼろの夜なりけり、幾多の月日病み給ひし君は、誠に眠るが如く妾の悲しみもよそにして遂に無情の人となりぬ、あゝ止みぬるかな、君が萬の事休せると共に妾も又休せり、悲しきかな、悼ましきかな、

あゝ君逝いてはや一年、君が紀念なる墓標の文字は、雨に打たれて日每に薄らぎ行けど、妾が心なる君が面影は愈々明に悲しみ未だ盡きず、あゝ此の身、朽ちずして血は熱し涙は湧く、忘れむとすれども得べからず、あゝ妾が愁の絕え、悲しみの止む時は、妾が涙涸れ血冷えし時なり

あゝ昧氣なの世や、あゝ悲しの世や、

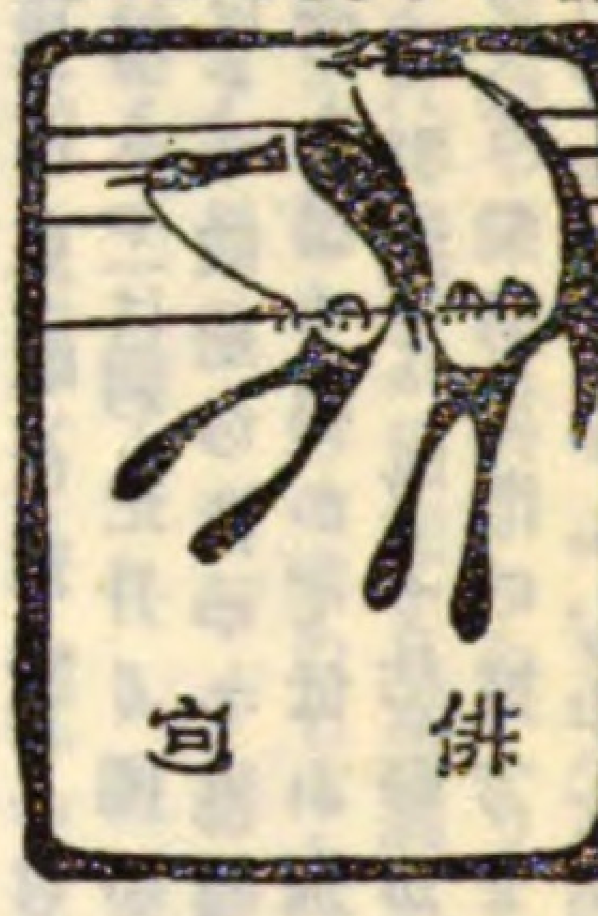
○落花有情

山梨縣　百合子

去年の彌生の末つ方、花の盛りも見給はで逝きにし君がたま祭りせんとて、なにがな手向草にもと、端近ふ料紙取出て見やる庭前に、なつかしや目に入る物は亡き人の形見とのこる一本櫻、朝な夕な愛で給ひし君は去つてゐまさず、あはれ此の一本櫻、誰が爲に斯く粧ひこらして咲きいてしか、など思ひ亂るゝ折しも、あやしや風なきに梢をはなれて一片二片ひら〳〵と我が硯に落つるよと見れば、あてなる色香は消えて、忽ち墨染の姿とかはりぬ、あなあはれ落花心有りて君が情を知るや、將又、我が思ひの花に通ぜしかと、

なれも又君が後の世やすかれと　花の姿を墨染にして

巖谷小波先生選



特別第一賞

常陸國高濱町東大橋洒葉つれ子方　花舟女史

大原や牛も數居る桃分限

〔評〕一幅武陵桃源の圖、之に對して仙境に遊ぶ感無からんや

特別第二賞

上總國長生郡新治村新笈川　小川國子

置去りに逢うて櫻の月夜哉

〔評〕洒脱にしてまた淸艶尋常一様月下の櫻も置き去られたる身に即ち頗る興あり

特別第三賞

花代

孤兒の尾花に笑ふ日暮かな

〔評〕この笑の淋しさは夕暮の尾花をして、更に詩化せしむるものあるを覺ふ

天

回禮や師の家遠き山の村　岡山市二日市町　横山亭子

〔評〕回禮の句動もすれば俗臭を脱し難きに、山村に隠棲の師を訪ふに至つて、忽ち高雅の吟と成れり

地

鷹狩や阪東聲の下郎ども　豊後國北海部郡臼杵河畔唐人町　平山紫泉子

〔評〕男ましき句なり、心地よき句也

人

山につゞく大竹藪や殘る雪　三重縣津市　坂ふみ子

〔評〕藪に殘る雪、凡ならざるにあらざれどその山に續けるに景の新らしきを想ふべし

秀逸

橋錢の旅つるしたる柳かな　上總　桂久仁子
朱雀野に白馬の公子時雨けり　豊後　平山紫泉子
如月の舟に富士見る日和かな　上總　志美子女
猫の脊に灰付て來る夜寒かな　佐世保　江口しげ
落葉走る寺の廊下や月寒し　和泉　蝶雨女史
達磨忌や聽聞の尻冷えわたる　美濃　田中たづ子
行秋は松の嵐となりにけり　信濃　眞琴女史
煤掃や庭にくづれし膳の音　牛込　林安津子

繪双六お江戸の空の色赤き　陸前　安西伊代子
手斧初鞍馬の杉を倒しけり　陸前　失名氏

松のはの落ちこむ池や夕時雨　廣島　美枝
はつ雪や庭の小松の若じらが　福井縣　長谷川靜子
梅が香の中にゆかしき小家哉　筑後　近藤りえ子
黄昏や川過を白き蕎麥の花　上野　佐藤露子
澤堰いて水に引かする鳴子哉　靜岡　早苗女史
松島の冬に籠るや京の畫師　仙台　樗木加津子
灯消して鹿聞く宵の小雨かな　仙臺　白葩子
花散りて庭は奇麗に穢れけり　筑前　副島吟風
星月夜どちら白菊黄菊やら　三重　奥瀬かすみ
代筆のふみ頼まれし炬燵かな　上總　露子
焦つくや火鉢にかけしなべの物　千葉　花百合
降物に夜は靜まりて寒苦鳥　上總　いな子
水くるまおともしつかにひるの月　紀伊　糸川みち子
松の内錦着馴れてしまひけり　陸前　安四綾子
彈初の音流るゝや加茂の水　陸前　安齋紹子
匂ひけり柳くゝれば梅の花　常州　日の出女史
若竹や月をのせたり落したり　常陸　菅柳愛子
嘶くや小松引野のつなぎ馬　南總　小川とり子
長閑さや障子にうつる人の影　千葉　小川さち子
梅咲くや鼓うつ家に灯影して　伊豆　内田綾子
うち折りて何かにしたき氷柱かな　津市　蝶子
山笑ひ鳥歌ひ海默しけり　埼玉　井上樂子
煤掃きやはや正月も棚の上　備後　濵本隆子
月ほそき破船の柱や千鳥鳴く　松尾花子
芒野を鵆も鳴かで低ふ飛ぶ　岡山　松本もと子
鳥一羽茨に叫ぶ枯野かな　能登　花菫女史
春くるや凱旋門の彼方より　熊本　岩本すえを
雪の夜を御百度をふむ少女あり　越後　宮島漸星子

春野や田五作馬を叱る聲　上總　小川幸子
長閑さや呼鈴のなる四疊半　上總　小川とり子
鐘の音や街に氷る人の聲　下總　鈴木なみ子
初雪や去年の日記には雨とあり　岩代　松山芳子
順禮のたいづる醉へす野分哉　越後　宮島春江
極く樂な身でありながら秋のくれ　上毛　河内とめ子
鶯にかぞへ忘れし小錢哉　千葉　智與子
炭つぎて留くさむき炬燵かな　南總　さゝなみ
初春や聲うら若き歌の會　與市　大上くま
寒風にからび付きたら串の柿　和泉　紅梅女史
三疊に炬燵抱いて冬籠り　四谷　山中よし子
月招く手くだもつきて枯尾花　横濵　楓葉居士
水鳥やうちては返す波まくら　横濵　山崎栞鷗
朝夕の口くせになる寒さ哉　横濵　山崎都代子
提けて居る傘も開かず花の雨　横濵　木村園子
梅折れば袖から這入る寒さ哉　横濵　安田摩參子
四季咲の杜若小さし暮の秋　遠江　靜枝
冬の夜や氷をすべる星ひとつ　三河　月溪女
行く春を馬鬼が原の旅路哉　土佐　秋月廣江子
煤掃いて鼠の糞の多き哉　豐後　彊の溪月
紅梅や宮設座す比丘尼寺　上總　金杉松風女
澁柿の爲るひとつにあらし哉　豐前　秋滿香子
托鉢の留守を柳の散りにけり　岐阜　日比舒子
澁柿を臼搗ぐ軒や秋の雨　美濃　碓井邦子
埋火に櫻炭足す女かな　岐阜縣　臼井しげ子
里時雨香炷く迄の奢りかな　近江　勝山久子
それ鯉と網打つ川の落葉哉　津市　德田愛子
月の池白山茶花の饑れけり　安藝　箕岡愛蝶
桐のはのせどの畑にこぼれけり　廣島　謠々奇女史
寂として髑髏に枯葉落葉かな　三重　奥瀬かすみ子
白砂の富士を見に行く枯野哉　千葉　小高せい子

曉の橋に霜ふむ少女哉　大阪　幽紘女史
花足袋や膝にねる子のあいらしき　美濃　山田はぎ子
叩かれて禮云ふて來る布團かな　佐世保　江口かつ子
君にうけしかたみの菊のしぼみけり　伊豫　俊子
朝月を馬ひいて行く與作哉　廣島　いさみ女
初霜や一鋤入れし生姜畑　讃岐　久保あや子
夕霧に人來と見しは案山子哉　常陸　酒葉貞子
初東風や島をはなれし帆の丸み　大和　榮山昌子
歌かるた迎ひの人の來りけり　岡山　横山かめ子
春の宵や紅梅殿に歌合　新潟　ゆき子
此闇を何所からつくか霜の鐘　神田　白鍋女史
行く秋をさびしき雲の行方かな　千葉　蕗子女史
神棚の灯更けたり嫁が君　岡山　横山かよ子
松の雨孔雀の羽にこぼれけり　新潟　野ばら
紅梅の窓に伊勢よむ女哉　上毛　眞砂蕗子
雪の日やうた語りする奥女中　相模　大谷津峯子
むつまじく雑煮の鍋をかこみけり　磐城　鈴木かつ子
勝ち誇る庄屋の下僕や宮角力　京都　芳子
尾花より三寸たかき白帆哉　千葉　鶴岡きぬ子
鵜の羽の霜ほす晝を時雨けり　京都　堀池靜子
初空を輪に舞ふ鵄の高き哉　大分　甲斐ふい子
巡禮や三十三所春の風　京橋　内本ふさ子
婢女の小唄で洗ふ蕪哉　羽後　喜佐子
菅笠に菌干してあり藪の家　越後　藤原圀子
出船まで送る客あり小春凪　上總　月の桂女史
留守居して秋に夜長を覺えけり　播磨　朗月
馬洗ふ川に月あり秋のくれ　廣島　岩本松葉
古寺僧なく三百年の銀杏散る　武藏　岩田たか子
木枯嵐や屠られに行く牛二十　三重　山本富士子
軍扇にはらはらと散る霰哉　相模　大谷津峯子
初雪や踏むには惜しき五歩の庭　茨城　小泉はま子

大凧を柱につなぐ日和哉　千葉　小川幸子
小春日や鯨汐ふく沖の方　陸中　黒澤美津子
凱旋の小春の村に戻りけり　陸中　黒澤美枝子
煤掃や美女三千のおきどころ　豐後　白井玉子
庭の池美しう澄みぬ渡鳥　美濃　尾花操
夕榮や與作が脊戸の菊の花　美濃　橋みさ子
白菊の氣高きに襟正しけり　埼玉　樂子
今啼た鹿より遠き瞬かな　埼玉　紫女史
屏風岩さけめさけめの紅葉哉　姫路　濱田きゑ子
山茶花や柱に古き指南札　埼玉　井上なか子
小春日や阿蘇の烟の靜かなり　豐後　田仲保子
文がらに昔をしのぶ夜寒哉　武藏　ほたる
雨々と雨の日記に冬たちぬ　千葉　朝尾節子
軍人の子ぞや泣くなと砧打つ　上總　松田久子
奥山の奥にも隱かな　千葉　鈴木しづ子
初午や葬裘の下に落し文　上總　小川きち子
明月や千里限なく笛の聲　和歌山　保田愛子
白萩や眞白になりて日の暮る　四谷　山中照水
斷絃の詩に入る秋の名殘かな　松山　山脇雲桂女
入江まで汐の光りや露の秋　千葉　平山ふさ子
燒栗の月に香ふや柴の庵　備後　秀子
月の届く限は稲ぞ雀とぶ　群馬　河内汀柳子
里の子も時雨て歸る夕哉　横濱　濱の浦人
小春日や日を脊に負ふて富士寫生す　相模　林千代子
木枯らしや野に吹き殘す月一つ　滋賀　重森芳枝
須磨の宿千鳥の日記かきにけり　淡路　日田子春
野社や鳥居目に付く枯野哉　横濱　四村茂子
朝月や伏見へかへるやせ男　品川　橋星子
鐵瓶のお湯がチンチン夜長哉　岩代　藤香
看病に虫の音よわる夜更かな　福島　今村清子
ペン先の折れて夜寒を覺えけり　越後　野菊女史

消息文

文學士　沼波瓊音先生選

天

○畫葉書だより

麴町區飯田町六ノ一〇　葉　流　子

美知樣!!!死の影を裹んだやうに沈み切つた冬の夜の、寂しさに泣く者は、あなた一人ではございません、涙に弱い、情にもろい、病のこの身、必らず忘れては下さいますな!!!

(雪景色淋しき畫に――)

遊蝶花は變らぬ愛を表はすとか、おはれ〳〵名にし負はば、小さき胡蝶のむつるゝ如く、君と我と……

(パンシーの花一面に亂れたる畫に)

なつかしいわ、戀しいわ、美知樣!!!手箱からあなたのお寫眞を出して、しつかりと抱いて、心弱くも涙にうるむ瞳をあげて、只「美知樣」と……お許し下さい!!!涙の雨のしとゞに、御寫眞をぬらしました。

(忘れな草の中に美しき少女の半身出せる畫に)

あゝこの夕、むら鳥しきりに泣いて候を、何となく心安からず、このまゝ冷き死の神の御手に奪はれんやうの心地いたし候。

(冬枯の野の景色物哀れなる畫に)

君!!!わが命は、今宵限と相さだまり申し候、さむ〳〵夕暮を、吐きし血潮は、餘りに鮮かに候ひき……、只とはに、君が御すこやかならん事を祈り候。さらば。

(ねづみ色の地へGod is Loveと記されたるのみの畫に)

(評)冷き死の神の御手に捉へられんとして友をおもふ幽遠の情、畫と相須ちて掬すべし

地

○はがきだより

鳥取市鍛冶町五十七番地　上山千重子

正樣大變にて候、大切の〳〵ジョン事、朝の程より影見えず候、小さき主の心も汲まで、いづちを如何にさまよひ候にか、心あたりはくまなく相尋ね候ひしも、何れも知らずとのみ、皆目行方しれず候。もしや例のざれ心より罪深き御許樣の、そとお庭に隠し給ふなど樣のことは……、とまれ一寸伺ひ上候。

* * * * *

ジョンは未だ歸らず候。ゆふべ一夜を何處の軒に明し

候ひけん。彼が臥床の小皿には、新しき肉入れ更へて、今朝こそはと待ち設けしものを、心なの奴にて候よ。あはれ君、同情すとの御手紙反古ならずば、迷子のジョン探し給はれ。妾は氣も狂ふばかりに候。

＊＊＊＊＊

正樣、ジョンをばやう／＼見出し申候。去りながら、そは全く冷き骸にて、而も皮破れ肉裂け、目もあてられぬ姿にて候。さても如何にして、かく相果て候らんと、身悶えして口惜し涕にくれ候折、新參の下女おづ／＼、ジョンが首輪示して、湯つかはすとて取りはづししまゝ、忘れたりとのこと、さてはと、野犬もろとも犬殺しの手に最後をとげし所以も、略さとられ候、あゝ彼れもはかなき運命に生れ合ひしものかな。就ては、土藏の横手なる一本紅梅の下蔭を、彼が墓地と定め候へば、右御報知旁、淺からぬ宿世の御緣に、一遍の御回向を望ましうて、斯くは申進じ候。

（評）果敢なき運命をもちて此の世に生れたる犬も、優しき人の手に葬られて、安らかなる眠に就けるなるべし。行文流暢にして些の澁滯を見ず。才筆々々。

（選外）千葉縣　鎌田清子



（人）

〇月夜友へ

陸奥[illegible]郡鰺ヶ澤漁師町　三宅嶺子

幾年ぶりにや候はん、望の夜の空拭ひたる如く、月影は限なくさやかに澄み渡り候、お前樣にはいかに今宵の影を眺め給ふらむ、御庭の木ずゑ、池の面、草むらの玉の光など、はや御歌ぶくろの料と存じ候、かねてよりお前樣に笑はれ候程何事にも負けぬ氣の身も、病には敵し得で、こゝなる病院の一ト室にひきこもり候てより、もはや三月にあまり候へども、ついぞ怠る樣もなく、此頃は夜をこめて暫しのまどろみもならず、といとゞ胸苦しくのみ思ひ明し候、去る人申し候に、こゝはありし世に時めきし長者が邸址に候とや、今はしのぶ殘る姿はなくて、そのかみ一世の豪華を照らし候ひけむ月も、今日は空しくかたみの

松に昔の影をとゞめ、葉末の露は亂れて秋風ばかり身にしみ渡り候、お前樣には、今宵の月の、いかにつれなく寂しき影を此窓にうつし候とや思召し給ふ、月に泣く虫の音よわり、細り行く呻吟の聲もあはれに、込み上ぐる咳嗽の聲手に取る樣に、聞くにつけ見るにつけ、袖をぬらし腸を斷つ種とならぬはあらず候、げに肺の病こそ病の中の病と申候へば、もはやいづれの日を限ともわかず、あたら名醫の藥さへたゞ末期の命をつぎ延すばかりと思ひきはめながらも、なほ心細さかぎりに覺え候、さても末の露もとの雫、後れ先だつ例しにもれぬ人の身の上いかに、來ん秋はいづこの月に果敢なき影をてらさるべきか、今宵の月は曇りなく冴え渡り候へども、いかで去年の夜ねたましくふる雨は、今にも雲はれ、さやけき影のぼらん樣に、お前樣とあだに待ち明し候ことの、あかず面白かりしに比べ申さるべしやは、今は月の影いよゝ照りまさり候ほど、心はなほ曇り行くばかりに候、思ひ出て思ひかへし候ては、御懷しさ遣る方もなく候へば、たゞ一ト目なりともちか〳〵に御姿見せられ度候、わきて我まゝの願には候へども、御渡らせの節、先つ頃うつさせられ候同窓會員の寫眞一葉賜はり度、よろづあはれに人のみこひしく思ひ暮し候身の願はこれを限りにおはし候、今は早や夜もいたう更け候に、いづち行くらん、雁一つら、傾きかゝる月をかすめて聲いと、あはれに聞こえ候、かしこ。

（評）凄慘の氣、人に襲ふ

秀逸

○雁のゆきかひ

伊勢　白菊女史

君子樣より

あまりの幼さを御そしりあらんもつらけれど、いと哀れなるは窓の障子に昨日より宿り居し胡蝶の遂にみまかりしに候、いつやら藏きたる小箱、惜しうは候いしかど、假の柩と致し候、花も手向け候、水も注ぎ候、御ひまも在しまさば、あらず、おはしまさずとも、必ず〳〵御訪ね被下度候、かしこ。

かへりごと

やさしき御手に葬られて朝夕の回向をうくる幸多き蝶の身羨しうおぼえ候、私など世を去りたらんあとの心細うも候かな、手向はおろか、名をだに思ひ浮ぶる人も候まじ。

胡蝶二夜とも夢に見え申候、白く長き衣まとひ、背には四つの翼をおひて。さても凄まじの雲や、定めて夕立に候べし、胡蝶塚御心づけ遊ばさるべく候。

君子様より

よべの雷いづち落ち候ひけん、恐ろしさに唯ふるへ居り候ひき、哀れなるは胡蝶塚、夕立にや流されけん、影だに見えず候、宿世拙き胡蝶にては候はずや。

（評）宿世拙き胡蝶をとぶらふ優しの心、自ら人を動かすものあり。

○初産を祝ふ

三重縣阿山郡上野町農人町　奥瀬かすみ子

菊の節句にお目出度い初産、まいて男の子様と承って、まァ何の様に愛らしい、あどない、鳩の様な瞳の、林檎の頬に乳の香嬉しい、さぞ桃太郎其のまゝの、いぢらしい坊ちやま、と妹と二人してお羨ましう、其の御行末、すぐ〳〵とさきくますやうちなんで、白菊黄菊一本づゝ、ふり分け髪からのおなじみに、白は妾、黄は妹、只々うれしうお目にかけます。

と書きつゞる内にも、妾の心はもう、おなつかしい坊ちやまを抱いて居ります、妹は、お乳の香が鼻につくと云ひ、妾はまた此のくぼんだ目に、わこ様のお顔がちらつき、ほんにやる瀬ない思ひが致します、これもみんな貴女様御夫婦の罪、可愛いのを御まうけ遊ばされたのが、しみ〴〵おうらめしう存じます。

くり返すやうながら、まアどのやうに可愛いお顔てせう、云はずともがな、女夫雛の御二人様の事ですもの、今更ら申す迄もない事。この次には孃様にしてお見せ下さいましな。さすれば造化の神様も。又藝術の神様も、何の様に御滿足遊ばす事やら。

（評）文亦乳兒の如くうつくし。

○病める友へ

近江　始子

いつも美しき御筆の跡、今日の此の亂れ樣、一目みて早や胸つぶるゝ心地起り候。踊る胸を押へて讀みゆく文字の哀れさに誘はれて思はず落つる一雫、あはれ許させ給へ、御文を汚せる事を。「治らぬ病と夢にも知らざりし身は」の一句物し給ふ御心中御察し申上げては耐へやらず机の上に泣き崩れ候。

風無きに山茶花の散る此夕、心なき身にも哀れを感じ候を、況して病み給ふ御身には如何許り耐へ難う思ひ亂れ給ふらむと、北の空打ちあふぐ目には、痩せ細りし御身を夜着にもたせて、荒れゆく庭の面に露しげき御

目を注ぎ給ふ淋しき御容姿はさながら見ゆる樣にて、御なつかしくこそ、露子の君。哀れ世には涙の種のつきぬものにや、されど涙は御身の物のみには候はぬと、何も運命と御絶念め遊ばすやう切に祈り上候。斯く云ふ筆の主も常に涙多き身に候を、書かば例の愚痴に終り候へども、去年の秋忍が岡に晩秋の賦を歌ひ候折、幸うすき此身を憐れみ、共に袖しぼり給らむ時、あゝ夢にも今日の御身の上とは思はざりしよ、彼の折固く握りし手はいつまでもと祈りしを、今は幾重の山川と隔つる身とは、あはれ何事も皆夢にて候ひしは、されど棄つる神のみにも候まじ、世は萬事塞翁の馬とか申候を、御心を大く持ち給うて、悲しき中にも慰めを見出し給へかし。「眞情をもて祈らば容れ給はぬ事無き」と云ふ神は必ず眞情より祈る君の心と憐れみて、遠からず君が病ともいやし給はん、愉快に全快の日を待ち給へや、おゝ北へ歸る雁の羨やましきかな、余が身もつばさ有らば、御枕邊と侍りて、力の限り御慰めもし、亂れて御顏にかゝるらん髮にてもときまつらんを、とても斯くても儘ならぬは浮世に候ぞかし。今惜しき筆おらんとする時、心有りてか机上の山茶花白きが一ひら散りぬ、優しき花には候はずや。思ふ事胸に溢れ候へ共得かゝぬ身は半をも綴り得ず悲しく候。封じこめたる可憐の花に何事も問ひ給へかし、之れよりは寒さも烈しくなり增り候へば、くれぐれも御身いとはせ給へや、かしこ。

（評）溫情溢れる友が慰藉には、瘦せし病人の面わにもさびしき笑みの浮ぶなるべし。

○下女より都なる孃樣へ

防州熊毛郡淺江村　岡部佐保

お孃樣。悲しうございます、何卒お腹のいゑるだけ叱つて下さい、叱つていたゞく程妾は嬉しうございます、叱つて叱つて叱りぬいて下さいませ。お孃樣。實は御寵愛の鳩が失せました。昨日、常の樣に庭に出て見ますと、あの美しい鳩が見えませぬ、直きに歸つて參るであらうと思ひまして、餌をば撒いて置き、何心なう澄み切つた秋の空を眺めますと、お孃樣、憎いではありませぬか、大きな鳥があの鳩を追散らして居ますので、思はず大き聲を致しましたが、一陣の風が颯と吹いた後は、もう影も形もございませぬ。

鳩は舊巣を忘れずとやら、もし歸つては來はしまいかと見上ぐる空より雪の樣な羽毛がふは／＼と落ちて參りましたばかり……封じ入れたのは之れでございま

ず。申し譯は致しませぬ、何うか叱つて下さい。あゝ、あの美しい鳩はもう居りませぬ、お庭には主のない籠ばかり淋しう殘つて居ります、…。もう書く元氣もございませぬから、これて筆を擱きませう、何卒御壯健にお暮しなされて夏休にはお歸り遊ばせ、しかしもう鳩は居りませぬ。

（外選）　岡山　立岡房野

（評）此の可憐なる手紙を見ては、誰樣もお叱りはなさりますまい。

○嫁入する妹の許に

京都花園學院　平林君英

一筆示し上らせ候偖此の頃の御母上樣の御消息によれば、そもじ此度緣ありて他家へ嫁ぎ玉ふ由、目出度さ此上なく存じ參らせ候、もとより人並の敎へを受け、物の道理も辨へ居玉ふ事に候へば、今更めかしく言ふべきにもあらねど、世の人に笑れぬ樣、よきが上にもよかれかしと、姉が眞心よりいさゝか書き送り申候、必ずおろそかには見玉ふ可らず候。



一、女は操正しからねばならぬものに候へば、假令うちうちの程とはいへ、吾が夫ならぬ人とは決して打解たる物語りなどし玉ふ可らず候。

二、姑と言ふ字昔より嫁惡しなどいひて、とかく聞き惡き事多く候へども、天より與へられし母上と思召され、少しも恨みがましき素振あるまじく候。

三、夫に仕ふるにはいと物柔かに、外の心いさゝかもあるべからず候、

四、人中に立ち交る事候はゞ、見おとされぬ樣御謹みあり度候、

五、凡て物事に慈悲の心深く、召使ふ者などは優しくもてなし、疎忽の事など有り候はゞ、人なき所にて穩かに誡め玉ふべく候。

六、日頃の心ばせは誰やらの句に「氣に入らぬ風もあらうに柳かな」と詠みし如く、おもては只物やはらかにして、人の心を汲み取り、內は黑金よりも堅く、「貞女兩夫に見えず」の誡めを常に忘れず舅姑夫の心を失はざれば、祈らず共自ら神佛の御冥護ありて、常盤の松の色かへ

ず、まさきのかつら長く榮ゆべく候。
以上の六個條は固く御守り下され度ひとへに希上候、先はめでたくかしこ。

(評) 諄々として説くところ、正に是れ嫁入前の海老茶式部が頂門の一針。

○餅を贈るとて(姉様の許に)

三河西加茂郡石ヶ瀬村　澤田つま子

牡丹の餅とは申し侍らじ、たゞ秋さびし籬のもとに美しう綻びつる萩の餅とこそ。

さあれ妾が馴れぬ手ずさびに、鶯粉の彩も惡しうは侍れど、芋も堀りに、米も砥ぎにと、朝よりのなほざりならぬ心づくしを、空しうせんもいと惜しきまゝ、わざと蒔繪の重箱の小さきを選みて、お使役なる美代ちやんの年の數ほど贈り參らするになん、例のお口惡にて、海老茶式部の家庭料理などとお笑ひ遊ばされんには、今宵の御詩會には夢にも參ずまじく、たゞ大人しう受け納めたまはんが何よりの功德にて侍り、かしこ。

(評) 可憐なる雅致。

○戰地の兄上に出產を知らする文

川越　山田松子

兄樣此の頃は大そうお寒くなりました事ね、家に居て火鉢に倚り掛つて居てさへ寒いのですもの、御地はさぞお寒い事でせうとお察し申ます、かういふ寒さに何のおかはりもなく日頃のお言葉通り、御國の御爲につくして入らしつて、さぞ兄樣御滿足でせう、それはさうと兄樣お悅び遊ばせ、昨夜姉樣は安產なすつてよ、而も男の子で、それは〳〵肥え太つて愛らしい、まるで兄樣そつくりです、それでお二人共丈夫ですから御安神遊ばせ、お宮參りの時には寫眞を取つて兄樣に御送り申しませう、それまでお待ち下さい、ほんとに昨夜はみんな大よろこびで、妹などは生れたばかりだのに抱きたがつて仕方がありませんでした、オヤもう九時になります、學校の都合もありますから、兄樣、これでお別れ致しませう、それではお宮參りをお樂しみに。

(評) 戰地におはす兄君は、如何にお宮參りの日を指折りかぞへて待ちわび給ふらん。

○良人と共に海外に去らんとする友に

神戸稅關官舍　勝田かつ子

學びの庭を出でし後は、放れ放れの旅の鳥、一つ枝にさへとまり合ふ事もなくて、心ならずも御無沙汰に打

すぎ申候に、圖らずもけふの御手紙拜見致し、讀まぬ先より早や胸ときめき申し候。堅く結ひてし友垣の中にも、わけて親しう交りしなつかしの君の、あはれ遠く海外に去り給ふとの御事、あゝ今別れなばいつか又相會ふ時の來り申すべき、二拾年三拾年、さては白髮交りの老人となりて後なるべきか、歸らぬ事ながら昔思へは今更に慕はしうおぼえ候。

小袖かさして花受けて
かすむ遠野を見渡せば……

と、たそがれの空見上げつゝ、校舍の窓に身をなげかけ、二人して合唱せし歌の聲は、いまだに耳に殘れる心地せられ、なつかしの涙とめ度もなう流れいて申候。さは申せ、御良人様には獨逸公使舘御在勤の外交官とか、外交官の夫人と申せば交際塲裡の花ともはやさるゝもの、あはれ伯林の上流社會に、薫り床しき大和撫子の咲き匂ふと聞かば、昔の我友小倉十九子の君と思ひ申すへく候。此繪は二人が未だ學の窓にいそしみ居りし頃、廻らぬ繪筆とりいて、共にゑがきし山水畫にて候。松靑を林中に見ゆる白き家こそ、二人が互に手とり交して、五年の間一つ机に物學び、同じ硯に筆そめ申しし校舍にて候へ。住み馴し故鄕はなれて數百里、見知らぬ異鄕に去り給ふ御身の、時々の思ひ出のよすがにもならんかと、古き手文庫の内より取り出して差上申候。御別に際して、申し上度ことゝりどりなれど、心亂れて筆にぶり、思ひの半だに得書かず、餘の事どもは此繪に御尋ね下され度候。

（評）穩健。

○花見に友を

大阪醫學校病院内　竹内秋子

世の中にたえて櫻の無かりせば春の心は長閑ならましとよみ給ひしぞ、げに春の心をつくしたる、うらうらとのどけき空にたなびける霞の奥の床しくも、吹き來る風に誘はるゝ心地ぞせらるゝ、嵐には散りやすき花なるを、などて空しく明日をば待たるべき、花下の旅寢は今日よりとこそ思ひ立ち侍りつれ、君にも如何で家居にのみこもり給ふべきかは、

（評）簡潔。

○歌留多會催すとて友の許へ

岩代須賀川町　根本松江

兄の凱旋祝ひを兼ねて、來る五日夕方より、歌留多會催し度、會塲は例の離れをと選び候處、南窓の白梅も

心ありてか、愛らしき蕾の、數ふる程見え候を、來ん日の喜びの程押はかられてこよなう嬉しく存じ候。扨集ひ給ふ君逹は、いつれも長き年月を、荒れに荒れたる滿洲の野にて御腕を練え上げられたる一騎當千の荒武者のみに候へば、常に旗頭と稱へらるゝ御許樣にも一入兜の緒を引きしめ給ひて、御出陣の程願しう存じ候。他事と聞き給はゞ明日よりは絕交にて候ぞ。其他遠征土産の數々も之有り候とか申候へば、御弟妹樣も御連れ遊ばされ、是非〳〵御越し給はり度、殊に床の飾りを四君子と定め候ものを、外ならぬ御許樣、池の坊の御力添へに預り度伏して願ひ上候。尤も此度に限り。氣取り給ふ君方には、勝敗を問はず墨ぬりの刑に處すとの事に候へば。お門違ひと知りつゝも御注意迄に申添へ候。

(評) 洗鍊愛すべし。特に結末の一節、荒武者の無邪氣なる狀を描き出して妙。

○都の友に

山形縣西田川郡都珠闘大字大岩川　佐藤政枝

冴えに冴えし上弦のこの月、寄宿舍の窓より眺め給ふてか、妾は浪の音をきゝながら、破れし妻戶のすきまより、都の方を仰ぎ居り候よ。思へば、「木がくれ橋」のほとりに、惜しき袂をしぼり候ひしより、はや三とせ、げに早き月日には候はずや、今は業終へて、歸り來まさん日も、近うなり候よ、さるにても、いかに都姿の、美しうなり給ひつらん、ふと歸り給はゞ、見ちがへや申すべき、流行のお髮、海老茶のお袴に、お靴めしてか、お袖も長うおはさん、はやく歸り給ひてよ、珍しき都のお話のみならで、新しきくさぐさの事どもかけたまはらんに。其折よ、何はなくとも、兄が培ひし野菜の手料理、新しきをとりえに、田舍加減のいとしほからきを、第一のおもてなしとして、第二には、姪の「ふみ」、色黑く小犬の如くにふとりしを、御紹介申すべく、第三には、「ポチの子供、三匹のうち、二匹は他につかはし、一匹浪と名づけ候が、愛らしう「ふみ」ほどに育ち候を御目にかけ申すべく候、早く歸り給ひてよ、妾は每日母より笑はるゝまでに、指折りかぞへて、待ちまゐらせ候、かしこ。

(評) 味珍しき鄙の少女の稚氣と、平和なる田園生活と、兩つながら眼前に髣髴たり。

○都のひとに

福島　高澤愁子

いたつきの苦しみ堪へ難く、青春の希望を捨てゝ母校を去りし時は、流

石に腕の高潮も亂れ狂ひ候へしが、田舍に入りて、名なし小草を朝夕の友と致ししより、何となく奥山里も趣味深く、昔は忌みきらひし翁さへ、今は雪月花を語る唯一の友と相成申候。昨日も正造と申す村の正直翁にに連れられて、今年七歳になる弟と共に、東の松林に炭燒く樣を探り申候ひき。草も木も枯れ果てゝ、空さへ廣き村里の、このもかのもより立登る細き煙の景色などは、とても都の人など夢にも見得ざる詩趣にて御座候。殊に浮世の苦みなどは、夢にも知らぬ少女等が鄙唄に興じて、炭を燒き木を樵るさまなどは、とても此世の樂みとは覺え申さず候。

花のお江戸で苦勢するよりも
姿しや田舍で炭を燒く

とは、彼等の樂天觀を唄へるものにて、聞く度毎にいつも乍ら神々しき念に打たれ居り申候。

かくまでに靜かなる樂しき月日を送り乍らも、猶忘れんとして忘れ兼ぬるは、厭はしき都に住み給ふ懐かしき御許樣にて候。

未練がましくは候へ共、むかし都に咲き亂れし白菫は、今は蝶さへ訪はぬ奥山里に、あはれさびしくも、咲き亂るとこそ御承知被下度候。

（選外）　神戸市　木内しげ子



○初春の樣を故郷の友へ知らす

赤坂　森ふさ子

都大路はいつしか門松もとれ、羽根の音も田舍の春を追ひ行き、最早聞えず相成、世は早咲きの梅の頭に候な。如何御暮し遊ばされ候や、定めし春着の御新調に忙しく過し給はん、さて御地には是より來るべき初春の御ことぶきも此方は早や祝ひ納めて、面白かりし事は未だ忘れ候はぬまゝに、あらましを聞え申さん、一夜あけたる元日の朝思はぬ寢坊に驚き、急ぎ仕度して登校致せば、早や初めの君ヶ代すみ候時にて、先づ第一の新しき理想は悉くはづれ、一年の事は元日にありとか申せば、如何致さんと歸りて話し候處、皆に笑はれ申候、二日は年賀狀など認め、此日はたゞ年始まはりに一日を過し、三日、五時半に起き出で候へばかしこにてしひられ候には閉口致し候、まことはとく友の家にかるた取りに參り度ために候、可笑さしのびて食事後早々出かけ候へば、道すがら醉人に言葉懸けられ、驚きて友の家にかけ込み、又もや大笑ひの種と相成候、此日はさん〴〵に敗北致し候、さりながら好む道とてなか〳〵面白く、下髮の根ぬけ候も知らず候ひき、おゝ今報じ候は十二時、殘念ながら殘り四日は後の雁にたくして申上べく候、かしこ。

○梅見誘引を辭する文

紀伊　米田時子

梅が香もたゞならぬ御ふでのにほひ、はしたなきわれわれをも、御こゝろの末にてもすてさせ給はざるのみか、うれしき消息うぐひすの初音にもまさりて、いと嬉しう承りはべりぬ、御おほせのこと、そこの山里、かしこのかきねに、今を春べと香ひいではべらむを、おもひいでゝはよろづのことさしおきて、御ずゐじんのかずにも加はりたきは山々にはべれど、昨日よりわらはやみにてこゝろすぐれず、ふしどにのみこもりがちにてはべり、御好意をむなしくせんは、いと本意なきことに侍れど、さむさまだ去りやらぬきのふけふ、心ばかりはとびたてど、身のいたづきにたちがたく、たゞひとひらの香もなきふでのしづくもて、れもごろなる御心を謝しはべるのみ、

梅が香を袖にうつしてかへりこば
うぐひすのみかわれもとはなむ

わがはしたなきを哀れとおぼし召し、御かへり早々東風ふくかぜのたよりにおしらせの程をまちなりはべり、かしこ。

廣津柳浪先生選

短篇小說

天

○若き人

加賀國鶴來小學校　舟岡やま子

『○青年の模範。直村春雄氏は加賀河北郡山蔭村の人なり、家は代々農を業として、傍ら漁りを營み、一家四人―母と氏の弟と父と―細き煙を立て居たりしが、春雄氏は、十六歲の時、生來の冒險的氣性より且は、一家のたづきをも助けんと、北海道通ひの汽船加能丸に乘りくみぬ。二十歲の春、心に深く决する所あり。遂に、單身米國に赴き、ある農園に入りて、つとむること三年、深く雇主の信用を蒙りしが、その間に得たる貨銀を以て、獨力葡萄園を經營し、深き造詣と、撓まぬ忍耐とは、幾多の失敗に打勝ちて、現今は北米有數の葡萄園主として、知らるゝに至れり。



こたび氏、老母の病氣に際し、遠く波を渡つて歸朝せらる。追つて氏が、奮鬪的生活の詳細は、面接の機を得て後號に掲ぐべし。あゝ四十年の昔、天下の豪商錢屋五兵衞を出したる河北の地、今またこゝに、若き紀の國屋を出したり。』

＊＊＊＊＊＊＊

十月二十九日の『加能新聞』に、この記事を見た妾は、直村春雄……直村……何やら聞いた事のある樣な名なので……ふと、思ひついて、急ぎ古い

日記を調べて見ました。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

明治三十一年四月七日、晴、

お父つさんのお役所が金澤にかはつたので、私は、おつ母さんと、かつみと、三人で、今朝、一番の下りで大阪を出ました。米原で、汽車をのりかへた時、三等がせまいからといふて、病氣の爲でせう、口も手足も充分きけないおぢいさんと、わかい人とが私らのをる二等にこられました。若い人は、おぢいさんの孫でせう、丁ねいに、おせわをして、をられました。おぢいさんは、敦賀でおりましたが、車をやとふやら、荷物をもつやら、それは〳〵おせわをしてゐられました。敦賀をでゝから、おつかさんは、その若い人に、あの方は、あなたのおぢいさんですかと問はれたら、いゑ、何も知らぬ人ですといはれました。私は、おどろきました。何といふ親切な人でせう、私はよほど感心しました。この若い人の行末は、まことに賴母しいと思ひました。その時、この人の持つて居たカバンに直村春雄といふ名刺をつけてありました。多分、若い人の名でせう。

若い人は、福井で、私らの室をでゝゆかれました。

私らは、この立派な行爲のことを話しつゝ金澤につきました。

直村春雄！恐らくば、妾が生涯に忘れ得ぬ一人でせう。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

汽車の中などで人の名刺に氣をつけることなどは能くあることで、わざとらしくない。それが仙日成功して新聞に現はれると云ふ偶然なやうで偶然でない物語、作者は新聞の記事と、昔の日記文とを對照して、之を一篇の着實なる小說に仕立上げた。文に花あるとにはあられど、趣考にかけはなれて、變つて居る點でも、優に他の群を拔いて居る。（選者評）

(地)

○餘光

三重縣三重郡西坂部一三三　山本富士子

一

「お祖母樣、雪が散らついて來てよ！」「何程ふつて來つて厭ふては居られぬ。御天子樣を拜むのだから」。冬枯時の寒天をも搆はで、一里の道を遠しとせず、陛下の御通輦を拜せんと、曾孫の手に扶けられつゝ、杖を力に出掛けたる老嫗は、本年百七歲の高齡者で然も尙壯健なる、悅女としいへば、千早振る伊勢の神都に

珍らしき話の種として數へらるゝのである。

悦女の家は、舊津藩の小臣であつたが、文政の末火災に遇ふてより頗る零落を極め、次いで其の夫なる先々代が、三人の兒を遺して死せる等、一頃小栗の家は行燈蹴破つた樣だと、世間より言はれた位であつたが明滅の裡に。武士氣質の彼女は、能く貞操を守つて專ら幼兒の訓育に努めし甲斐あつて、追々子の生長すると共に幾分の身代を起し、今は既に孫の代となつて居る。其孫は、數年前該地に任せられたる、名望の聞え高き農學校の校長で、目下では家產を的にせず共、不自由なく暮せる迄に成り、媼も亦昔に變つて氣樂な餘世をこゝに送つて居るのである。

御通路一帶の拜觀者は、既に人波を打つて犇き合ふて居る。漸く其群に投じたる媼は、多くの人から尊敬を拂はれ、伴へる小兒と共に最も前列に進むとを得た。

「あゝ難有いこれて能く拜める。昔は天子樣を拜むと眼が潰れると云つたが、今代は斯して直々に拜むとが出來るとは實に難有とぢや」と媼は獨言の樣に喜べば腰に纒へる五郎は「潰れるて何、如何して潰れるの」。

待つ間程なく、騎馬の先驅に次いて、大纛は轔轆として響いた。媼は恭しく龍顏を拜し奉つたのである。

二

此度行幸に際し、八十歲以上の當地の者に恩賜の御沙汰あるとて、今朝司廳に召されて、侍從官より畏き思召と下賜の料とを傳へられた。悦女は高齡の筆頭として金千匹を拜受し、感涙に咽んで家に復つたのである。

小栗の家は之に過ぎたる光榮なく、此機を幸に近鄕に住へる一族の者を呼集めて、今夜祖母の爲に聊か祝宴を催した。七十五歲になる媼の末女より五十一歲の初孫を始とし、其枝葉から咲分ける曾孫玄孫の末に到る迄會せる者三十七名、漏れたるは滿洲に在る中尉の弟孫耳。さあれ童顏鶴髮の媼は、黑小袖に錦の帶凜々しく、最と嬉し氣に自ら起つて酒飯の勞を助るのである。

「私は明治五年の行幸の時に恩賜を頂き、今度も亦重ね〱賜いた。長命をして居ると種々な未曾有事に遇はして貰ふ。それに斯して一族の者が寄集つて無事な而を見せて呉れるとは、斯樣な歡しい事は無い」と打笑めば、千代といふ七歲になる玄孫「お曾母樣は何年迄生きて居らしやるの」と問ふ。「此媼はねお前が成人なつて、お嫁に行つて而して赤兒を抱く樣になる迄生きて居ますよホヽヽヽ」と歡聲湧くが如く、流石に身肉の一座は、和氣靄々として興盡るの時がない。

稍あつて嫗は、俄に床に奉れる御眞影の側に立ち、一座に向つて恰も將軍が令を下す如く「私は今此處で天子樣の萬歲を唱へるから皆付いてお呉れ」と、言へば、雜然と一度に手を揚げて總立、嫗は謹んで皺枯れたる聲を張上げ、

「天皇陛下萬歲ッ!!!」。

聲に應ずるそれ「天皇陛下萬歲!!!」と破るゝ計りに三唱。

* * * * * *

平和克復の年も暮れて、明くる元旦の各新聞紙は一齊に、百八歲に達せし悦女の半世を掲げて、其歷史に伴ふあらゆる美德を賞贊した。

或は之れ小說として第一流のものでないかも知れぬが、文字の嚴格にして犯すべからざる、能く其事柄の健實なるに伴ふ。選者も亦新年に之を選拔するを光榮に思ふ、めでたしく（選者評）

人

○雪模樣

京都四障紋屋町　濱部郭公女

（選外）　大阪市　吉村これ子



「コレお時、今日はどうあつても連れて歸るモー此の父樣が承知出來ん、武雄の畜生ッ彼樣な可愛い子迄出來て居ながら、今の身持は何だ、毎日く內を外の不仕末酒ばかん呑んで女房子が饑死んでも何とも無いのかッ…隣の平作を見い朝は早くから夜遲く迄町へ出て働いて歸には小供に菓子の一つも買つてやり女房には着物の一枚も新調へてやり…俺はそれを見るにつけお前が可憐でならん、お前は何時も辛棒するくと謂ふが、お時辛棒も切がある斯樣な放蕩繪師だ何處迄操を立て居ても駄目だ、お前が其麼だと俺はいつ迄も安心が出來ん、お時今日は是が非でも歸れ」

惣八の煙管持た手は非常く慄えて居る、お時はスヤくと睡つて居る坊やを抱いて居つたが何に驚いたか坊やは泣き出した、お時は乳を與へ靜かに叩きながら

「お父樣幼少さい時から今に成るまで數々の御心配をかけ不孝の罪何とも申わけが御座いませんが…斯樣に成つたのも私の運命と思召して…元々私が望んで

嫁りました此家、夫の身持ちの惡いのも私の竭し樣が不足ないので御座います、私はどんな苦しい思をしても辛棒致します、私さへ今暫らく辛棒すれば、いつかは運が開いて御安心おさせ申す時が來るで御座いましよう、お父樣萬望今暫らく……」とお時は賴む樣に惣八を見上げた

「お時未だお前は其麼に夫を思つて居るのか。」と惣八は握つた手で泪を拭いて

「俺は尙更其樣な優しいお前を見す〴〵苦勞さすのが可憐でならん、ノーお時古から貞女二夫に見えずと云ふが、あんな武雄の樣な心の腐つた奴は末の見込みが無い婆も今日はどう有つても連れて戾つて吳れと八釜敷謂はれて來た、サーお時何も心配する事はない俺が惡い樣にはしないからノー」と惣八はお時の手を取つて立ちかける、お時は兩眼から滂沱と熱い泪を流して惣八の袖を扣え

「お父樣……信實に濟みません……が是ばかりは……」と泣き伏した

「お父樣……萬望私をモー無い者と思召して……お母樣にも切望そう仰有つて下さいませ不孝の罪はおわびの仕樣が御座いませんが此の時は……時は此の家で終りますと……」

惣八は立ちかけて居つた腰をおろし兩眼を閉ぢて凝乎として居つたが暫らくして

「お時、俺はモー何にも謂はん……何にも謂はん」惣八の兩眼から熱淚が頰を傳つて居る、軈て惣八は立つて

「じや俺はモー歸る」

「モーお歸りで……」お時は心の內でお好きなお酒でも差し上げたいが今の身分と泪を拭きながら急いで父の草鞋を手早く直して外まで見送つたが空は一面曇つて早や雪がチラリ〳〵と降つて居る

惣八は着物の裾をからげ

「オヽ雪が降つて來たわい、どれ婆もさぞ心配して居るだらう烈くならん間に……じやお時身躰を大事にな」

「ハイ、有難う存じます貴方こそお大事に」と見合はす顏と顏、惣八は足を運びかけたが振り戾つて坊の顏を覗き

「可愛い顏をして熟睡つてるわイ、何にも知らないでノーハヽヽヽ」

お時は父の影が二本松の處で隱れた後もまだ見送つて居つたが雪は卍巴と烈しく降り出した。

趣向には少しも新しい處は無い、只だ筆は能くかかれて居る、二三度投書したことくらゐでは迚も此境には進まれない、想ふに作者は毎に小説を愛する人で、且書く方にも多少の經驗を持つて居るであらう（選者評）

秀逸

○去年今年　北海道　白菊子

上　去年の今日

「よ、お姉樣何卒もう一度お父樣に御願して頂戴な、彼の一緒に卒業した國子さんなんかもう今年は四年生よ妾計り此樣して……」身を刺す樣な寒い々々北風は遠慮も無くヒユウ〱と此憐な姉妹の襤褸の衣を吹卷のである、姉妹は頻と四邊の景氣を打案じつゝ、花の樣な唇を紫色に慄せて姉は片手を釣瓶に寄て「夫はもうお父樣だつてお前に少でも高等の學問をさせ度とのお心は一ぱいで居在けれど文さんも知てる通、一夏と云ものは雨の日風の日は愚手足も燒相な炎天の時でも厭ず働ても百性ッて憐な者、秋に收穫が有たとて何程か、中々一年の生計も六ヶ敷處今年は又近年に無い大不作……夫に今文さんの學資をと如何して、御願が出來ませう？……比樣な草小舍に起臥て居在てもお前を七八年間小學を卒へさして下ッた今迄のお父樣の御苦勞は甚麼で有たか、エ、其麼に泣無で能く考て御覧なさい……よ文さん……」黃昏の空に聳る桔槹は除々と動出と塒に急ぐ夕烏心有氣にカア〱と姉妹の上を促て西へ〱と。脫た手織縞の筒袖で漸く目を擦々木の葉の舞ひ行く方を瞶て居た文子は思ひ出た樣に「お姉樣じや妾あの……校費生とかには……」後尾は聞無が妹の熱心な歎願には姉も少し驚たらしく暫時云ひ淀で居ると、折しも突如小舍の角から現たのは竹切を肩に擔た十歲に滿ぬ腕白者!!「姉さん!!又何だか密話してるね母樣に言付るよ」



（選外）　熊本　財津てつ子

「マア猛さん意地惡だね、ア、今日お清書したッてね姉さんに見て頂戴よ」「ウン今日僕一番だつた甲の上だもの姉さん見せるから速く歸ふ……僕先だ……ス、メーオイー、トツテトツテトー……」折角落付たらしい軒の村雀、腕白大將の竹鐵砲に驚されて又チウ〱〱。

下　今年の今日

照る月は玉の宮居も虫の住家も同事、今しも穴の如な小舍の破窓の隙から差入る月の光に透て美い表紙の本を破る計に引張り合て嬉相に見居る姉妹「アラ文さんお目出度う……ソラ此處に……出て居ますよ」叙事文秀逸の第一位は、田園生活……小片文子の占る處となつた、周章しく又二三……七八頁繙て抒情文の部妹は速も見付て「お姉樣よ……よ地賞に!!」活字は大う、眞の樂園……小片浪子……幾度繰返見ても相違無い。美しい頰をさつと紅に染た姉妹は思はず抱き合ふた。

* * * * * * *

如何にも親姉弟の此の狀躰を見は己一人高き理想を夢て學問に入には忍無と悟た文子は一夜失望に泣き腫た目に只一の光明を見止たので……終日姉と共に田に畑に鋤を取り嬉敷一日の勞を果て歸や箒の如き筆を執ば世の中の富も譽も苦も皆打忘れて……。

之も一種の理想には相違ないが、事實としても床しい、それは兎に角此篇の文章輕快にして殊に「上」の姉妹の問答に於て、能く作者の面目が現はれて居る（選者評）

○書生

駿河藤枝　若栞

庭の芭蕉の淋しく戰ぐ音さえて夜も大分更けた

「先生はまだお歸邸がないんだなあ、奧樣があんなにお不快のに。」

濃い眉を八字に寄せて讀みさしの書を閉づると其儘、斯う呟いたのは書生の關である。主人の和夫氏は先頃から旅行に出て跡は年若い夫人と召使ばかり、實は昨日あたり歸らるゝかと思て心待に邸の掃除など爲たのだが、未だにお歸邸がない、夫人は持病のヒステリーが急に募つて、昨日今日の癇の强さ、夜も落々眠られない、夫を又召使どもは何でもない樣に思て居るのだが、忠實な關は獨り心を痛めて居るのだ、

「困つたものだな。」

チヨッと舌打して立止らうとした時、チヨキチヨキと拍子木の音して夜廻が來た

「遲い、寢よう。」

忙しく其處ら片付けて、戶棚推明け冷たい夜具を引出す、途端、障子の外で何やら人の動靜がした。ハテと首を突出して、ほの暗い廊下を透せば、思ひ懸もない其處に夫人が矗平と立て居る。

關は悸とした

「アノお前まだ起てたの」

癇走つた聲で言ひながら室へ這入來た夫人、見れば蒼さめた顏に物凄く後れ毛が亂れて、八丈の寢着の裾もしどゝ、肉色縮緬の扱帶が解けかゝつて居る

「私ね、今恐い夢を見てね、氣味が惡くつて氣味が惡くつて、關、後生だから、一寸私の室へ來ておくれ。」

「は、夫は何ですが、由はお次室に居りませんか。」

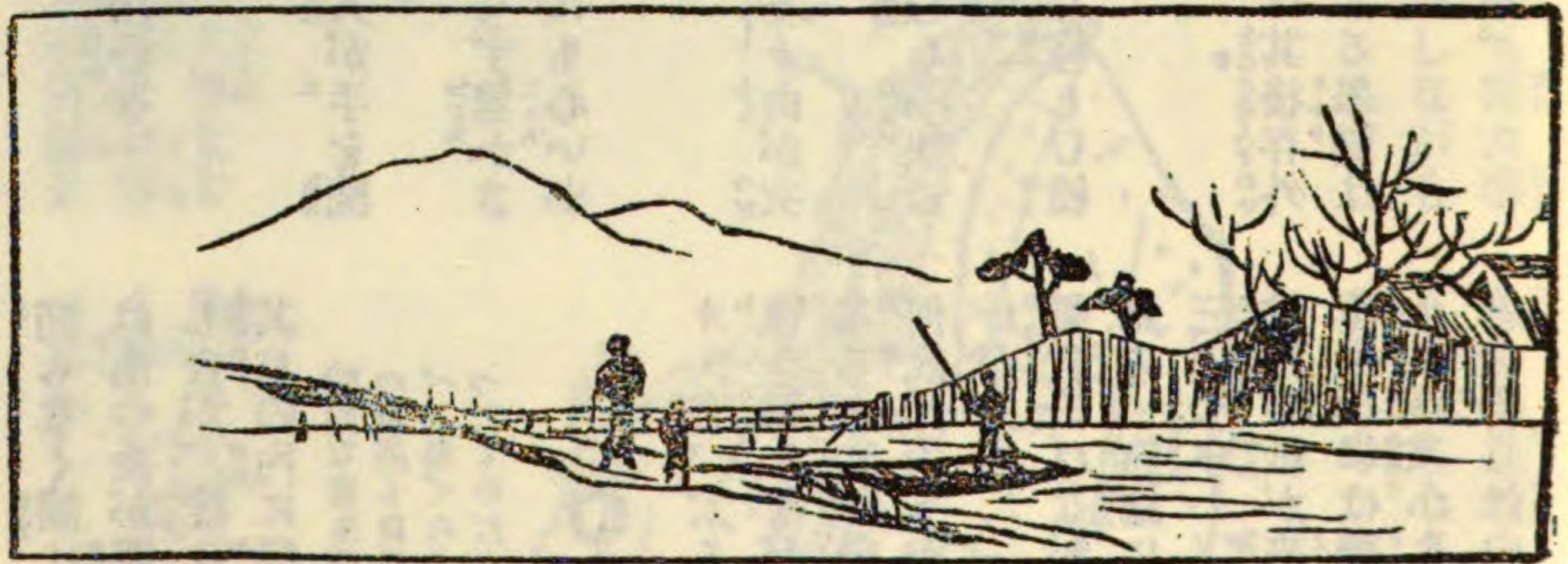
「イーエ、由は駄目なの、から卑怯なんだからね、好かへ。」

先へ立て忽々と廊下を辿るに否もならず、如何したものかと考へながら從て行く。

「關、まあ御覽な、由の云つた通りさ、和夫は此樣なに藝者狂ひして居るんだよ、エー悔しい、此女め人の夫を奪といて、其上今私の喉を締めに來てさ」

枕先に散ばつてる女の寫眞の中から、半身の一枚を取上て夫人はびりびりつと裂て捨てた

（選外）　京都　濱部愛子



「まア、奥樣冷えます、兎に角お横に、さ、さ、」

身内の怒りか夜寒の故か、顫々と身を振はした痛ましさに、關は思はず夜具引たてた。

「お前其處に居ておくれよ、行ては不可よ、よ、關。」

今の夜具に聊か胸が透たか、夫人は云ふ儘に横たはつて恍惚と目を閉ぢた。

關は熟と腕を組だ、仲働の由め、餘分な事を言て了つて、さなきだに神經の興奮して居る處へ……、困つたものだ。

先生は其樣な事はないと云て宥めようか、否今逆らつては却て宜しくあるまい、氣の鎮まつた時に寛りと申上よう。

夫にしても由を起さてはと立かけると

「アレ、行ては不可よ、イーエ由は嫌よ。居ておくれ關」

むくむくと起直るに困じて、關は慌てゝ座つて夜具をかけた。

二度めの夜廻りが來て、中坪を檢て行た

か便處の傍へ行くと急に立戻つて
「お由どん、小窓が開てるぢやないか、不用心な」
と極つけた。關は
「ウム不用心な」
とつかつか立て行て、ぴしやりと閉た、夫人が手を洗つて忘れたらしい、桃色の手巾が落て居た。
思はぬ關が出て來たので、夜廻りは少なからず驚かされて小時立竦んだ儘考へて居たが、關は何にも心いかぬ、夫人の室の前迄來ると
「オヤ關さん、如何したの」
今の物音でさめたのか、眠そうな目を擦り〻〻由が次の間からひよつこり首を出した。
「お由どん、困るぢやないか、奥樣はよつ程お不快のに寢入ちまつて、確り氣をつけ玉へ」
由は夫には返事もせずに、まじまじと何やら怪しむ樣に關の顔を見詰た。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

翌々日漸く主人は歸邸られた、夫人の神經は其後存外鎮まつて變つた事はなかつたが、良人に對する擧動は著しく冷淡に成て了つた。
關は心付ぬか臺處では怪しからぬ噂が起つた。
間もなく關は解雇を申渡された、勿論穏かな口實ではあつたが關は首を拈つた、そして恐ろしく苦い顔をしたが、遂に一言の辯解も試みず、怱々と支度をして、其日の内に邸を退て了つた。

樸訥な書生の關も、ヒステリーの夫人も能くあらはれて居り、事件の發展も自然にして無理はない。少し間違ふと不快な感を起させるべき筋であるが、些も左樣な事のないのは上手である。又、關が『困つたものだナ』を繰返すのも、ぐどくなくてよい（選者評）

◎あらぬ戀　　東京　小林菊子

オ、寒、ぶる〱と身顫して消えかゝつた火鉢の中を搔き廻しながら、誠御歸りなすつてからモー二月にもなるのに、幾度御手紙差上げても、御返事がないのは何故だろうか、若か御病氣でもおあんなさるのではないか知ら
獨言云ひながら、氣遣しそうに俯て居るのは十八九の婦人。途端に後の唐紙を手荒く開けて這入て來た十二三の少年
姉樣手紙が來たよ、エーと東京小石川其先きは六ヶ敷くて僕には讀めない
エッ東京から手紙が來たッて早く頂戴な要さん、早くと云得られぬ嬉しさを、愛嬌ある口元に表はしながら

引奪る様に取上げて見たが、それは未見た事も聞た事もない、只澤野とした女からだつたので落膽しながら不審の眉を寄せて開封した

「寒さ殊の外きびしく候處御許様には御變もあらせ給はぬ由、蔭ながら嬉しく存じ上まゐらせ候、次に私事は豫々御存じの瀬川省次が妻の澤野と申す誠に不束者、以後宜しく御交際の程、願ひ上候、扨省次此春より長々御當地へ滯在中は、一方ならぬ御厚情に預り申候由、誠に有難く御禮申上候。ついては先達御許様より省次宛の御書面に接し、始めて委細の樣子承知致し候。私も餘意外の事とて大に驚き省次へも種々相尋ね申候へ共、一時心の迷より前後の分別もなく、道徳上の大罪ををかし御許様へ對して何とも申譯けなきとて近頃は食事もろくになさず恰度病人の樣に相成居候故夫の苦慮を

（選外）　下谷　太田樂子



見るに見兼一ツには御許様への申譯けに、一そ身を亡きものにして御兩人の御望叶へさせたく存じ居候へ共幸か不幸か目下懷姙中にて斯くては胎内の子を、暗から暗に迷するが何よりも不便にて、子に引かさる丶親の心何卒御推量被下御許しもなるまじけれど廣き〱み心以て、深き夫の罪は幾重にも御許し被下、何も彼も逢はぬ昔と思召し、愚か者ながら以後は姉妹の如く、何事も相談相手に成りつ成られつ睦しう致し度候が、御許様には御承知下されまじく候や、幸に私の胸中御推察下され切なる此願御聞き届け下さらば是に越したる喜びも御座なく候。御心の内は我身に引くらべよく御察し申上候へ共、何卒風靜なる夕、胸に手を置きて確と御思案の上委細の御返事下されたく待ち居りまゐらせ候、先は拙き水莖の跡をも顧ず、右御願ひ迄かして

澤野より

お浦樣

讀み終つたお浦の顏色は土色と化し、手も唇もわなわなと震えて居たが「私どーしよう」と暫は我にも有らず疊に打俯た儘泣き入るのであつた

＊　＊　＊　＊　＊

越えて翌年、お浦よりの返書が澤野の許に着た、聞ばお浦は急に日本の土地が嫌になつて恰度彼の折日本漫遊に來られた米國の貴夫人に隨從して、今は遠きカルホルニヤとかに居ると云ふ事と姉妹の誓約した印に、指環一個送附たから落手て呉れ、と一ッは出生兒の寫眞を送つて呉れと云ふ事であつたので澤野等夫婦は其郵便を抱いて一夜泣き明した。

縮むれば一本の手紙にもなるが、伸ばせば人情の波瀾曲折、大いなる小説ともなるべき材料、簡潔に寫し出てゝ人を感動させる點はなか〳〵深い、用意ある作と認む（選者評）

○みなし子　　鹿兒島　加治木　しら菊

かあちやん……

私はいつでもこんなに獨で居るときには小さな聲で人に聞えない樣にそつと、かあちやん！、といつて見るけれども、もしやお祖母さんでも聞いて居なさりやしないかとおもふと、何だかはづかしい樣で直に氣を變へて、蝶を追ふたり花をむしつたりして、まぎらせて居るんだけれども、母ちやんー、といふ言葉が口から出ると俄に血が頭に上つて來る樣で何ともいへない淋しい、悲しい、樣な氣がしてそこらに在る薇薔の花や紅葉の葉が二つに見えたり三つに見えたりして終ひには暖かい涙が草の上にポツリと落ちる事がある、そんな時に、祖母さんが母屋の方で美ちやんー、とお呼びなさる聲がすると、あたしは急いで袂で涙を拭いてハーイ、といふけれども其の聲はいつも振へちやー居ないかとおもふ。幼稚園で唱歌を歌ふ聲とはキッと違つて居るんだわ。

あゝ、あたしやなぜ母ちやんが無いんだろふか、お隣の君ちやんや、お向ふの花ちやんには、あんないーおつ母ちやんがあつて、太いリボンや、そいからあの大きな簪なんか買つて下すつて、そしていつもお父さんとお母さんにお手引いて戴いてお芝居だのお花見だのに一所に行つて……あたしやーお祖母さんはあるけれど……お父さんはお留守だしなぜ私の母ちやんは無いんだろふか、お祖母ちやんはいつもよく、いー母ちやんを貰つてやる〳〵とおいひなさるけれどもいつ

（選外）　島根　千代延藤枝

までも貰つちやあ下さらないわ。

あゝさう／＼此の間房姉さんと紅葉山へ行つた時に逢つた小母さん！、私あの小母さん好きだから母ちやんに貰つて下さるといゝんだけれど、何處の小母ちやんか知らん！、お祖母ちやんにいつて見ようか！、けれども名が知れないわ、お祖母ちやんは知つて居らつしやらないだろふか、あの小母ちやんはキッと私にリボンや簪を買つて下さるとおもふわ、あの時だつてあんなに可愛がつて下すつたんだもの……キッと可愛がつて下さるわ、ほんとに嬉しかつたあの時は…………あんなにいつて呉れる人はありやーしないわ、そして何だか見た事がある人の樣だ、夢かしら、いやそーじやーない何時か見た事があるんだろふよ、そしてなぜ、あの小母さんの名を私にや聞かせて下さらないんかしらん、こんど房姉さんが來たらキッと尋ねて見よう、いつて聞かさなきやあお祖母さんにいひ付けるつていつたら聞かせて下さるわ、そーだ／＼早く房姉さんが來ればいゝに、

そいであの小母さんは私の名をよつく知つて居らつしやるわ、なぜだらふか、だから矢つ張り見た事があるんだろふ、もー四年も經つけれど忘れられないいつて、お泣きなさつたわ……あの時は私も何だか悲しくつてこらへきれなかつたから泣いたんだ、かまわないわ房姉さんだつて泣いたんだもの……、



幼稚園でも見た事はなし、なぜ知つておいてなさるだろふか、おゝそーだ、大きくなつてすつかり違つたとおいひなさつたから、あたしの生れた時の事を知つていらつしやるんだろふ、そしたら私の母ちやんの事もキッと知つていらつしやる筈だ、あゝあの小母ちやんに聞けばよかつた、あの小母ちやん何處の小母ちやんかしらん、房姉さんに聞いて見てあたし近かつたら遊びに行くわ、そしてあたしの母ちやんの事をよつく聞いて來るわ。

筆は確かに能く伸びて居る、何處となく西洋の小說にありさうな書

きぶり、委曲、盡くして居るが、只、幼稚園に通ふ小兒の口吻として、今少し幼氣に書いた方が實際に近からう、素より寫實小說と云ふ譯もないから、理想的に描いても差支はないが、之では稍實感を缺く（選者評）

◎寒夜

小石川　奈美木翠子

「乃武ちやん、什麼したの？又虐められたのかい」

「……」

「ネエ乃武ちやん什麼したのヨ、泣いてゐちやあ分らないぢやありませんか、アラ其麼手で面を擦て、オホ眞黑ヨ」

「あたい最う明日から學校へ行かないや」

「又其麼事謂て困るのネ」

「だッて皆が色々な事謂ふんだもの……」又もしく／＼啜るのである

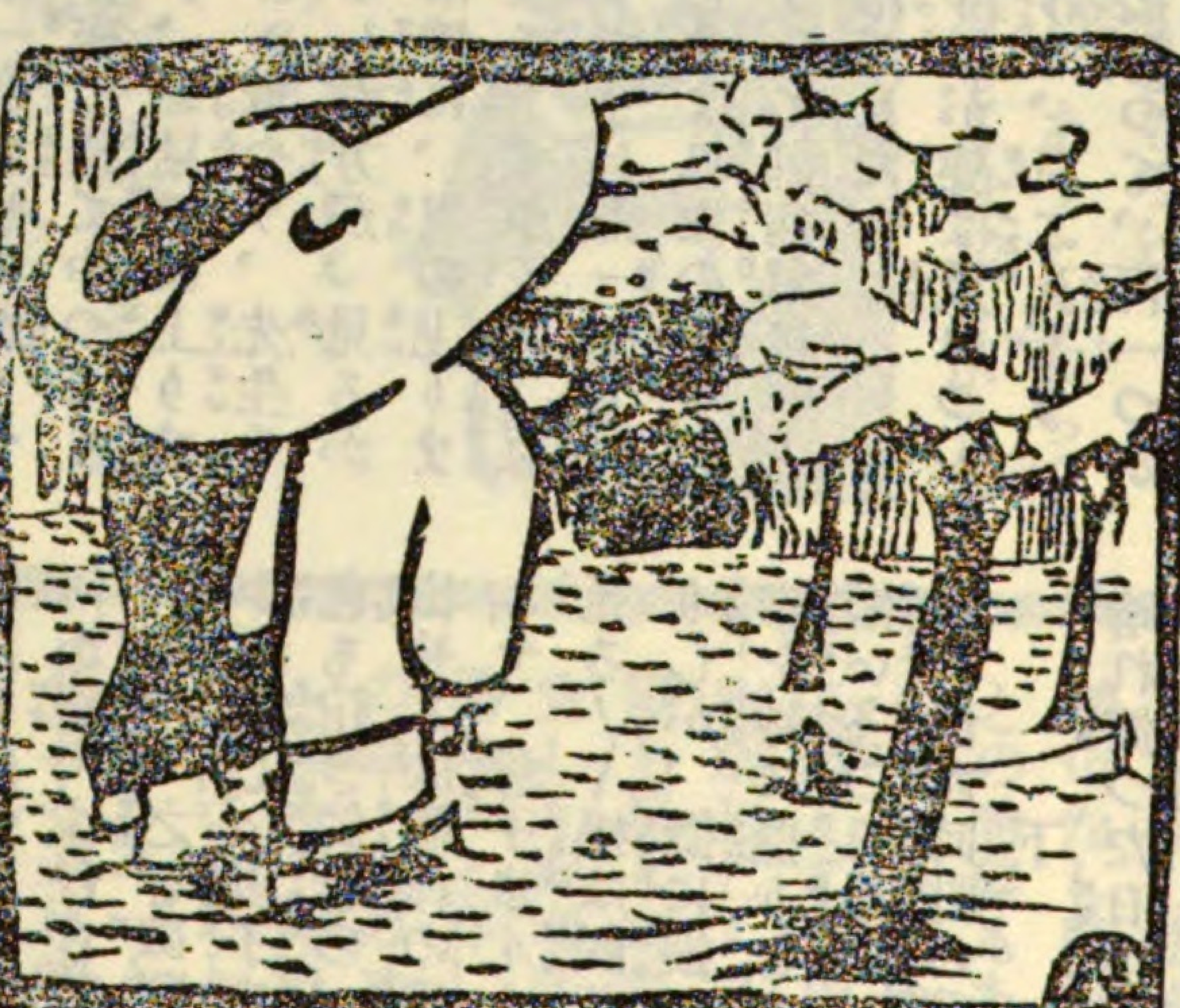
「乃武ちやん泣いちやいけなくッてヨ、恰度今好い具合にお父さんがお眠みの所なんだから」

見れば四疊半一間のむさくろしい座敷に薄い蒲團に包まつて父なる人は今すや／＼と眠てゐるのであるが血の氣更に失せて眼は窪み見から痛ましい病態である。殊に額に寄る幾筋の波は世と鬪つた名殘を留めて漫ろにその昔を偲はしむるのである。

彼が商法に身を入れてゐた頃は、かなり資產もあつて人にも知られてゐたのであるが一度相場に手を出したのが抑も身の破滅、一度は一度と目的外れ、切なる妻の諫も聞かばこそ果ては家を外に耽ッたが、迷ひの夢初めて覺めた時は已に遲く家財も大方人のものと成て仕舞たのである。て彼れは妻子を連れて霎時姿を隱してゐたが、此處に移轉る前妻は娘の八重子と弟の今年九才になる乃武雄に心を殘して永く此世を去つたのである。世が世ならば可憐の姉弟の、風にも當らず深窓の裡に起臥して日出さへも知らずにゐるものを、哀れ今日の境遇は何と云ふ淺間しいことであらふ。他所の娘達は身の嗜みに母親を强請る年輩を、その母には早く逝かれ、今は父さへ斯く迄病にやつれて、その日／＼の煙さへ立て兼ねる哀れさ……

勝氣にも八重子は此寒い今日此頃を朝は星を戴いて床を離れ、夜は人に遲れてまでも父の看病の暇々、他人の縫物に弟の學費までと働ぐのである。弟の乃武雄は亦世にも稀な親思ひ姉思ひて、學校に登く迄毎朝一廻り木枯吹き荒む大路小路を納豆賣に幼い聲を涸らすのである。今日も亦例の通り賣り歩いて學校に行ッたのであろふ

「皆が甚麼事謂ッたつて……姉さんが先生にそう謂て最う乃武ちゃんを虐めないようにして進げるよ」
「其麼事しないても好いョ、あたいもう明日から學校へ行かないから……」
「いけませんョ、學校休んで什麼するの……それぢやあ乃武ちゃん、明日から賣りに行くの丈けお止しなさい、チ、そうすれば賊かはれやしないんてせう」
「そうすれば好いんだけれど……納豆屋止してもお父さんの藥買へるかい」
「マア乃武ちゃん……」八重子はひしと弟を抱き倚せて見上げる乃武雄の面にハラ〳〵と熱い涙に注ぐのであるが、果ては得堪へず聲を震はし忍音にョヽと計り泣くのである。
吹き荒む風が破れ障子を漏れて身を切る樣、軒にサラ〳〵と音のするのは雲にでも成つたのてあらふか。
八重子ハット身を竦めて四邊を見廻したが、軈て自分



の着てゐる羽織を脱いてソット病人に掛け與へた。
この翌朝から哀れな納豊賣の聲が聞えなくなッたと云ふ事てある

(選外)　兵庫　常深花子

例の順序流るゝが如くてあるが、短篇の割に多く說明に傾き過ぎたのが、本篇の欠點てあらう。因に云ふ原作『姉と弟』と云ふ題てあったが取り替へた、此の如き題は幾度もあつて紛らはしい、餘り使はぬがよろしからう(選者評)

○かくれ沼

武藏　ほたる

上

『エ、雪子さんが御病氣』と計り、驚の眼見張しは、當時井オリンの名手として其名高き、青年樂家高木操、稍伏目に物悲し氣に相對すは、小波靜子とて、去年高等女學校を卒へてより、日毎高木の自宅に通ひて、井オリンの敎授を受くる介嬢である
『私も吃驚いたしましたの、未此間迄、毎日〳〵御一緒に先生の處へ上つたんてすもの、先々月急に思付た

樣に、私一先家へ歸る積よつて、川崎在の御生家へ歸られた後は、一向お便なし、何なすつたのかしらと思ひながら、遂深くもお尋しないで居りました處へ、お宅から、雪子が病氣で殆危篤、生前一度おめにかゝつて申上たい事があると云から、是非來て逢てやつてくれとのお手紙、取るものも取敢へず、お見舞に上りましたら、まあ眞に、見違へる計りのお窶やう、先生も御存じの通り、色艶の極よい、生々した方が、見るかげもなくお瘠になつて、夫でも氣は慥に、私の上りましたを、大層よろこんで「まあ能來て下すつてね、私迚も生てお目にはかゝれないと思つてました」つて、跡は言葉もなく、顏に袖をあてゝしまはれたのです、私も胸が一杯に成て「あなた、何うして御病氣に」と申たぎり、お見舞の言葉も出ませんでした』

語るまゝに當時を思ひ浮べけむ、靜子が聲は震ひつゝ

『其時雪子さんは、看護婦迄退けて、只二人ぎり「靜子さん、貴女とは異躰同心と迄誓つて、何一つかくした事は無つたのですが、私唯一つ、お恥かしい秘密があつたんです、何か水臭いと思はないで頂戴」といひ〳〵振へる手先に一包の書類を出しながら「私はもう何せ之で終る身、せめて貴方迄でも、此切ない心を打明たら、未來の思が無なるだらうと思ひまして、一切茲へ書て置ました、何か私が死だら見て下さい」つて、先生……』

湧出る追懷の胸に迫りては、いよゝ言葉も亂れつゝ、何か膝にはむら時雨、靜子は最後を語らむ勇氣もない

『先生、之を御覽下されば、凡お分になります筈、何か可憐しい雪子さんの心根を、憫で上て下さいまし』

色も佗き鈍色の、袱紗に包みし雪子が遺書に、添へて出せるは黑枠の端書

『ヤ、雪子さんはな亡なつたんですか』

見る〳〵操は顏色かはりつ、痛ましき迄悲痛の色の漲りしが、微に振ふ唇きとかみしめ、碎けよと斗り、拳を膝に握りしまゝ、化石せしが如く唯無言。

短い冬の日足の、いつか西に傾いて、薄暗い室の中、机に置た時計の音のみ、耳高くきゝ做れるのであつた。

下

晴れ渡つた日曜日の午後、靜子は亡親友を吊はむと、今し墓前にたつた。

『雪子さん貴女のすきな紅梅を持つてきてよ』

生ける人に物云ふ如く、靜子は墓標に呼いて、やをら花立に挿むとふと見れば、我より先に詣でし人のあり

と覺しく、而も雪子が生前太く好みし寒紅梅の、枝ぶり面白きに一の短冊ぞかけられたる

『おや』と一聲、靜子は急ぎ取上げ見れば

　吉野川そこひ知れねはわれもまた
　　音にはたてしとすきこしものを

問ても著き筆の跡、斯る優さ人の情、ありとも知らで紅の、色には出でじと愼しう、春をも待たで消え失せし、雪子が胸の慘しさを今更の如く思ひやりて、靜子は身も世もあらぬ心地。



『雪子さん、何故死て仕舞つたの』

靈あらば之見ませと斗り、靜子は墓前に頽折れて、術もあらねばよゝとのみ、憾の涙に咽ぶのてあつた。

（選外）　出雲　岩井じん子

秘密は雪子と共に葬られて了つた、之を讀者にも明らさまにしなかつた處は、甚だ好し。只、墓前に手向けられたる歌は其意を解するに苦しむ、今少し手向けた人の情緒切なるところを、あらはに歌つてほしかつた（選者評）

○寫眞を求む！

御遠慮深い諸孃に記者から折入つて無理なお願ひを申します、即ち諸孃の御寫眞を頂戴又は拜借いたし度い事で一般に諸孃の風姿に接したいとの希望もありますし讀者相互の親密を計る爲にもよろしいと思ひますので今回から御求めする事となりました最も從來懸賞當撰者の分は御寄贈を乞ふ事になつて居りましたが今回は其制限を廢し寄稿者は勿論ですが普通の愛讀者でも宜しく記者の求めを快諾せられる方の御寫眞を得たいと存じます、就いては大躰のお約束を左の通り定めました

▲寫眞は寄贈者の都合にて御望みに依り御返送申上げること▲御返送すべき寫眞は叮重に取扱ふこと▲一人の姿でも家族と御いつしよにても親友と共に撮影の分にてもかまはぬこと▲拜見の上、紙上に出すと否とは記者の選擇に御任せ下さること▲紙上には國名と姓名或は雅號のみにて發表すること

はがき文

編輯局選

特別第二賞

○新衣

三河　紫清女史

此春姉さんと私と樂みとして蠶を養ひ其のまゆより取た極くつや〱しい糸て私の新年の御召が機に立ました縞は母樣の御見立大へん美しくつて嬉しいので織て下さる姉樣にもう何寸何尺と聞くのてす

願はくば、たけの長からんとを

特別第三賞

○除夜

岩代國信夫郡瀬上町字本町　門間菊子

除夜なれば家内一同一つ火鉢に集まつて、物語りなどして居るうちに此度とつて七つになる妹に「あなたはどんな人になるの」と聞くと「姉ちやんの樣な人になるの」と言はれて妾は、增々勉強しようと思つた

此姉にして此妹あり

天

○磯の夕

神奈川縣鶴見五四一　佐久間芳子

沖はもうとつぷりと暮れ果て夕暗の空には星がちらちら、松原黒く砂白く、歸を急ぐ漁船の櫓の輾がきさつきつと、然し影は見えぬ、頭の上を物悲しげな渡鳥の聲こんな晩に戰死者の遺骨が港につくのだろう。

遺骨の一句あつて前の敍景悉く活く、所謂畫龍點睛の秘訣を知るもの

地

○氣の急がれる事

四谷區大番町八十三番地堀方　伊藤幸子

夕方豆腐屋のラッパを聞いた時、汽車の時間のせまる時、試驗表を渡される時、朝學校の御友達を誘つてもグッ〱して出て來ない時、試驗時間が切れる時、女子文壇を開く迄。

かくて人は一生を急ぐ

○買つて頂きたい物

豊後竹田町　甲斐かず子

波子さんの様な、レース編の、肩掛と新年用の絵端書と、和洋家庭料理法書と、琴と、新らしい机とランプのもすこし大きいのとが買つて頂きたい

さう一時には買へません

秀逸

○お父様の土産

秋田　須田ゆう子

満洲に、お在での、お父さんから近々凱旋するからお土産を待て、お出といふ手紙が逹いたので如何な珍品かと一日千秋の思ひで居ますと「此勳章は祖父様への土産、此身躰はお前がたへ」

「此身躰はお前がたへ」の一句、蓋し日本武士道の粋

選外　愛知　平野俊子



○歌留多會

八王子　某女

昨夜の歌留多會は、讀手が母樣、相變らず御上手なのが藤川の御孃樣、初から墨をつけられて毛生液の廣告つて兄樣に笑はれたのが妾。明晩は貴女も來て是非妾の仇をとつて頂戴

まつとしき聞かば……

○籾引

三河　田舍小女

モウ五時驚ひて起て見ると雨がしと〳〵降ているので、外の仕事は出來ず終日籾引、終てから兄樣とお父樣が、奈古と一本松の田だけで十六俵意外に澤山あつたとて心地よげに打笑まれた

雨に働くもの晴に働くもの

○朝起

磐城　相葉波子

尋常一學年修身の時間に朝起奬勵の談話中突然、「先生僕は今朝ね、昨夜のお月様が行き着かない内起きたんだよ」との愛らしき聲

人若し志を得ざれば小學敎師たれ

○姉の許へ　下谷　四川八代子

姉樣ソラあのお庭の葡萄棚の下で、姉樣はヴイオリン私は唱歌共に曲を合せて歌つたのも今夜の樣な月でしたね、嗚呼月は彼の時と少しも變らないのに、姉樣は入らッしやらない、姉樣御地も今宵こんなよい月ですか

口語文の熟せるもの

○冷い　兵庫　柳田のぶ子

冷いとか寒いとか云たなら必ず罸にすると誓つて床眠した翌朝雨戸を繰ば雪模樣風身にしむので出掛つたのを耐へたが水道の水には思はず冷いと叫んだので妾は大事の女子文壇繪端書を姉樣に取られた

寒いとか、熱いとか自然に出る言葉は必ずしも抑制するの要を見ず

○雲の色　陸奥　星の人

あゝ莊美！思はずも吾は、スケッチブックを膝から落して、しばしは夢でも見るかのやう、彼の美しい夕やけの雲の中を、無限に逍遙したのであつた。あゝ雲の色！何たる美妙な、自然の現象であろうぞ。

雲の美は現代の藝術家が新しき對象なり

○鳴子　伊豫　天野八重子

鳴子は鳴るのが役、私は又夫をならすのが役每朝私より先、雀は二十四程働きに來て居る其樣は書にも盡せぬ位可笑いのでッイ繩を引のを忘れて＝鳴子がなると皆喰ひかけたまゝ、私の内の屋根の上へ

世の中や鳴子引いても渋らるゝ

○實行　大阪　悠月

私は學校でよく働きよく遊ぶといふ事を敎はりましたのでなんでも自分はこれを實行せねばならんと思ひまして其れに務めて居りましたが近頃になつてよう〳〵少し出來る樣になりましたのでよろこんで居ります。

「實行せねばならん」とは能くお氣がつきました

○私が畑　矢名

私に三坪許りの畑があります、毎年草花や、玉蜀黍などを蒔いて、毎日學校の暇に親切に育てゝやるの、花は死んだ妹愛子に、玉蜀黍は弟と二人で食べるのです、蝶が來ると弟と共に『アレハ愛子の靈』と

靈はそらに活き、花は地に咲く

○朝清め　廣島　紅子

今日は日曜ォ、伴の宮奴には妾がなると帚木を片手に朝清めにと出づれば庭もせに散り敷し落葉、いざとてかきあつめて一寸ふりかへれば波の樣に美しく付いた掃目に眞紅に染められたつたかづらが一葉二葉おちて

ゐた

青海波に蔦紅葉の散らし模様、被布にやよき、振袖にやよき

○沼須村　上野　佐藤露子

來て見れば、野山を閉した朝霧は、天地に別れて、一つは赤城の絶頂に雲の峰を作り、一つは片品の川面に沼を描く、あゝ自然はこゝに昔を語るよ、

詞態、抒法を得たり

○冷たかつた事　京都　松田ひで子

お友達同志の水のかけ合ひ、學校の歸るさ、下駄の鼻緒切つて家まで素足で歸り、霜のある朝井戸端で洗面するのと、寒い々々日習字の時間に筆の軸を持つたのと

何うして水をかけ合ふのです

○小春日和　信濃　吳竹子

黒板にかゝれた數學の問題を考へながら自分は窓の方を見やつた。窓掛がかすかにゆらぎ枯木の枝に木の葉がたつた一枚寂しくついて居るのが、硝子ごしに見えて、何處からかはた織る音がかすかにひゞく。

小春日の田舍の學校、其境に在る如し

(選外)　栃木　淺野撫子



○枕　尾山璽子

くゝり枕ならば天鵞絨にして、紅と紫の厚總、箱枕ならば、菫か蝶々か白百合か鴛鴦かを彫刻したる臺に、京鹿の子の袋をのせ、簪の玉程の金鈴銀鈴を釣るべし、枕が惡ければ、善き夢は結ばれぬものなり

何に枕して此美くしき想像を得たる

○年の暮　三河　月渓女

ぺたん、ぺたんと餅つく音、がりがり、鍋のすみかく音、からころ、小走りをして、使をする、小供の下駄の音、妾は、これ等の音を耳にして、お正月に着る、自分の羽織の、肩揚をしました

動中靜あり

○妾の慰藉者　廣島　さゞなみ女

芝刈りに、草刈りに、或るは田畑の耕しに終日勞働し疲れて家に歸れば、我れに大なる慰藉者あり、何ぞ、是れ女子文壇なり

文壇の使命も重いかな

○いやな人　福岡　黒田なみえ

妾何が一番きらいかといつて中學生ほどきらいなのはないのよ。なぜかつて、人の前ぢや、式部々々と赤恥

かゝして、蔭ぢや男女交際はどうだなんて云つて來るから。

罵倒一番

○母の眞心 香川 松永あやめ子

或夜物學びの餘暇に、母樣から送られた數多の手紙を、一々開けて見ると屹度その中に「御身を大切に」と書いてあるので、妾は手紙の上に涙を落しました

同じ事た繰返すも母なればこそ

○芝居の感化 上毛 好月

私の女學校の試驗問題に四十七士の仇とねらつた人の名を書けと云ふのが出ましたら多數は高野師直と書きました

吉良上野之介

○冬のあかつき 讃岐 久保あや子

天猶ほ曉けず、星漸く疎に霜氣凝て。立ちこむる朝靄曙色の微茫を包みてほの白く、西山の端に落ちかゝる月も缺けたり。早起霜を踏めば凜として氣大いに奮ふ。

文亦凜乎たり

○一分間 大阪 幽絃女史

ようく〵お飾り物などをすましたので、何時だらうと時計を見ると、恰度十一時五十九分。今から十二時迄は僅に一分。それで今年は無くなつて了ふ。今年と來年との境は今や一分間に迫つて居る。

終も一分、始も一分

○白菊 北海道 白菊子

目出度き御國の姿其儘に香床しき白菊の花、兄樣は例の水彩畫のモデルに、姉樣はお得意の三十一文字に、妹は下髮にかざした。

而してあなたは其雅號に

○四大臣 石狩 清子

私の宅には、四人の大臣が居ります、兄さんが、お金內務大臣、弟が飯、大くらひ大臣、末の弟が、いたづら、司法大臣、總理大臣が、お父さま、

こじつけ得て妙

○亡き母 神戸 藤野みゆき

今日しも亡き母君の三年忌佛間には讀經のみこゑたかく、みまへに供へし白菊は、ありし昔を忍ぶがこと、つゆさへみえて哀れふかし、あゝみたまやいかにみそなはす。

○ゆふやけ 山形 たか子

おやおや、今日もまたゆうやけがして居る、あすはたしかに、東郷日和、

○菊にそへて 岡山 井口豊子

英子樣、此の菊は、あなたと二人て一生懸命に植ゑたあの花園の菊なのよ、丁度、今朝咲きましたから、一枝差上げます、どうぞ、机の上にさし下さい。

○うらみ　越後　苅萱女史

思ひきや此美しき歴史に涙の痕を印さんとは、蝶よ花よと鍾愛せられしは夢か、一度星ひやゝかに飛んで父君は蒼海の孤に消えられ、家産は舉て人手のもの妾は女工と零落して枕重き母君を養ふので

○弱き心　岩代　阿部つぎ子

一度二度の失敗に此樂しく幸多き世を憂しとかこち悲しとなげく人、己が心の弱きを悟らて、みだりに世をはかなむ人の多きぞ歎かはしき、

○現　金　横濱　寺田光子

お召の矢カスリを私の被布にと買つて下すつたので一生懸命仕立に夢中になつて夜の十一時打つのも知らなかつた。「光子は現金ね自分の物だとあゝですよ」と姉樣が側でお笑ひなさる。

○ゆあがり　筑前　千代子

湯上り姿で廊下傳ひに座敷へまはると、あけはなちた八疊の間に、月が描いた庭の老松、姿はあまりの美しさにしばし通らなかつた。

○妾の母　小倉　宏藤なか子

妾のお母さんは氣丈だと人は云ふけれどうらめしそうに兵隊さんを見送つて居る露ちやんの顏をそつとぬすむ樣に見た目には涙が一ぱいだつた

○病　語　相摸　倉橋よしえ子

病む姉のなほ語りつゞけて、かゝる夢見たりしは既に三度なりき、我が亡き母の御側に仕へまつるも程遠からじ武雄御前、妾のなき後は都の叔母を尋ねてよと涙に又もせき入りぬ

○無邪氣　秋田　富樫りつ子

惠ちさんは何時も荒いから、お父樣に度々押入へ入れられます、今日も花瓶毀したので「又惡戯したか」とお父樣の聲を聞くと逸早く納戸へ匿れました「惠ちやん何所へ行つたつ」と納戸の方へ近づくと中で「惠ちやん此所に居ないの」

（選外）



千駄ヶ谷　多賀花京

○母樣の夢　陸前　小野寺春子

餘り淋しいので女子文壇を見てると、「御勉强か」との聲にふと見れば死んだ母樣が淋しい顏に笑を浮べて居りました。餘りの嬉しさに母樣と叫べは影も形もない夢でした。折しも庭の木の葉のちる音がはら〳〵。

○歩　哨　岡山　菫舟

「友逹がねるからねると申します」と妹が獨言して居るので行つて見れば木の實の猿によく似ているのを二列に並べて蒲團をきせ其一つを立てようとすると倒れるので「敵がくるから歩哨せよといふに眠い々々といふのよ」

○可愛い　大阪　金戸のぶ

私が文壇を見ている側で妹が何か猫と話ていたが突然「姉ちやん此猫も學校へ行時に袴とお辨當を與て頂戴ね」とのぞきこんだ其顏の可愛さ

○めでたい新年　陸中　佐々木紅矜子

廻り廻りて十幾度もめでたい新年に廻りあつたが、今年ほどめでたく嬉しい新年には只一度も逢つたことはない戰爭では大捷利するし兄樣は中尉になつて凱旋なさつたしそれに姉樣には可愛い赤ちやんまでができて。……

○小　包　失　名

寒くなつたのに家から着物が着きませんから一人で外出も出來ず、お母さんを恨んで居ますと、やがて小包で新調の羽織と袷が着きました

○除　夜　栃木　湯澤紫女史

明くれば睦月、今宵は終夜寢まじと、屠蘇の酒に一家團欒、かくて十二時過ぎより、寺々の百八の鐘の響きに覺されて、萬事皆新まる樣、妾はお緣起を買つて歸り、それを直に歳神樣にあげた

○金鵄勳章　土佐　森木重子

築山の彼方散り殘る紅葉の下餘念なく遊び居りし武ちやんは何思いけん

ふと立上り此方伺く時しもひら〳〵と蝶の如く飛び來りし紅葉は胸に止りぬ武夫は莞爾として姉さん御覧金鵄勳章

○今日の出來事　山形市　幸子

あたいはれ、今朝鐵瓶のお湯がふいてはいて眞白になり、學校て體操の眞最中に袂から柿がころがり落ちて眞赤になり、先生に見つかつて眞青になつた

○おち葉　四谷　みどり

徒然のまゝ遠國の姉樣の許へ御文をあげ樣と机を窓側へ持て來た、少し書き始めたらはら〳〵と散て來た紅葉一葉、丁度よいから中に封じて御送りましよう。

○紀念林　小倉　石井房江

征露紀念林つて松を植たのよ所が之の九月に枯かかつてよ妾心配したわそらこえや水やと一生けんめいおかげて此頃やつと芽をふいたの……嗚呼嬉しい戰地に行つて居る兄樣も無事かしら?、

○老いたる父母　近江　細野その

學課もすんだ、なぜ私いそいて家へかへるのか、老いたる父母は、日あたりよき室に、妾がかへるのを待つて居られる、そして私の手でたてた薄茶を飮むことをこの上なき樂みとして居られるので、

○辻占　横濱　川田てい子

此度の試驗に優等だつたらば、阿父樣にあのヴァイオリンを買つていたゞくお約束、今阿母樣からいたゞいたお煎餅を食べていると中から出た辻占に「こつちのものだよ」

○うたゝね　吳　岩木貞子

机によつて習字してゐましたが遠足の疲ていつの間にか睡入つてしまゐましたやがて障子の開いた音て目を覺ますとまあ母樣が圓い日して貞子さんおまいは顏に習字をしたのネ

○孫の凱旋　信濃　俣文子

戰死したと計り思つて居た、爺やの孫が、今度目出度、凱旋する事になりましたので、開戰以來深くきざまれた、爺やの額のしわが一筋のびたそうで御座います。

○白色　越後　茂野りう子

美麗なのは白色の秋菊の花!
可愛らしいは萩の花の白色!
戰死の夫の棺後に立つ人の白衣は其心の潔白を表はすもの!

○餅搗き　福岡　桑里枝子

皆甲斐々々敷身仕度して居ると、「兄さんと下女が、うす掛りて、エイトー、ホッツキ、エイトー、さあつけた、お母さん、ちぎつて頂戴、私がもみてて、弟がはこびて、

○いやな兄上　盛岡　江刺家つや

未だお顏さへ拜した事のない戰地に居有る兄樣から個々美しい草花を封書の中に入れて下さるから此度は妾からお願して戴かうと思ふて然ういふて上げたなら『戰地には草花がない只ある物は露助と豚ばかりだ』

○都の友へ　磐城　石井薔薇子

給桒書府がたう、いつも御健筆羨ましい事れ。妾はれ相變らず子供のお守よ。每日八時には學校に行つて一日蹴け廻るの。面白いわこんどテニスの道具が出來ました家に歸るのは三時頃。

○嬉しかつた事　群馬　千代子

十一月十七日の臨時休暇をきいた時のうれしさ、私がちいやのまれして五つぶ六つぶ蒔いたもろこしに毛の出た時の愉快さ、

○秋のおとずれ　多可　林かずえ

秋は哀れなるこそよけれと申され候さりとて杖柱とも賴める男の子に出征せられし母の心根夫なる人に滿洲とやらいふ處に出て行かれしかも今は寫し給と變られ候さまなど思ひ出せばいとも〳〵哀れなるものにて候

○あゝ　品川　小女

去年の秋は、隣の清ちやんと一所に私の兄さんと、清ちやんの兄さんとを停車場まで送つて別れたが今年の秋は清ちやん一人て迎へたのだ。

○卒業式　陸前　松越じん子

今や校長の話がおはると一同の眼は校長の口過に注がれた。あゝ此の口

から第一番に誰が一等賞とよばれるかと其の瞬間生徒の心は如何てせう

○村躍

福岡　大塚ひとし

幕は開かれた、忽ち現れし一人の女、鼓を持つて居からは靜御前てあろう、匂へる顏は櫻花のそれか、舞へる姿は白百合？處が今し舞の「トタン」黑い大い足がズツト見へた。

○美いちやん

京都　秋月清子

美いやんが怒つて人形を毀したのでお母さんに押入に入れられましたあまり泣くので氣の毒になりまして免して貰ひましたければ喜んでこんどからはきつと姉さんの云ふ事を聞くと云ふので一層可愛くなりました

（選外）

○お土産

信濃　智嘉子

お里歸りのお土産に、姉樣から薄桃色のリボンを戴いた妹は嬉しさの餘り、お手箱の中へ入れたり出したり、朝から數回飾さぬ内に手垢にせればよいに

○病院

飛騨　糀垣千代子

死に瀕している患者の手を握つて、同情の涙に滿ちた目を瞬もせず、ジツト其顏色に注いて居るのは廿一二の美しい看護婦で白の制服制帽が小暗い電燈の影と配合している樣が又なく神々しく見ゆる、

○うれしき今日

越後　うた子

まあ今日の嬉しい事自分にはとても出來まいと思つて居た仕事をこんなに、よく出來上つたのてすもの何事も一心の力には勝てません

○弟

靜岡　桂影子

算術の宿題に腦裡を苦しめて、漸く解法の端緒を絞り出して、まづ安心と思ふた途端。『こらッ』と大喝一聲。吃驚して顧へると、弟の猛が洋刀振り翳して睥睨顏。まさかに怒られもせず、暫し呆然……。



○筆初め

鹽野方しげ子

『新年お目度』と挨拶もそこ〳〵にして、誘はるゝがまゝに美代ちやんのお部屋へ行くと、鉢植の梅が一二輪蕾を破りて香を放ちて居る思はず筆を取りて。初東風に笑ふ梅あり文の窓

○あなた

長崎　古岩井操

此度こそ特別第一と思つて外の處には目もくれずに端書文目はちら〳〵胸はどき〳〵やつと目付けた一番終にハツと計餘りの嬉しさにぐつたり

常陸　錦水女史

○口惜し

名古屋　中村よし

本學業の卒業生は、親友の藤子さんを始め三十二名でありし、然るに妾はいまはしき病氣の爲に、此たのしき列に加はる事能はざりしなり

○凱旋みやげ

武藏　武藤とう子

お父さんの凱旋みやげは何んてせう、支那の繪葉書、彈丸の破片、戰爭中の日記、中て妾か一番うれしいのは、ニコ〳〵の笑顏、あゝ待ち遠てす事。

○凱旋

新潟　まつ子

お隣の伯父さんも某さんの兄さんも皆凱旋なのに宅の父さんばかりはどうしたのとは未だ何もしらない幼ない姪の言葉あゝなんと答へよ｜涙ばかり先だつて

○本年に於ける女子文壇

府下　小中村榮子

きのうと過ぎけふと暮して飛鳥川流れてはやき明治卅八年も夢と去りまして幾多の著しき名譽の歴史を軍國に捧げしその績を文學に飾る秋は來ました、女子文壇はその新しき希望に彩色されましよう、

○夏の夕方　牛込　三木久仁子

庭に打ち水して暫く手桶片手に庭面を恍りと眺めてゐると蛙が夕立ちとでも思ふたか縁下からひよつこり飛び出して空を眺めてたが降る雨のないのに腹立ちしか突如又這込んで了ふた

○お土産の催促　山口　村田節子

衣類齒磨き女子文壇レース糸等つめ込める、旅行鞄を携へて、母樣と二人此別府温泉宿に着して、早湯上りの陶然たる頬を抑ゆる時、一枚の繪端書は屆きぬ「姉樣サーベルの御土産れ」と、棒釘流の覺束なき、尋常一年生の筆の跡、

○千代さんも島田　本郷　志滿子

今年初めて島田に結たら耻しくてどこへも行れず家に計り居ると友たちの千代さんがかるたをするつてお迎へに來と云ふけれどもどうしようかと思ひそうつと窓から顔を出して見たらあら千代さんも島田

○暮　芝　頴川眞子

ほんとに十三四の齡までは暮といふともうお正月の嬉しいのと樂しみなので待遠でならなかつた妾もだんだん月日の經つのが早い樣な氣がして今では又暮かと思ふ樣に嫌になりました

○順禮の子　大阪　糸萩女史

雪がチラ〳〵ふる寒い朝十二三の女の順禮が來ました、ましての冷たいのに赤裸足、私は可哀いそうにと、足袋とお母樣からもらつたお菓子を與げた。

○戸外遊戯　牛込　小島濱子

皆さんは歌留多で無中になつて居らつしやる時、妾は寒風に曝されてテニス、皆樣室内遊戯よりも戸外の方が、お顔が色白になりますよホヽヽ。

○別莊　王子　大谷たま子

菊子樣と玉江樣はバイオヤンの合奏萩の白露を帶び咲いてゐる廣い庭で父子樣が靜子樣とテニスの競爭チヤンピの御仲間入出來ないゼロの私はブランコに乘る

○嫌ひな者　横濱　山崎京子

私しの一番きらひなものは、女學生の自轉車乘り、煙草を呑む婦人、酒呑婦人、餓鬼大王、剽竊文投稿者、雨のもる家、生意氣にしらぬ英語を使ふ者、四國巡禮の御詠歌等

○平和　富山　新保とき子

我が家に一疋の犬と猫とを飼ふてある、元來犬と猫とは大の啀合ひだが、不思議にも非常に睦じい、思ふに、我が家庭に感化したのらしい。

○妾の繪はがき　播磨　富原愛子

妾に八十四歳の祖父樣がある、此頃は音信がないので氣になるから昨日繪葉書を出したすると今日しも門に人力車の音、誰あろう祖父樣であつた例のホク〳〵した調子でお前の繪葉書に動かされてやつて來た

○早朝　京都　井上ゆたか子

學校も遠く、かつ早起きは、第一心持がよろしいですから、弟も妾も毎朝銀砂をまいた樣な、美しい天を眺めて、それからおそうじの御手傳をしますのよ、と、芳子樣に、話しますと、けゞんな顔してあら星樣、朝にも出て。

○こはかつた事　備後　きよ子

母の急病に胸亂しつゝ凄い霜の月に下駄響せて寢靜つた裏町を醫者よびに只一人！寒さに思はずぶる〳〵ッと振ふ、刹那！後で「賊だッ!!!」「アレッ!!」と覺えず駆込むと、睡ていた燒芋屋の婆さんがそり返つた、

○めさまし　山城　葉螢子

今朝は一面に拭た樣な日本晴。其の上桃や梨の木は、幾粒となく水晶玉を吊している、門前の白い山茶花は頻に、ひらり〳〵と風に翻れて、丁度走つて來た可愛玉の背中を三ツ叩きました。

○水仙　大阪　岡せい子

私が丹精して育てゝ居りました水仙、やつとこの頃大きな蕾が出來て今

にも開きそうになりました。兄樣が戰地から御歸りになるのがこの月の二十日ですがその時にはこの花もほんとに奇麗に咲くでせう。

○梅の花　香川　妹尾玉芳女

妊の美枝子入學紀念のため、梅を植置きましたら、始めて、春知り顔に匂ひ初めました、かく美しき花懐しき香、之から一層手を盡し、希望の梢に太陽の光りを得よふと思ひます。

○つな渡り　佐世保市　江口かつ子

當地に輕業がありましたので。私も見物に行きまして。綱渡を見舞て。其藝人に此業の難儀な事を問ひ升と藝人答へて。否綱渡りは困難に候はず。されども。世渡りが最も困難でありますと申しました。



○初日　伊藤俊子

平和な、豐な、お日樣は、今新らしい年の初まりを、公平に照してゐらつしやる、下界は、日の丸の旗、松かざりて、飾られ、老も、若きも、男も、女も、みんな、同じやうにお日樣と顔を見合せた

○朝月　常陸　酒葉貞子

毎朝早く起きて顔を洗つて座敷の掃除をするのが妾の務である、今朝も早く起て裡庭へ出ると殘んの月は丁度杉の梢に掛つて手水鉢の眞中に其影をうつして居る!!

○鷄　大和　榮山利子

私は去年孵化た。ま赤な美しい雄鷄と。ま白な可愛らしい雌雞と。三羽養うていますが。二月程前から毎日二つの卵をうんでくれます。私はそれを賣つて。學資の足しにして居ります。

○御秘藏の菊　吳市　大上くま

明日は兄樣のお凱旋、私と共にお留守をなして居たあの兄樣の御秘藏の菊はどうして居るかとお庭に歩を運びますと清き馨を放ちて居ました

○はきちがへ　茨城　紅葉女史

此の間の朝、お母さんの足袋が幾ら尋ねても見えないので、不圖氣が附けば自分が起き乍ら履き違へたのに大笑ひをなした、そして私の足袋はちやんと夜着の中に。

○雪　鳥取　上山千重子

霜がれの庭に、一夜女神が下りまして、御手なる小羊の柔毛を、ふつと呼吸ふきかけて放ち給へば、見る見る片々霏々として、御空に輕う舞ひ上り舞ひ下り、下界の穢土を蔽ふて仕舞つた。

○今年の稲仕舞　新潟　清波女史

兄さんが近日中に凱旋られると云ふので一生懸命に働いた其甲斐あつて今朝村一番に稲仕舞をして粢搗をしましたから妾は日當りのよい所に隣村迄聞えよと許り鼓を叩きました其時の嬉しさ

○今日の日記　島根　名なし草

今日計らずも久々振りに兄が歸りましたの、マアー──私！何から、おはなしゝたらいゝでしよう！

○納豆賣　羽後　菅原花子

面窶れし乙女兒の夕暮寒き風に吹かれつゝ背なる乳兒をすかす子守歌も半ば涙聲なり。彼の母樣は邪慳なる父親に離緣されしより納豆を賣りて其日を過し居るとか。げに哀れなる親子よ、悲しむべき社會よ。

（選外）　やす子

誌友倶樂部

◎年賀狀の御禮

○新年の賀儀を市越された、諸嬢は多數にありました或は繪葉書に或は玉づさに何れも本社の盛運と記者の健全を祝され誠に忝くぞんじます、芳名の明かなるものだけを左に擧げて聊か答辭に代へます猶ほ御寄贈の年賀狀は凡て叮重に本社に保存して紀念といたします

○安藝、小方春女子○神奈川縣、中村三重子○弘前市、一戸きさ子○札幌、窪田いよ子○千葉縣、嶺月子○長野縣、川口○德島市、多田秋月○肥前、松永君子○長野市、安孫子美子○盛岡市、江刺家つや子○京都、岩淵國子○長野市、飯塚ぎな子○宮城縣、笠原かめよ○陸前、橫澤さつ子○美濃、內藤みち子○大阪、河原たき子○陸前、渡邊とら子○北海道、伊東錦子○丹波、奥村きさ枝○奈良縣、奥柿清女○奈良市、箕輪京子○靑山、林田糸子○岩代、杉原たかやす○京都府、菅井村愛讀者一同○よしだかつ子○上毛、月踏芳枝○芝、額川とき子○齋藤みすゞ○岩代、松下つれ子○長崎港外、豐島環○福岡縣、長岡道子○淺草、しづ子○名古屋、鬼頭式子○神戶、大島ちさ○佐賀市、紫陽○大和、梅生秋子○北海道、本郷直枝子○羽後、米澤八重野○佐賀市、芳留○靑森縣、三宅嶺子○常陸、大塚花子○大阪、沼野すい子○出雲、倉橋小鶴○安藝、池之子千島○栃木縣、松本玉仙女○兵庫縣、富士田章子○信濃、田村あい子○駿河、村上節枝○兵庫、栁田白百合○越後、せい子、まさ子○佐賀縣、山口しと○横濵、ゆきえ子○横濵永井その枝○長崎市、栗田すが○越中、一少女○周防、楓千○周防、福永美都子○若松市、中島衛蜀子○神戶、媛月女○四谷、白菊○茨城縣、栗栖信子○京都府、柳原ゑつ子○静岡市、たか子○茨城縣、石崎季子○羽前、梅村ます○大分縣、工藤鈴子○静岡縣、酒井よし子○茨城縣、中西歐子○高松市、芳遊女史○廣島市、諏訪茂子、光永勝子、山岡時○上毛、津久井紫○上毛、津久井德子○鹿兒島市、長瀬秀○横濵市、鈴木春江子○石狩、小鹽きよ子○横濵、寺田光子○靑森縣、常世ふみ子○熊本市、片山とし子○肥前、早瀬きや○幾重○神戶、春浦女史

◎我家の現在（課題）

芝區　すゞ子

○三年前の櫻の散る頃父上を失つてから後は家内が總躰で七人、雨が降つても鎗が降つても小學中學女學校への辨當持が五人、よくお隣のお叔樣に當は火の消えた樣だと笑はれます、何でも兄弟揃つてエライ人に成ろうと云ふのが皆の理想、幸ひ多少の遺產も有り並はづれた馬鹿も居ませんからいつかは望みの遂す時も有ろうと優しひばいやな相手に母上は言はれる

宮城　鐵本ときは

○家で一番大切なのは水車、今は二尺もある氷柱で廻りませんけど前の畑の麥も雪溶の間から三寸餘も伸びるし後の古い梅も蕾を持たから皆に川上から桃の花や毬など流れてくる、御父樣が早朝町に薪賣りに出てからは私御母樣や戰死の兄樣に花上げたり晩の御菜を調らへたりして待てると御父樣屹度御土產買てきて下さるのそれから薄闇いランプの下て御夕飯を食べるのよ

横濵　野の菊

○一番の姉が福の神二番の姉が惠比須樣さて私は於多福と云ふ目出度い名をおわるの兄樣から付けられて居るだけに家内八人いつも圓滿に樂しいデ！アルが取りかこむめてある只悲しいのは義兄樣の去年の御戰死……

千葉　越川よし子

○皆さん妾の家の現在を一寸お知らせします家内の人は老母と父母と兄と妾と妹の六人てすそして栗毛色の馬もあり黑い牛もあり白い小兎も澤山あり三毛色の猫もありにはとりも澤山あります破れ疊も五六枚あり新しい疊も三十枚あり二階もあり屋根にはすゝも澤山あります鼠も澤山居ります破れ障子もあります佛壇もあります是れが妾の家の現在てす

岩手和賀　三ッ車女史

○屋根棟が八つ、皆平屋造て家が縱九間半に橫五間の非常てす、農家てすから、家中がたいそー、散らばつてゐます家族、親戚とも、圓滑て父（六三）母（五〇）兄（二一）妾（一八）妹（一六）叔父（五七）叔母（四四）その子（二〇）（一九）（七）と、都合十人此頃は、毎日小作人がお米を持つて參りますので、妾がお酒を上げたりお飯を上げたりしまます、そしてその際には、麻糸苧みよ、皆さん、可笑しい生活てせう、

上毛　和田末子

○我家は代々神職にて父は四年前に沒し長兄虎治郎性剛健長袖[illegible]の人たるを好まず京に上り明治大學を卒業し今伊勢安濃津地方裁判所部長な奉職し次兄正平父の職をつぎ咲前神社々掌を奉職せり三兄久雄又京に在り明治大學に勉學中にて今は家には母と次兄と姉樣と私と兄の長子と五人和氣滿々の中に暮して居ります

德島　秋月

○私宅は總家內二十四人て其內子供が十人てすか一人の從兄は東都へ勉學に行つて居りますから今は九人てす、從姉妹二人と私姉妹三人とにて一週間づゝ交代て皆の室を掃除する事になつて居ります、大祭日やお正月日曜などには總がゝりて大掃除を致します、此頃はお客樣が多いので日々大掃除をして居りますから週番が分らなくなつてしまいましたけれども昨日より姉樣が掃除を受持て居ります

秋田　富樫里津子

○一家十五名下男、下女、傭、一名づゝ姉弟は六名あります八十七歲になりまする曾祖母樣は最高齡者て、昨年生れました美ちやんは最低齡者てすお父樣は農事の掛りてお母樣は美ちやんに乳な與へまする暇に裁縫します協議て度々召さるゝのは議員の祖父樣、軍事郵便の來ますのは滿洲營口在の叔父樣から、桃太郞舌切雀の昔話を閒かすのは利ちやん惡ちやんの荒いのを柔らぐる祖母樣

○父様は中學校の敎師兄様はなく今年東洋女學校の三年與の座敷で琴のお稽古の姉さん夕方までに仕立てるとご飯も召さず妾の羽織を縫つてゐらしやる母様今風買いに行つた弟皆大壯健てある明日はお正月庭では雇人が搗く玄關では松立父さんと妾はうちの飾りで鋸の音がするやら鋏の音がするやう琴の音やら笑ふ聲やらて明日は樂しくお雑煮を食べてお祝をする

小石川　佐川良子

○兄さんは陸軍少尉で日露戰爭に戰死しました。戰死後は功五級勳五等。陸軍歩兵中尉に任ぜられたり。營業は吳服太物問屋と荒物問屋を兼れ家内の年はお父さんは四十八歳。お母さんは四十五歳。戰死した兄さんは二十五歳。お嫁さんは二十一歳。兄さんのお子さんは唯一歳。私は十六歳。

秋田　B　N　生

○お父さんは患者の診察に忙しいので晝の中は御母さんの傍にて仕事〻御稽古あみものなどなして居ります弟は朋友の處に行き大抵日暮まで御遊び日暮になりますと御父さんも弟も自轉車て御歸になりますす皆沐浴をして夕餉の時には中々賑かて夫に又病氣保養のため來られたる山崎さんと共に夜は炬燵を擁して宗敎談をするのてす

赤坂　大木もと

○日曜にはいつも御父さんが患者の爲め忙しひのて私しと御母さんと弟と女中は皆敎會に參ります夕方の集になりますと代りて御父さんが參りまして私し共は留守して家政の御話しなして居りますそして御父さんのお歸りをまつて說敎の御話しを聞くのが樂みてす

赤坂　大木つれ

○お父さんは熱心なクリスチヤンてすから我力て出來る丈は働ひて他人を助けると云ふこと皆おなじ神の子てあるからなべて平等てあるといふ博愛主義職業が醫者なので隨分傳道もしてゐます私とも休業て家に歸つても働かなければならないといはれますから掃除も仕事も皆します

赤坂　大木さと

○妾の家には父様と母様と姉様（廿一）と妾（十六）と弟（十二）と妹（六）と鷄が三羽に豚が二匹と居ましてれ父様と弟は毎日學校へ母様と姉様は家で裁縫妾は程遠からぬ裁縫の師のもとへ行きますのよ

埼玉　山口邦子

○我家は父なく母の手に兄一人弟妹二人の家族て常に亡き父の世にせればならぬと母の敎訓に一家團欒の樂しひ境遇てす只東都の兄が成業の上歸國して一段の花の咲くのを皆いそしみ勵んて待て居ります

福井　錦香

○七歳になる秀坊と並んでご飯たべてるのは四歳なる淸坊、祖母さんはお父さんと一しよに佛間に拜んでゐなさる、弟の孝さんは中學への入學準備、十歳なる妹の篤ちやんと書齋にゐておさらひ、お母さんは下女とまだ淋處に何かなさつてゐる、わたしは漸々髪を結ひおへたのですが隣の室てはなほ祖父さんが鼾の音

羽後　松田せい子

○今年八十五歳のお祖母さんを初めとして丁度十人の我家には此春も樂しい笑聲が滿ちて皆むつましく暮して居ります今年三つになる弟が馳けて歩つたり兄さんが一ヶ月前にお歸りなすつたりして嬉しい事ばかり

常陸　小泉演子

○妾の家は農業です、お父様は郡會議員てあります、お母様と妹弟各一人と、妾と五人家族てす、外に下女一人、妾は只今の所を借りて、學校へ通て居ます、日曜には、家へ歸るのが樂しくてす樂みてす

京都　たぬ子

○妾の家はまことに山間の避地てありまして至つて交通の不便な處てあります家内は兩親と一人の兄と二人の姉と妾とて都合六人其ノ内兄は非常に嚴格て日露の戰役には後備隊となつて出征し今は凱旋して歸つて某中等學校に奉職して居ります二人の姉は小學敎員て妾は今某講習生なのてあります

遠州　伊藤蝶花

○我が家の現在と申ても、お耻かしい位てすがどうぞお聞き下さい我が家は別に職業とてはありません父上と母上と妾と妹とそれから下女と下男とこれ丈の團滿なる家庭を作て居るのですそして六ッになる妹の雛ちやんの愛らしい事妾が學校からかへると父上母上にごあいさつもせぬ内にかけ出して來て姉さん、おかへりなさい

秋田　すみれ子

○宅は福山の東御兩親と兄上と私、父上は敎師兄上は札幌農學校私は高等の四年母上が萬事の世話家庭は春の海の如く平和てす

備後　美佐保

○父は陸軍に從事して居ましたが今は退職床には家代々の澤田助廣の銘刀、及び昔父か指した短刀其他古代の雷斧、雷槌、石棒等が飾られてある

芝　穎川さき子

○曾祖母樣が九十才お祖父樣が六十九才お祖母樣が六十五才お父樣が四十二才お母樣が三十五才兄樣が十五才そして十三才の私と合せて七人家族商業は煙草問屋

備後　白はぎ

○我が家〻第八師團兵營の近くてあるから朝には勇しい喇叭の音に驚かされて起き兵卒らが朝餉が濟むと調練の音が手に取る樣に一二一二夕になれば軍歌の聲勇しき喇叭一聲聞ゆるや四邊寂寞として音なくたゞ小川にかけたる水車の音ばたり、又ばたり、もー寢ませうれ！お母さんと朝に夕に勇しい喇叭の聲の下に寢もし又起きもするのてある

青森　登代子

○妾の家は松平樣の御家臣て廢藩置縣の時殿樣から戴いた名高い甲がある之が妾の家の寶物てす去年の夏虫干の時祖父さんが色々說明なされる兄さんが歸省なすつた虫干てあつたので兄さんは僕着て見ようと言はれて着て歩まうとして倒れた祖父さんは今の若い者は力がないと笑はれた

信濃　すみれ

○家族は、お祖母樣と父樣母樣私に、弟二人妹二人それと親族の、千代子樣と云ふ方が居らつしやるから都合九人父樣は當地の高等小學校の校長、家は天然の築山を見渡すことが出來て餘

福岡　高橋しづえ

は松原夕ぐれお庭の木かげて千代子樣や私等兄弟六人でおにごつこなどするときは實に愉快てす

○私の家には今年六十四才になるお婆さんと其れから父樣に母樣兄樣は二十二才で目下出征中時々面白いお手紙が參ります新年の名刺交換會は私の宅で開かれたが甚だ盛會であつたから早速兄樣の御許へ報じた　五所川原　やまと子

○お祖父さんお祖母さんはありません私等兄弟四人とお父さんお母さんばかりてす妾は十七歳で姉さんが十九歳てす十三歳になる弟は八ツの妹をつれて毎日學校へ通つて居ります妾は裁縫の時、針て少し足を怪我して遊んて居るので弟妹が學校から歸つて來ると妾がいろ／＼質問したり敎へたり致します　常陸　川並愛子

○只今住居してる家はせまい所てす間數は四間で八疊に六疊に三疊の玄關と五疊半の私の書齋とてす、家族は六人でして御兩祖とも御逝者てす弟の腕白にはまことに困つて居ります弟の年は九才てすよ近々に戰地から兄樣が凱旋になりますから家内が一人增しますわ、目下は別に申上げる事もありません。　芝　かつ子

○妾の内はお父さんとお母さんとそれから今年九十になられるお祖母さんと子供が十五人と店の者が四十八人と皆で六十三人暮して居升お米は年に二百石程いるそうてすお正月の餠は毎年十石に定つたつたそーてすが、最う三ヶ日經と直に千秋樂になりますのでことしは三石丈ふやされました。　山城　しやべり

○我家庭は親子五人てす一人の兄は軍籍に身をおき父は毎日鋤鍬を友とし私と妹とは母の手つだいをします　大和　水雨

○私の父は昨年五月召されて大津後備聯隊の大隊長として出征致しまして旅順第一回總攻擊に參加致し遂に東鷄冠山北砲臺下の露と消えました又兄は當地聯隊中隊長として昨年九月征途に付きましたが幸に無事て居りますので明年四月には凱旋の豫定て御座いますそれて私共は亡父の供養の傍ら兄の凱旋を一日千秋の思ひして待つて居ります　山形　幸子

○お正月だから妹は今度かつてもらつた下駄をはいて、面白き顔をしながらかけまはつてゐるそれから我家の話聲わらひ聲の、高ひことゝいつたらまるて、向ふへ手にとるようにきこゆる　岡山　正富得子

○妾の宅は兄弟八人で此の内女四人男四人で一番兄さんと次の兄さんとは正月前滿洲より歸られました又お父樣とお母樣は同歲で本年五十歲になられました老父樣は本年八十八歲老母樣は八十三歲今の處ては家内拾貳人と下女下男三人〆めて十五人暮して居ります　近江　石川臥龍子

○妾の家は南は廣い／＼背海原をひかへ北は高い／＼山を背ひ家を去るト一町足らず白沙青松四里より東に日の届く限り其幾里なるか知れぬ家内の數は九人て今度新玉の目出度き年を迎へたのて皆んなの年齡を合すると凡渡二百七十歲になる　土佐　弘光芳樹

◎新課題募集

誌友倶樂部の欄を賑やかにしやうと思ひまして課題を設けました處計らず諸孃の大贊成を得まして御覽の通り本號ては諸孃が我家の現在をお話しになつてなか／＼面白いです、扨て次の課題も左に揭げましたから續々御投書を願ひます

△好きな食物（二月五日締切）

蓼食ふ蟲もすき／＼とやらフランスては蝸牛の料理が珍重せられ、我信濃の國ては蜂の子なぞ御馳走にする人に依つては何が好きか分りません其好きな飮みもの食べものを遠慮なくお聞かせ下さい、名前だけてもよろしいが變つた料理や地名の名產や食へ方のちがうものは聊か説明を加へて頂いた方が能く分ると思ひます、締切が早くなりましたから急いて投稿を願ひます

△理想の夫（三月五日締切）

皆さん、お笑ひなすつてはいけません眞面目にお聞き申すのです諸孃が他日お嫁になりなさるに就いて何う云ふ夫を持ちたいと云ふ思召てすか、今はそんな御考へが無いにしても若し假りに望みを言へば何う云ふ男子をお選みなさいますか、士農工商博士學士勅任官乃至は文士詩人か軍人か醫師か其の階級、職業、次いては何んな性質の人が宜いとか猶ほたち入ついて容貌の如何にも御考があれば御聞き申したい

右の課題は凡て左の方法に依り投稿を乞ふ

△二三行乃至七行まて△用紙は半紙又は罫紙
△一篇毎に題を添へること△雅號だけにても宜しけれど國名或は縣名を忘れないやうにすること

◎諸孃と記者

○諸先生妾は書社を學校の樣な心地して居ます地方に高等女學校がなくとも何を歎きませう母の膝下に有て諸先生の御惠を受け諸孃樣の美はしき御文を拜見する事を得るは拙き身に取り此上も無き仕合て御座いますこれから少しつゝ投書いたしたいと思ますがいかゝてすか書方はこの樣ていゝてせうか（岩代、紫羽子）（記者曰、眞情から出たお辭と存じますよろしく永久に誌友として御交り下さい又御投書は規則に外れて居りません）○鄭寶なる記者閣下よ斯樣のはづかしき質問てすが開いて下さいよ、御友達仲間て文通するに封筒に入れ開封てもよいのてすか又通常郵便てなければなりませんか（山梨、近藤すみ子）（記者曰、友人の文通に開封はいけません罰金を取られますよ）○記者樣妾始てゝすが之れてよいのてすか又二人の作を同封してもよい

ですか論文抒情文には論文とか抒情文とか題の上に書くのですかどうか紙上で御敎を（千葉縣たき）（記者曰、凡て仰せの通りにてよろし）

○記者樣私は投書して見たいと存じまして原稿書き上げた事も昨年以來幾度か知れません、けれど皆樣の御立派な御文拜見しますと、どうしてこんなものを御恥かしくなつて何時も破つてしまつたので御座います併し今度から思ひ切つて差上げて見ますから以後どうぞよろしく御願ひ致します（肥前五島山田べん子）（記者曰、世には向ふ見ずに投書する人もありますのに貴のやうに謙遜して投稿なさるのは誠に床しいと存じます）

○記者さん御尋申します俳句は半紙へかいてはわるいのですかはがき判紙はどんな紙ですか（大和利子投）（記者曰、半紙でもよろしいのですハがき判紙とはハがきの大きさの半紙と云ふ事です）

○記者樣斗り女子文壇が一年になりました生れてからだけれどもこの子の爲めには早や去年と云ふものでせう道理でいよゝ美しういよゝ可愛らしくなりましたことぞて髮も結てあげませうリボンもさしてあげませう（周防鷹の江子より）（記者曰、親切なるお言葉、女子文壇の身に餘る光榮、美しく飾つて皆樣の前に出られるのも全く皆樣がお目かけて下さるおかげてす）

○記者樣是非に懸賞撰者の寫眞が見たくつて仕方がありませんどうかお規則にもあります事だから早く出す樣にして頂戴（淡路洲本愛讀者）（記者曰、成るべく左樣な事にいたしたいと思ひます）

○本欄へ投書するにも廿一字詰に書かねばなりませんか又選外と賞外との區別を次號で敎へて頂戴な（伯耆御來屋、嶋原貞子）（記者曰、字は揃へるに及びませんが、はつきりはなして、一字々々能く分るやうに願ひます、それてないと沒書てす選外は懸賞撰外の意味て賞外と同じ事てす）

○記者さん私は小學校を終へたばかりのふつゝかな者て投書したいと思つても文章を稽古する暇なぞは少しもありませんけれど、いつかは投稿せうと思つて居ますからよろしく願ひます（福岡縣の愛讀者高橋しづえ）（記者曰、投稿は急ぐ必要ありません宜しく先づ忠實なる愛讀者とおなりなさい）

○こんなけい紙に書いても宜しう御座いますかどうぞ御答なれがひます弘前登代子（記者曰、よろしい）

○私は山本ふみ子さん岡部千代子さん山本君子さん阪井よしゑさんの四人と相談しまして女子文壇愛讀會を設けました、これから出來るだけ勉强して投書する積りてすからよろしく願ひ升（紀伊倉地とよゑ）（記者曰、好い御企てゞす）

○記者樣私は家事多忙の爲め皆樣のやうに學校へも行かれないで唯此の女子文壇を佛とも友とも思つて愛讀しています拙い物計りですけれど初めて投書いたしました向後間暇に投書いたしますから宜ろしく願ひます投書は別紙の通りて宜ろしいてすか御敎へ下さい（熊本市村聞峯子）（記者曰、お忙しい間にも投書して下さるとはありがたい仕合せてす、お書きの通りな書式はよろしい、なほひま〳〵には御勉强なさいませ）

○記者さん、花守といふ詩集が出ましたいが、詩はみな優美な高尚なのばかりでしようか、御面倒ながら御知らせ下さい（玉簾子）（記者曰、「花守」は好い詩集です）

○記者樣おかしな寫眞お送りいたしますが御用ずみの上お返し下さいますか（相州小田原幸町一丁目八番地井上久子）（記者曰、ありがたう存じます御寫眞は大切に扱ひまして成るべく早くお返し致します何うかお貸し下さい）

○記者樣私は女子文壇程無にいつた本はありません、今迄女子之友なんな少女界等をみてをりましたがどうしても女子文壇にはかないません（十二月。横濱靜枝女史）（記者曰、强ちお世辭ばかりてはありますまい）

○妾は農家てすが仕事の餘暇に拙文を投書しますから以後宜しく御訂正を願ひますよ、妾が昨年十二月の分へ敍事文と抒情文を投書しましたが沒書になりましたか、投書規定に背いてたら敎えて頂戴よ、字の書方がまづいから沒書になるてせうが妾は之て一生懸命てすわ（靜岡縣小笠郡上內田村岩井寺福井美智子）（記者曰、あなたの文字は、はつきりと能く分ります、規則にも背いて居りません此上ともに御勉强なさい）

○私水彩畫を學びたいのてすが當地に先生がありませぬので、それに初めてなので手本を見ても分りません獨習の出來る本があればそれも敎へて下さいお願てす（丹後の小枝女）（記者曰、水彩畫獨習の書物は數種あるやうてす誌友の中でもお持ちの方があるてせうから借りるか讓り受けるかして御らんなさい）

○記者樣過日は美はしい賞品を賜はりまして誠に忝なく存じます、殊に日頃望んて居つた「詠歌自在」て御座いましたのて一入うれしく厚う御禮申上ます猶一層勉强いたしますから宜敷御誘導を願ひます又一つ投稿いたします、何うかお笑ひ下さいませんやうに……（おさしほたる）（記者曰、お望の本が賞品に參りましたのは何より好い工合てした何うか又々好い本をお取り下さい）

○記者さんに申上ます私は尋常小學校を卒業したゞけて皆樣には實にお恥かしう存じますが只今も糊口凌ぎに砲兵工廠に出ていますが知らぬながらに文が出したう存じまして先月から出して居ます併し稽古中てすから若し書方が惡いなら次號て知らせて下さい塵箱に入れられるは元よりの覺悟てす（神田かめよ）（記者曰、本誌の寄稿家に砲兵工廠に出て居られる方があるとは思ひませんてした、職業は神聖なり、文藝は自由なり、飽くまて好む道にお進みなさい、藝は餘の慰めとして）

○失禮な事を伺ひますが誌友倶樂部へはいるにはむづかしいてすか又は會費でも入りますか御手數ても敎へて下さい（府下、島田千代子）（記者曰、イヱ決してむつかしい事はありません勿論會費などえりません只半紙に書いて送つて下されぱよろしいのてす）

○記者樣私は毎月此女子文壇を買つて居りますがなか〳〵よい本てございます事ね命のある限りは私愛讀しませうと思つてゐます今一つなかしな和歌を作りましたから投書を致します（森トミ）（記者曰、御熱心感謝の外はありません）

○記者樣妾此度初めて愛讀者となりましたし拙手の横好きと申ますが妾は文學が好きて〳〵仕方がないヮ歌句は殊に好きよ妾女子文壇とは一生否二世も三世も御友達て妾も投書しますが俳句は此れて好いてしやうか是非御返事を願ひます（かつ子）（記者曰、俳句は之てよろしい二世も三世もとは流石に女性のお言葉と嬉しく存じました）

○記者樣先日は恐妾の申入をお聞き下さいまして有が度う存

じます何分無學の者ですから、御賞めを受る樣な事は少しも思つて居ませぬが之でも、一層勉強したらなんて思つて居るのですかられ、記者よりも妾の熱心を御推し下さいまして。そして此度韓國の寫眞を送りましたから受取つて下さいませ又々澤山送ります（韓國京城旭町上奥田榮子）（記者曰、韓國からの御申越しははる〴〵と承はりました御熱心は敬服です）○記者樣伺ひます（一）あの子米國人の私立女學校、卒業して女子高等師範學校へ入學する事が出來ませうか（二）官費でせうか？自費でせうか？（三）官費、自費共にいくら程かゝりませう（宮城縣拾薺女史）（記者曰、（一）は出來ます（二）は官費も自費もあるとおもひます（三）は只今一寸分りません）○本誌の一番、後に、（投書は不足、未納税は、一切受取らざるべし）とありますが、投書をするのには、稅が入るのですか、此の度はぜひ、お敎へ下さい、お願ひ申ます（水戸市杉田直子）（記者曰、未納稅とは郵便切手のはつてない郵便を云ふのです、稅は郵稅の略）○記者樣に伺ひます各投書の用紙は半紙とありますが原稿用紙てはいけませんか但し一行二十二字詰（星子）（記者曰、原稿紙でもよろしいが二十四字詰に書いて下さい）○記者樣、少々筋違の御願ひで御座いますが、私は和歌を通信敎授で學びたいと思ひますが、何か適當の會が御座いませうか、誌友の誼を以て、御返事を下さいますやう御願ひ申ます（ほたる子）（記者曰、和歌通信敎授の是と云ふものはありません寧ろ獨修書に就いてお學びなさい）

○記者曰、神田の小林櫻花君初め本誌の創立一週年を祝して社者及び記者に叮重なる祝辭を寄せられた方が多くありました、茲に其深厚なる同情を拜謝いたします

○又曰、初めて投稿するについて規定に背いて居るか居ないかをお尋ねになつた方も澤山ありましたが、違つて居れは申上ます、申上げないのは皆規定にかなつて居る事と御承知下さい

○諸孃の交際

○愛讀者の皆さんどうぞ寫眞を送て下さい先着五名に私しの寫眞と繪はがきを送りますから繪はがきも交換願ひます（神戸市兵庫上澤通一め九ノ十三杉浦新子）○妾は尾西の草深き田舍者ですが繪葉書御寫眞文通の交換が致したう御座います（愛知縣海東郡須成村猪飼商店樣方渡邊富美子）○文壇愛讀諸孃の内にすみれの押花御持ちの方がございましたら何卒一本御惠送下さいませ御禮致します（北海道旭川陸軍建築部官舍第八號吉住沖子）○諸孃よ妾は古郵便切手を集めて居りますが皆樣よ外國古郵券及葉書又は本邦紀念切手及貳拾錢以上の最も古きもの及び古葉書の交換を願ます先着の御方五名珍奇なものや多數御送り下されし方に別に繪葉書差上ん（加賀鶴來町ヲ八九近藤方幾代子）○私は愛知縣立高等女學の二年生です秋田高等女學校の今立いま子さんや埼玉の長澤ひて子さんなにとぞ御交際を願ひます（尾張一少女）○埼玉縣伊東香子樣貴女ほんとに大變の御方ね今以て京都へ御一報成さいませんてしよう書信の返事とは遊ひますよ如何の御心なのですか御一報が成りがたくば道德上忍びん所ですが私まて御返送下さいさすれば持主へ返しますから中央に立ち妾の心中如何と思召すや（周防、迷惑女）○御姉樣方にも妾の他國にて友だになきを御あはれみ給ひ深く御交際下さいましな（韓國京城旭町奥田榮子）○私事十月初旬より病氣て別所溫泉に治療中處々より御手紙頂戴しましたが中々病痕苦痛の爲め御返事も御名々に差上ませんて誠に濟みませんでした略儀乍ら誌上て御禮申上ます（長野縣小牧郡中鹽田村上本鄕馬場綾子）○誌友の皆樣に御願ひ申し上ます妾は甚だ交際がすきでありますが諸孃の内で眞實を以て長く御交際下さる方には妾の寫眞先著の方五名差上げます繪葉書の交換も御願ひ申上げます（久留米市新町宮川内ゆき子）○おなつかしい岐阜悦子さま每々繪葉書をあり難とうよ誌友諸姉樣も親しふ御交際を繪葉書寫眞の御交換もして頂戴（京都聖護院町字中河原丹波屋木村はな子）○靑丹よし奈良の片ほとりに住める賤が女よろしく御交際願上まいらせ候倘この地に住まはせ給える本誌愛讀諸姉あるは俳句に志ざし給へる諸孃の御來訪を待上申候トし（奈良市押上藤田藤子方せい子そめ）○親愛なる諸姉よ妾はつまらぬ片田舍に住む淺學不才の者ですが語合う友も無く實にさみしく暮して居りますて何卒以後御心安う願ひます又繪葉書の交換を願ます（兵庫縣城崎郡氣比村正賀仙三郎樣內宮代はる子）○諸姉樣御親切にレター御惠み下さいまして有りがたう御座いましたいたゞきました御方には早速御返事してをきましたが屆きましたか私こん度都合によりまして下の處へ變りましたからどうかよろしく御交さい下さいましな（京都府紀伊郡伏見町字肥後町磯野みさ子）○播州西村むら子樣に申し上げます先日は御寫眞御送り下され有難く存じます妾が御送り申上げました妾の寫眞は着きましたでしようか御尋ね申上げます（久留米市新町征原ゆき子）○私しも第拾號より愛讀者になりましたから諸姉上樣以後は何卒宜しく御交際を願上ます（鹿兒島市清水町十五番地美代花子）○皆樣妾は病氣の爲め札幌へ參つて居りましたのと用事の爲めに參つて居りましたので大そう御無沙汰致しました惡しからず思召下さい（北海道早來本鄕直枝子）○信南の撫子孃長野のわかば孃及び其外の諸姉妾は一人上田城と申す親友あるのみよ御交りを願ます（信州上田二一〇〇神原力秋野玉子）○親愛なる當文壇愛讀者諸孃樣私は片山里に住む淺學の者てありますが何卒文通の交際等して下さいな（上毛多野郡平井村緣野堀越りつ子）○伊豫松山市と其近村の事情や近況なくはしく御知らせ下されし方へは東京の繪はがきを差上ます（新聞紙にてもよし）故鄕は何年都に居ても忘られませぬから（東京小石川區柳町二四高木方宮木房子）○拙なき物御望み下すつた諸姉樣よたくさんの事ですから選にもれた方に一々御返事出す事が出來ません故十人ばかし御返事致しました殘りの御方は惡からず外に御交際を御望みになつた方妾は不幸なる身ですからかなへる事が出來ませんどーぞ御ゆるしをねがひます（王子、みどり）○近江國大津市土橋町十七番地の小栗よしえの君は妾の大の親友にて候同人は緣々誌友の一人たらん事を望み居りし人なれば何卒以後妾と共に末永く御交際あらむ事をねぎ

るになむ絵葉書の交換などの御なかま入りもせさせ給ひてよ（本郷元町一の十二七星方佐野よしえ）○皆様私も愛讀者の一人でございますからいごよろしく御交際をねがひます又えはがき玉章などの交際もいたします又編物お持ちの方はどーぞおかし下さいまし私も御禮として羽二重のよだれがけ及びれこの巾着などさし上げます（高崎市白銀町二番地岸とも子）○妾も女子文壇之愛讀者に加はりましたからどうぞ後々も御交際のほどねがひます（土佐越知町六八和田豐子）○秋田路叔母様から戴きましたから誌友様へ十名限り横斷して差上ます限外の御方へは絵はがき當地新聞雜誌御返します寫眞絵はがき新聞雜誌で御申込を（秋田縣大曲町高畑四二五宮樫りつ子）○麹町重田春子様寶女様の御芳名は度々新聞紙や雜誌で拜見致しまして常々御慕ひ申上げました何卒之から後末長く御交際願ひます（京橋白百合）○あゝ親愛なる誌友皆さん妾は眞に淺學の者で御座ります何卒御愛し御教へ末長く美くしき御交際のほど願上ます（東京牛込南榎町十六遠藤北舟）○皆様日本のでも西洋のでも珍らしき古切手を御恵み下されば絵はがきの極美しいので御禮申し升然しあまり有ふれたのや汚損のはげしき品には失禮ながら御答へいたしません（武藏秩父大宮本町一丁目白菊女史）○寫眞及び栞は好ですから御送り下さいませ又吾田春子様淺野しげる様古河松江様御英名はしば〳〵本誌にて承り乍陰御慕ひ申して居ります誠に不束者てすが以後よろしく御交際願ひます（静岡縣濱名郡濱松新町川合ゆき子）○諸嬢よ、御玉章や、繪葉書や、地方の名所景色寫眞、及新聞、雜誌等を御送り下さい、妾もきつと其れ以上の御禮を致します、亦本誌一巻一號より四號迄御所持の方は御送り下さい御禮は致します、（京都夷川通東洞院東、山崎方、玉川碧子）○大坂の藤田よし子さん私拾一月の六日に本誌一號から九號迄さし上げましたが何の御返事もありません其後はがきもさしあげましたが着しませんのですか大至急知らして下さい（信濃上高井郡須坂町佐藤安子）○田中悦子吉田信子栗栖信子井上ゆたか子杉田すみれ子山田千代子田

島かほる子吉田しげ子諸姉様方早速御返事ありがとう存じます他の諸姉様お心安く御交際下さい又絵端書の交換も（備後國尾道市海岸通り岩崎しげ子）○皆さんお寫眞やお手紙のお交換を願ひます（遠江國見付町東坂鈴木信太郎様方土屋松江）○讀者諸君交際を願ひ升（秋田縣角間川町黒丸忠四郎方黒丸登美子）○太田えい子様はと印のため御住所不明御しらせ下さい、横山たいよ様住所御しらせ下さい、（廣島高田甲立深瀬箕岡ちと子）○誌友諸嬢様方平和の光かゞやく明治三十九年を迎へまして誠に御目出度ございます今年も相變らず御交際を願ひます私は人の世はなれし片田舎者です（越後中魚沼郡水澤村志賀みよ）○但馬の小西八百子様先日は結構なる書早速御贈り下さりまして有がたう其御禮のため憐なる少女に萬事言ひふくめて差上げましたがどうか妹とも思召て御側に置いて折角可愛がつてやつて下さい。そうして岐阜の野菊様に申上げますが先日はよく私如き者の姓名及住所御問ひ下さいまして感謝の外はありませんどーか此後御交際を願ひます（岐阜縣惠那郡山石村町木村なつ子）○誌友倶樂部をかりて一寸大阪の方に申し上げます近頃當地に同志の方がふゑたのは誠に悦ばしい事で御座います、それで我々大阪の者ばかりで女子文壇購讀會を設けて益々斯道の發達を計つてはどうでしよう（大阪はるみ）○皆さんお寫眞や編物項戴な妾も屹度差上ますから妾は編物が大好で絹製な種々持て居ます栞りは六十餘ありますのよお望の方はドシ〳〵仰しやいませ美くしい絵葉書か自筆のでれ（山城乙訓郡乙訓村井内林巻子）○大阪南區の吹本きく様絵葉書くださつて有難ふ返事を出しましたがもし着きましたてしようれ新潟市の小島ゆき子様京都府の松田濟子様北海道の小鹽濟子様是れから交際しましようれ返事をくださいよ（大和音無の里利子）○賢明なる諸嬢様私は利子の妹ですからどうか御見捨なく御交際を願ひます（音無の里濟子）○皆様妾は至てつまらん者てすが此度より女子文壇愛讀者となりましたから後來は諸姉様と御交際が願ひたう御座います（岡山縣久米郡稲岡南村字南庄杉本こま子）○愛讀

者の君並びに誌友の諸嬢様妾は當文壇を愛讀なする片田舎に住む愚な者てすが此後よろしく御情を以て御交際を伏して御願ひ申ます（福島縣岩代國耶麻郡慶德村穂積やす子）○私は親の職務上此様な片田舎に住んで居りますが、故郷は、和歌山で御座いますので、紙上て同國の御方の御名前を、拜見致しますと、誠になつかしふ御座います、どうぞ此後御交際を願ひます、それに、お寫眞も是非願ひます、ぶつゝかては御座いますが、私も差上ますから（山形市新築加藤幸子）○誌友諸嬢にして自筆の、式紙、短册、交換下さる方なきや即時御返しいたしますから（堺市櫛屋町鶯見かすみ）○皆様方と寫眞や絵はがき御交換を望む御方は下名へ（越後國三島郡、片貝村高梨、二〇四、山崎領子）○愛讀諸姉様宜しく御交際をして下さいな（埼玉縣北足立郡大砂土村大和田見富弓細沼藤代）○播磨の西村むら子様、おうつしゑありがたう、妾はづかしいわ、大阪の堅田きく子様、おのぞみとあるから、寫眞あげましたのに、なんのことは、ありません、大方君いたらうと思ひますのに、さりとは、お恨めしい（陸中森森子）○妾が當文壇を愛讀する様になつてから皆と交際致した事は至つて稀てした以後は淺學の妾にもどーぞ交際を（千葉縣長生郡帆丘町廻田高山靜子）○皆様私は高等四年生です絵はがきや手紙を交かんして下さい（相摸厚木町酒川ふさ子）○宇都宮小幡町の青柳謙子はどうなすつたのですか待ちに待つてましたが今に至る迄返事が來ないのですもの人が惡いではありませんか（甲斐待ち設け人）○皆様絵葉書や寫眞を交換願ひます又文通もして下さい何時でもよろこんで御返事さし上げます（越後國古志郡福戸村字古新田佐藤龜吉方紫星女史）○愛讀者の諸嬢様方妾も本號から御仲間入りいたしましたからどうぞ津輕者と御見捨てなく御交際をねがひます左様なら（弘前市登代子）○皆さん新聞雜誌の交換や絵葉書交換などして下さい二十名限り雜誌や小說を差上げます絵葉書には俳句を書いて項戴（信洲上田町山品山崎みき子）○皆さま、私は遠く隔つた諸嬢と編物、絵葉書、書籍とか、其土地に就ての珍らしき事柄

などを互に交換したいと思ひます、眞心を以て御送り下さい（山城綴喜郡田邊村字薪一〇三岡山ゆき子）廣島林きくの樣滋賀長井きむ子樣常陸秋山欽子樣周防寺内つき子樣大和栗山たか子樣埼玉大木さく子樣静岡多田眞紫子樣御親切に御手紙頂きまして有がたう御座いました女子文壇は送て頂きましたから御かへし致します御申越の本先に言ひ越し下さつた方だけ送ました最早有ませんで送らなかつた方は許して下さい（小西はろ子）〇皆さん妾は、愛讀者の一人で小學校に通勤してあるものでありますが、よろしく御交際を、お願ひいたします（遠州見付東坂鈴木信太郎樣方土屋松江）〇諸嬢樣お寫眞や編物頂戴な成べく美しいのをね妾も屹度綺て返し升よそして繪葉書交換は大好皆樣どーか御肉筆なれ葉お望みの方は上ましよー（京都府乙訓郡向日町局下井之内林波留子）

〇剽窃詩文の注意

〇二卷一號と一卷十二號との剽窃詩文を左に擧げます最も十二號の分は前號に發表更に左の通り注意が來たのです

△二卷一號の分

〇中村白露。　小説欄の埼玉縣中村白露「友のまごゝろ」は明治三十七年二月發行「少女界」お伽噺笠間醉雨君作「なさな心」を少し縮めたるに止まる

〇かく女。　抒情文秀逸兵庫縣姫路市かく女の「幸なき身」は「中學文壇」第百四十四號上毛の露の舍君の「憂愁の身」といふ新體詩の句を殆んど取りて文にぜしものなり

〇伏鼎女史。　論文秀逸出雲秋皐女史の「月」は昨年九月七日「讀賣新聞」掲載の十人十色秋皐氏の「月」を十數字違はして投稿せしものと認めらる

〇森靜緒。　俳句秀逸千葉縣森靜緒の「織姫の從者――」は「文藝倶樂部」八卷十二號の地賞の作と同じ

〇夢弦女。　俳句上總夢弦女の「朝の月――」の句は「ハガキ文學」二卷一號天賞の作と同じ作者も同じ二度出せしものか

〇田所きよし。　圖畫特別第二賞群馬縣新田郡綿打村大字金井田所きよしの「つり」は明治三十七年八月「中學世界」九十九頁の圖畫と相違なし

△一卷十二號の分

〇たれみ。　新體詩欄の秀逸大阪たれみ「海の幸」は「電報新聞」募集新體詩海の幸一等當撰信濃五味三治郎君の作に同じ

〇飯塚きみ子。　新體詩欄秀逸碓氷飯塚きみ子の「藻の花」は「新聲」九編二號五十九頁平井晩村氏の作を其まゝ投ぜしものなり

〇きみ子。　和歌欄四十九頁下段群馬縣きみ子の「夕日さす――」の歌は「女子文壇」一卷一號人賞萩谷ちよ女の入江の秋に同じ

〇梅田糸子。　同じく五十二頁長門梅田糸子の「故里の――」の歌は「女子文壇」一卷一號地賞作山美子の雁を取りしものなり

〇杉田孤泉。　俳句欄の終り大阪杉田孤泉の「秋淋し――」の句は「秀才文壇」五卷一號俳句地賞東京岡田道一君の作と同じ

〇中島幸子。　俳句欄の岡山中島幸子「山茶花に――」は「萬朝報」十一月頃の分にあり

〇伊東祥子。　はがき文秀逸五番目武藏伊東祥子の「紅梅」は「萬朝報」三十七年二月二十一日白字文九回當選芝、宇野嘗君の作と同じ最も此文は「百字文選」七十一頁にもあり

△一卷十一號の分

〇久富とく子。　抒情文特別第一賞熊本縣久富とく子の「不運の少女を弔ふ」と題する一文は熊本師範學校内京陵會發行の雜誌「京陵」（三月二十日發兌第二號）なる柴田天煙君の「厳頭弔少女」の文と一字一句の相違なし只原文起首の三四行を削りしのみ

白日、恥づべき名を曝したるものは以上の如し扨て今回も例に依り右の注意を寄せられたる諸嬢に其勞を多謝し且其芳名を左に列記します

〇撫子〇熊本、森勝輝〇常陸、萩の舍樂〇横濱、政子〇池田都子〇德島、住友とき子〇越後、かるかや子〇埼玉、大久保八重子〇千葉、鎌田壽賀子〇信濃、淸水りん〇備後、後藤むらさき女〇女子文壇愛讀者〇八王子、田間子〇伊豆、上原久〇神田、桑原つる〇下總、成嶺の人〇常陸、愛子〇外に失名者數名

編輯たより

△妃殿下並に三皇孫殿下御近容。　本號卷頭に揭げまつりし皇太子妃殿下を始め三皇孫殿下の御寫眞は特に東宮御所御秘藏の分を本社に御貸下げの榮を賜はつたもので、最近の御撮影にかゝる、之を揭げまつるは本誌の光榮とする處です。

△定期増刊。　豫記の如く愈よ本月十五日本誌定時増刊「きさらぎ」を發刊いたします、内容は豐富、體裁は立派、昨年來紙數制限の爲に載せ得なかつた多くの寄稿と新しく選拔したる分と合せて披露します特に作文作詩の爲に諸嬢の心得となるべき有益なる附錄を添へます、發行の上は爭ふて御覽を乞ふ。

△懸賞文集。　女子文壇懸賞文集も廣告にある通り美くしき一册の本となりました表紙は彩色數度刷の優美なもので紙質も好く活字の誤正し諸嬢の座右に置いてはづかしからぬ本となりました、殊に定價の低廉なことは出版界無類です、之れ本社か聊か讀者平素の愛顧に酬いんとする微衷てす。

△誌友倶樂部に就て　寄稿非常に多く到底限りある紙面に載せ切りませんて「繪葉書編物交換」と「圖書交換」の二欄だけ編輯はまとまつて居りますが次號（増刊）に廻しました。

B. In this crowd, I can not see them. There they are. Well, I'll pay them while you get our tickets.

A. Shall I buy return ticket?

B. I think so. Don't go to that ticket-window. You can not get second class tickets there.

A. So it is. I am losing my head to-day. What is the matter with this big crowd to-day?

B. There must be some prominent people going away.

A. That must be it. Their friends are here to see them off.

B. We are losing time. Go quick for the tickets and when I pay the men, I shall wait for you right here.

A. Look at the long line at the window. Any way, I shall not let you miss the train.

B. Be careful that your pockets will not be picked.

乙. 此混雜で見當りません. アー彼處に居ります. 貴女が切符を買つて入らつしやいますうちに, 私が拂ひましよう。

甲. 往復切符を買ひましよか?

乙. その方がよう御座います. 其賣口は駄目で御座います. そこでは中等は買へません。

甲. 左樣々々. 今日は氣が如何かして居ると見えます. 此混雜はマー如何したのでしよう?

乙. 何人か, 餘程高貴の御方が御出立なのでしよう.

甲. 左樣でしよう. 御友達方が御見送なのですよ。

乙. 時間を無駄にして居ります. 早く切符をお求め下さい. 私が車屋に拂つたら此處で御待ち致します。

甲. 長い列をマー御覽なさい. 兎に角汽車に乘り後らす樣な事は致しません。

乙. 紙入を掏られなき樣に御注意遊ばせ。

He rode forth, but before long the horse began to limp. It had not limped long before it began to stumble, and it had not stumbled long before it fell down and broke its leg. The merchant had to leave the horse where it was, and unstrap the bag, take it on his back, and go home on foot. And he did not get there until quite late at night.

"That unlucky nail," said he to himself, "has made all this trouble."

Make haste slowly.

(German Household Tale)

それから又乗出したが，霎時すると馬は跛行ひき初めた．跛行ひいて居るかと思ふと今度は躓き出した．躓くなと思ふて居るとストンと倒れて足を折つた。商人は其處で止を得ず，馬を倒れた儘にして居いて，財布を脱解いて自分の肩にかけ徒歩で家に歸る事になり，夜中頃まで家へ着けなかつた。

「あの不祥い釘めが斯んな騒動を仕出かした」と獨言を云ふた。

徐かに急げ。

At Shimbashi Station.

新橋停車場に於て

A. At last we are here.

B. I am so glad. I thought we might miss the train.

A. So did I. What is the exact time for our train?

B. Nine, thirty-five. And we have fifteen minutes yet.

A. Let us buy our tickets at once.

B. Did you pay the *Kurumayas*?

A. I have forgotten it. How stupied I am! But where are they?

甲．トートー着きました。

乙．嬉しい事．多分乗後れると思ひました。

甲．私もそう思ました．汽車はカッキリ何時に發車しますの?

乙．九時卅五分．まだ十五分間御座います。

甲．直ぐに切符を買ひましよう。

乙．一寸，車屋に御拂ひになつて?

甲．忘れて居りました．何んて呆然でしよう．何處に居りますか?

Make Haste Slowly.

A merchant had done good business at the fair; he had sold his wares, and filled his bag with gold and silver. Then set out at once on his journey home, for he wished to be in his own house before night. He packed his bag with the money on his horse, and rode away.

At noon he rested in a town; when he wanted to go on, a servant of the house said,—

"A nail is wanting, sir, in the shoe of its left hind foot".

"Let it be wanting," answered the merchant; "the shoe will stay on for the six miles I have still to go. I am in a hurry." In the afternoon, when he once more got down and had his horse fed, a servant of the inn went into the room to him, and said,—

"Sir, a shoe is wanting from your horse's left hind foot. Shall I take him to the blacksmith?"

"Let it still be wanting," said the man; "the horse can very well hold out for a couple of miles more. I am in a hurry."

徐かに急げ

某商人が市で仲々得利けた. 品物は賣切れて, 財布には金が一杯になつた。そこて, 商人は夜までに家へ着かうと思ふて直ぐに出掛けた, 財布を馬に付け自分も乘馬して。

晝頃に, とある邑で一休みをして直ぐに又出立しようとしたら, 休憩所の召使が云ふには,
「且那樣, 此馬の後足の靴に釘が一本御座いません」。
「無ければ無いてよいは. まだ六哩行かなけりやならんが, 其位は靴は附着て居るだらう, 己は大急だから」。
午後に又下馬して, 馬に喰はさせた處が, 休憩所の者が部屋に這入て來て云ふには,

「且那樣, 御馬の後足の靴が取れて居りますが, 近邊の鍛工に伴れて參りましようか」。
「取れて居たら其儘にして置け. モー二哩位馬は行けるよ. 己は大急ぎだから」と商人は返事した。

英文

澤田梅子閲　河井道子述

Snowflakes.

Whenever a snowflake
leaves the sky,
It turns and turns to say
"Good-bye!
Good-bye, dear cloud,
so cool and gray!"
Then lightly travels
on its way.

And when a snowflake
finds a tree,
"Good-day!" it says—
"Good-day to thee!
Thou art so bare and
lonely, dear,
I'll rest and call my
comrades here".

But when a snowflake,
brave and meek,
Lights on a rosy
maiden's cheek,
It starts—"How warm
and soft the day!
'Tis summer!"—
and it melts away.

Mary M. Dodge.

雪片

雪片空と　離別(ワカ)るとき
後振向きて　告ぐ名殘,
「銀の冬雲　いざさらば」
かくて片々　降るなり。

雪片木樹に　出逢ひなば,
「恵あれかし　汝がうへに.
淋しき賤の　汝が許に
宿りて友呼び　樂しまむ」。

雄々し優しの　雪の花,
臙脂さす乙女の　頰にふれば,
「あな,溫暖の　日好りかな!
夏ならめ」とて　消ゆるなり。

募集課目

選評大家（文學士沼波瓊音先生、廣津柳浪先生、河井醉茗先生、佐々木信綱先生、巖谷小波先生、山中古洞先生）

○論文　○抒情文　○叙事文（各半紙廿四字詰三十行以内）

○消息文（半紙廿四字詰二十行以内）　○はがき文（端書かな付廿四字四行）

○短編小說（半紙總かな付廿四字六十行内）　○新躰詩（半紙一枚十句以内）

○和歌（半紙二ツ切一枚一首）　○圖畫（一寸の二寸判風俗景色）

○新舊俳句（はがき判紙一枚一句）

但着色無用可成鳥皮紙を用ゆ

▲各欄とも一人佳作一章宛投稿の事

賞與品

○論文○抒情文○叙事文○消息文○小說○圖畫の當選者へは左記の相當賞格品選定の上贈與すべし

▲天賞　金壹圓五拾錢　▲地賞　金壹圓　▲人賞　金五拾錢

▲特別賞▼（正金を呈す）一等金三圓、二等金貳圓、三等金壹圓五拾錢

○新體詩○はがき文○和歌○俳句の當選者へ贈與品左の如し

▲天賞本誌三ヶ月分　▲地賞同二ヶ月分　▲人賞同一ヶ月分

▲特別賞▼（正金を呈す）一等金壹圓、二等金七拾錢、三等金五拾錢

每回の本誌により當選者は贈品に差支へざる條前以て住所氏名を通知あれ○賞品は發表二ヶ月の後に故障なき者へ美麗なる名譽褒狀を添へ贈呈すべし

【投稿メ切＝每月十五日】

▲嚴守すべき投書規定必一讀を要す

○投書は各欄とも決して政治的時事論に渉るべからず、○用紙は規定の紙に限る○投書は一行廿四字詰に認むべし、但し句點も一字に數ふべし○投書には題の下には必らず本誌に倣ひ住所姓名を明記し、書體は楷書にて假名は平假名を用ひ明瞭なるを要す○各種の投書は必ず別に認むべし○封筒には『原稿在中』の文字を記すべし○投書の中には他の用事の文句を記すべからず○投書には各自句點を施すべし、圈點は一切施すを禁ず○投書は他人の作物を剽竊するを禁ず之を犯したる當選文は無効たるべし○投書は一切返附せず○此規定に背く原稿は一切沒收す○投書は不足、未納税は一切受取らざるべし○名種の原稿（全封）取纏郵送するときは開封にして差出せば卅匁迄二錢にて事足れり

【最寄書店になくば直接發行所へ注文をこふ】

定價

女子文壇（每號水彩畫繪葉書寫眞口繪數葉挿入）每月一回發行　第二卷より增刊年四回	
一册（大判百二十頁）	前金拾錢
六册	前金五拾七錢
十二册	前金壹圓八錢
十六册（附增刊）	前金壹圓八拾四錢

内地は直接申込に限り郵税全廢無料とす

外國行郵税共拾四錢

注文心得

○本誌は前金の外送本不致候○代金過不足のなき樣注意被下度候○領收書は一切差出さず候○御注文每に何號より何册及御住所氏名等は詳細に御認め可被下候○郵劵代用は必す定價の壹割增に願上候○御問合は返信料付に願上候▲御申越の號數賣切の時は近刊の分を以て送本可仕候

▲缺本にならぬ法▼：前金拂込むに限る

廣告料金

種別	一頁（二十四字六十四行）	半頁（二十四字三十二行）	一行（五號字二十四字）	申込發行前十五日
普通	金拾五圓	金八圓	金參拾錢	
特別（表紙うら面口繪對面）	金貳拾圓	半頁以下は御斷申上候	効顯著大	

▲廣告特約取次（神田區千代田町二番地　博報堂）（京橋區南佐柄木町二番地　日本廣告株式會社）

明治三十九年一月廿九日印刷
明治三十九年二月一日發行

無比廉價金拾錢

（二卷第二號）

不許轉載

編輯兼發行者　東京市京橋區大鋸町十一番地　野口竹次郎

印刷者　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　石川金太郎

印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　株式會社秀英舍

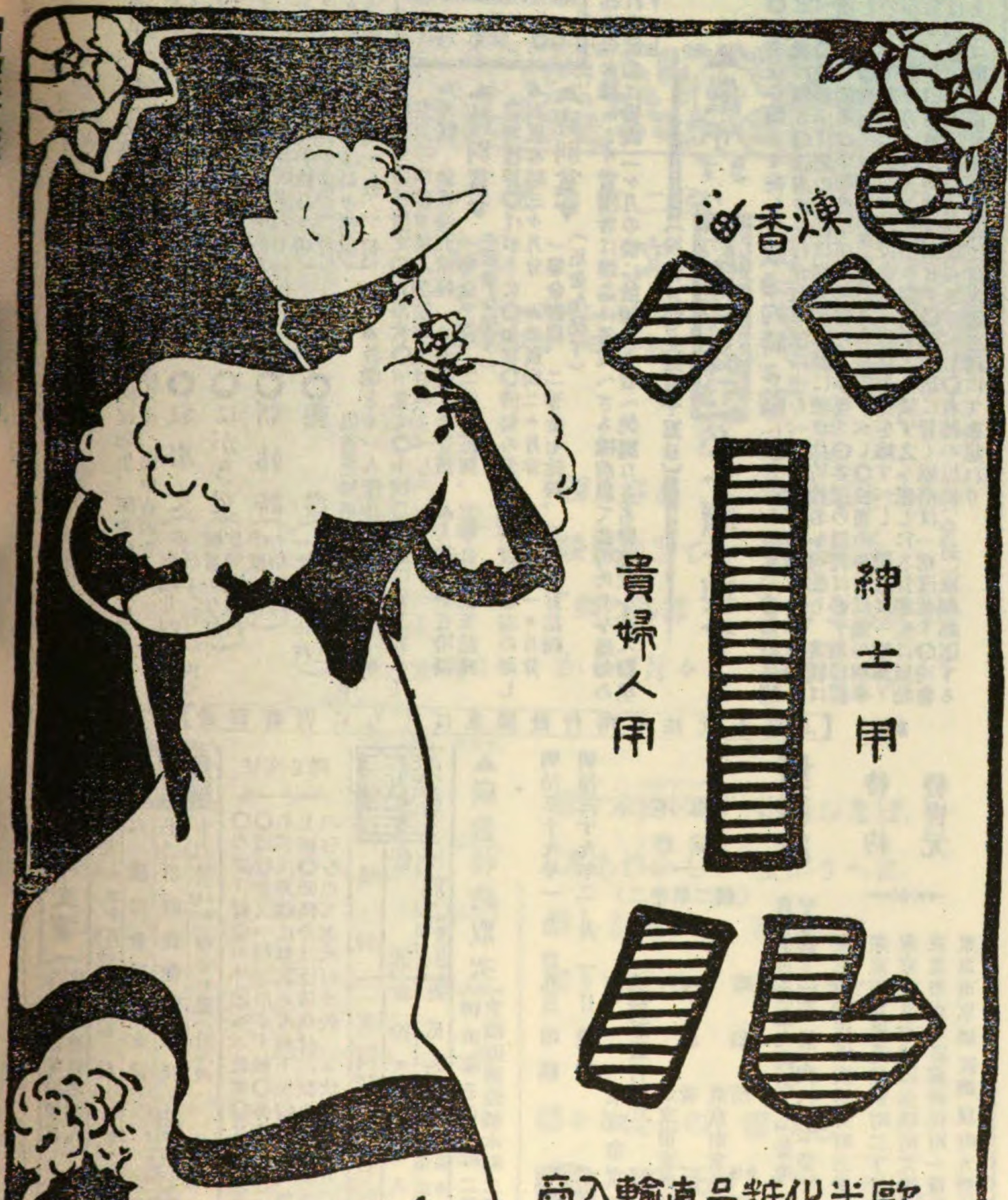
發行所　東京市京橋區大鋸町十一番地　電話＝【本局六〇七番】　女子文壇社

特約發賣元

東京市神田區表神保町三番地　東京堂書店
東京市京橋區尾張町二丁目丗　東海堂
東京市日本橋區吳服町六番地　北隆館合資會社
東京市神田區裏神保町一番地　上田屋書店
東京市京橋區鍋屋町九番地　瓦明堂

（宮本製本）

明治三十七年十一月第三種郵便物認可



パール定價　大瓶金四拾錢　小瓶金貳拾五錢
（女子文壇の讀者により御注文の節は其旨書添へたまふ）

（東京秀英舎印刷）